
月下美人

かしわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下美人

【Nコード】

N7177H

【作者名】

かしわ

【あらすじ】

貴族の娘に生まれたからには、望まない婚姻を強いられるのは、覚悟の上だった……けれど、突きつけられた婚約者は、自分の半分にも満たない幼子で——生涯を遂げる者がわたしでないとしても、わたしは全力を賭して、あなたを支えます……年の離れた二人の恋物語

序章（前書き）

はじめまして、かしわ、です。

拙い文章になりますが、お付き合い、どうぞよろしくお願いします。

序章

王宮の中央庭園。初夏の彩りを見せる木々は、宵闇にその色を映している。等間隔に置かれた篝火が、辺りをほんのりとあかく照らす。平素は、静けさの漂う庭園も、今宵は多くの人々で溢れかえっていた。各々が華麗な装いを身にまとい、場に漂う煌びやかな雰囲気酔いしれていた。

夜会の華は、美しい乙女達だ。彼女たちも、それを自ら理解しており、こぞつて身を美しく着飾る。彼女たちは大抵2、3人で輪を作り、くすくすと噂話に花を咲かす。

その内容は、意中の男性のことであつたり、誰かの恋路についてであつたり……どれもが甘美な色を帯びている。

けれど、その裏では、同じく政治の策略が巡らされ、着飾った彼女たちも、その一端を知らず知らずのうちに担つていくのであつた。

光と影。甘美な恋物語と、その裏で巡らされる政略は、まさに表裏一体の関係。

その情景をひとり、賑わう輪から離れた場所で見つめるものがあった。

琥珀色の髪は、丁寧に結いあげられ、唯一垂らされた一房は、篝火の明かりに照らされ、艶やかな光を放つ。肌は白雪のように透明で、同じく明かりによつて、ほんのりと色づいていた。翡翠色の瞳は、静かな光を湛え、彼女の知性を露わにする。瞳は、特定の何を捕らえるでもなく、ただゆっくりと景色を包みこんでいた。

他を圧倒するほどの、気品と美しさ。そのためか、一人で佇むはずの彼女に声を掛けようとする者はいなかった。

ただ、遠巻きにして、その様子を窺い知るのみであつた。

片手に持つグラスを傾け、一口、甘く芳しい液体を含む。すでにそれは大気に温度を吸われ、体温と大差がない。

少し、気落ちしたけれど、新しいものを取りに行くほど欲しているわけではない。それに、動いてしまえば、折角作り上げた緊張の糸が切れてしまう。あっという間に、周囲を煩わしい者たちに囲まれるだろう。

二つを天秤にかけた上で、二口目を口へと運んだ。

「ひゃっ」

不意に、冷やりとしたものが頬に当たった。仰ぎみれば、濃紺の瞳とぶつかる。

「どうぞ」

不意を突いて、頬に冷えたグラスを押しあてた相手は、悪びれることなく、薄く笑みを浮かべている。そのまま、グラスを彼女の前に差し出した。

「フェリオ殿下！……悪戯はやめて、みつともない声を上げてしまったじゃない」

むっとした声を上げながらも、差し出されたクラスを受け取る。冷やりとしたそれは、肌に心地よい。

フェリオと呼ばれた相手は、彼女が漏らす苦言にあてられた様子もなく、当然のようにもう一方のグラスを彼女の手から掠め取り、傍にいた給仕にそれを渡した。

「いや、シエナが欲しそうだったから。違う？」

「……違わないけど……。もう少し普通に渡して欲しかったわ。本当に——」

隣に立つフェリオを見遣る。首を上げねば合わせることでできない瞳。シエナの頭二つ分は高い位置に彼はいる。

「あっという間に追い越した癖に、いつまでたっても大人げないのだから……」

ほう、と溜息を零すシエナに、フェリオはほんの微かに眉をひそめた。それは、あまりにも一瞬のことで、気付くものは誰もいない。

「そう言っな。一人で退屈そうにしていたから、少し興じてみようと思ったただけだ。気は紛れたろう？」

「お氣遣いありがとうございます。……そんなことより、あなた、ここにいていいの？」

「何が？」

「わたしなんか構っている暇があるのかってこと！月に数回しかない夜会なのに、目的の王太子がこんなところで油を売っている、いらした方々に申し訳ないわ」

「十分動いたさ。そんなときに、片隅で佇む優美な令嬢に目が止まっただけのこと。いかがです？私とダンスなどは？」

「からかうように、ひらりと右手のひらをシエナの目前に差し出す。その動作は華麗で、思わず引き寄せられて手を重ねそうになる……のが常人だろう。けれど、彼と長い時を過ごしてきたシエナにとって、それは既に意味をなさない。」

「そっけなく、差し出された手にそっぽを向く。」

「……どうぞ、ご自由にしていらして宜しいのよ。わたくしはお氣を使われなくても、十分に楽しんでおりますから」

「つんと、澄ましたように告げるシエナの横顔はかがり火に照らされて、彫像のように美しい。」

「フェリオの返答がないことをいぶかしんで、背けた顔を戻す。フェリオは先ほどまでの軽い気配を消し、固い面持ちで、シエナを見つめていた。」

「シエナ。私がいては邪魔か？」

「まさか。むしろ、殿下の方が退屈するのでは？もっと年端の近い方々とお話になった方が——」

「いらぬ氣を回すな。彼の少女たちと何を話せというのだ。媚を売ることにしか興味の無い者たちとなど——」

「殿下！お言葉が過ぎます……」

「フェリオの言葉を諫めて、鋭い声を放つ。彼女が時折見せる強い光に、心の底まで見透かされるような思いがする。捕らえきれず、視線を逸らしてしまう。」

「……すまない。しかし、ああも甲高い声で切れ目なく話されると

……。少し、暇をとつても良いだろ？」

「本当に、仕様のない……暫しの間だけよ？」

素直に反省の言葉を述べるフェリオに微苦笑しつつ、柔らかな声で、休息を許した。

立ち並ぶ二人の姿に、庭園の空気は一変する。

美術家が手掛ける彫像のように、気品に溢れたその佇まいにだれもが嘆息を漏らす。

距離を置き、二人を遠巻きにして臨む人々。それは、必ずしも好意ばかりが向けられているわけではない。

嫉妬、策略、様々な感情が入り混じる王宮。その縮図が今この場に展開している。

若き王太子は、あと数カ月で17を迎え成人の儀を終える。

未だ正妃を迎えていない彼の行く末、それはまだ未知数。

隣に立つ翡翠色の瞳を持つ一人の女性

エルセリア皇太子の婚約者

シエナ・イベルス

彼女の存在も、また、未知数。

1、天上から届く声

国有数の有力貴族の娘に生まれた。だから、とうの昔に覚悟は決まっていた。

遅かれ早かれ、どこぞの貴族と娶わせられるのだろう——と。恐らくそれは、自分よりもはるかに年の離れた相手だろう。もしかすると、既に奥方を持つ者かもしれない。

父と呼べるほど年の離れた、見知らぬ男のもとに嫁がねばならない、それは想像するだに恐ろしかった。

けれども、シエナにとっては、素敵な殿方に出会い、己が思いのまま結ばれる……などという夢物語を巡らすよりも、寧ろ現実があるがままに受け入れ、覚悟を決めることの方が、よほど心を軽くした。婚姻はこの家に生まれた義務だ。他の者よりも豊かな暮らしを送るには、それ相応の責務を要する。

幼き頃から自然その思いは心に刻まれ、シエナに染みついていた。だから、14を迎えた朝、父から告げられた言葉はすんなりとシエナの心に落ち着いた。

生誕の日の朝、毎年繰り返される祝いの言葉は、ありふれてはいるが、子を思う親の心が込められていた。両親の寝室の手前、控えの間には、まだ幼い面影を残す少女とその両親が詰めていた。

琥珀色の艶やかな髪を肩まで垂らし、薄い碧のドレスを纏う少女は、小さくその場で腰を折り、一端の淑女のように振舞う。幼い彼女の姿は微笑ましいもので、可憐、という言葉が相応しい。しかし、その面は14にしては伶俐であり、翡翠色の瞳には、知性が溢れんばかりである。

「おはようございます。お父様、お母様」

「おはよう、シエナ。そして、おめでとう」

頬笑みをたたえ告げられる祝いの言葉に、シエナは初めて年頃の少女らしい笑みを浮かべた。可憐な薔薇が蕾を開くかのような笑みは、見る者の心を温かくする。

彼女が漂わせる、大人びた雰囲気からは窺い知れないほどの、柔らかく何物も蕩かすような笑みは、稀にしか見られないものの、必ず周囲の者全てを魅了した。

けれど、この日は状況を異にした。

彼女の笑みを見た母は微かに眉を歪めたのであった。満面の笑みをたたえる父とはあまりにも対照的な……。

母の変化に気付くことのない父は、上機嫌を隠すことなく言葉を連ねた。

彼のこの一言が、シエナの運命の輪を巡らせることになると思身だけが確信して。

「シエナ、心して聞きなさい」

「はい」

父の喜びにあふれた声に触発され、シエナもまた明るい色を含む返答を返す。それに、深く頷き、父は口を開いた。

「お前も14になった。学に心を傾け、常に精進を欠かさぬお前は、既に教師の手を要しないと聞いている。女性の嗜みである、刺繍などは手を煩わせるらしいが……しかし、十分に女性として立派に成長したといえる。シエナ……お前の婚約が決まった」

父の言葉から受けた衝撃は、一瞬だった。あまりにも早い……。その一瞬の思いは、春に吹く一陣の風のようにシエナの心を通り過ぎていく。その後に残るのは、ただ、静けさのみ。

『婚約』

言葉は静かに心に舞落ちて、しつかりと刻まれる。覚悟は、既に出ていた。

「はい、父上。わたくしの気持は既に決まっております。……この家に生まれたということ、覚悟は既に」

「……やはり、お前は聡い」

薄く浮かべた笑みは、シエナの聡明さを評価するものか……それともその先を案じてなのか。

父から告げられた時点で、『婚約』が変わることはないだろう。覚悟の上で、一つシエナの心に引つかかる。ごく自然な疑問だった。

「ただ、一つ伺いたいことが……」

「なんだ？申してみよ」

「相手の方は……お名前を何と申すのですか？」

シエナの言葉に、父は満足げな笑みを浮かべた。それは、この時で最上の笑みだった。

「シエナ、お前は本当に幸運だ。最上の縁をお前は与えられたのだよ。お前の生涯の夫となるものの名は……——フェリオ……フェリオ・ルオ・タクティス・エルセリア……」

告げられた名は、シエナの予想をことごとく裏切るものだった。予想など、想像など出来るはずがない者の名。

エルセリア——それはシエナの住む国の名。

それをいただけるのはただ一つの血筋のみ……。ルオ 正統な・タクティス 皇子——。

今、その名を戴けるのはただ一人だ。それは……

「シエナ。お前は、フェリオ王太子の正妃となるのだ」

宣告のごとく告げられた名にも、頭は拒否反応を示す。父の言葉が信用できないわけではない。信ずるよりも、疑いの方が勝るだけ。

なぜなら、それはあまりにも、あまりにもありえないことであつたから……。

放心したように、その場の何物もとらえていなかった瞳に微かに色が戻る。絞り出すように出した声は、掠れていた。

「お父様……それは……それは、ありえません。フェリオ王子と婚約できる分けがないのです。だって、だって彼は……！」

辿り着いた、弾き出した思考に、シエナ自身が戦きそうになり、言葉が途切れる。

そして、力尽きたようにその場に崩れ落ちた。

「…まだ、7つにもならないはずです……」

翡翠色の瞳は、ガラスに映る朝日のように、ゆらゆらと揺れていた。

からくりは、単純だった。

父は、やはり娘を政治の道具として利用したのであった。それを、できうる限り、最大限の効果を発揮できるときに……。

父は英傑ではない。娘の贔屓目を差し引いても、それは明らかだった。

言ってしまうえば小物。ただ、血筋に導かれ、今の地位へと辿り着いただけ。

しかし、小物には小物の知恵の働かせ方があるのだ。父はそのあたりの鼻がよく利いたのかもしれない。

彼が今いる地位は国の中枢に属する。けれど、それは永遠ではない。この地位を支えるのは、現国王の宰相であった。宰相は、シエナの母の父。父にとっては義父である。その彼の威光によって、父は王宮で権力を得ているのである。

しかし、その彼もかなりの高齢に差し掛かっている。恐らく、あと数年もすれば現役から退かねばなくなるであろう。

そうなれば、今の父の地位が揺らぐのは必至だ。小物の彼は、自らの地位に執着している分、変化に敏感である。

早急に手を打たねば、先は潰える。そう直感した彼は、使える限られた知恵を最大限使い、道を切り開いたのだ。

あまりにも無謀な手段を用いて――

覚悟はしていた。なのに、いざ突きつけられたものは、シエナの予想を大きく逸らすものだった。

自分の半分も生きていない幼子の妻になるなど……。

婚約の知らせはすぐさま国内を巡っていった。

祝いの言葉で彩られていく日常の中、一人シエナだけが心に不安を抱えていた。

どうして誰も批判を加えないのだろう……先を見れば明らかなのに……。

現在の立場から言えば、年齢差を加えても、シエナは王族へ十分に嫁ぐことが可能だ。けれど、10年後は？現宰相が失脚した後、父が王宮で立ちまわれると？まさか？——なぜ、誰もそれに気がつかないのだろう……。

この婚約は、先のあるものであるはずがないのに——

そんな、シエナの心など誰も知らず、道筋は、整えられていく。

……そして、初めてフェリオと顔を合わせる日を迎えたのだった。

早朝から念入りに仕込まれたシエナは輝くような美しさを身に纏っていた。上部を細やかに編み込まれた髪は緩やかに後ろに流れ、肩先から零れおちる房は悩ましいほどの艶を帯びて輝く。瞳の色と対になった翡翠のドレスは柔らかくまだ少女の体を彩る。薄く粉をはたかれた面は、物語に姿を見せる春の女神を想起させる。

周囲の賞賛の声に固く笑みを返したシエナは、少し一人になりたい、と告げ、纏わりつく侍女を遠ざけた。

場所は既に王宮。父に連れられここを訪れたのはいつだったろうか？記憶にないほど前のことだと実感する。

部屋から一続きとなったテラスの先に広がる風景は、圧倒されるほど美しく、一度見れば忘れることができぬほどだった。

きりり、と絞められた腰ひもに嫌気が差したのか。それとも、この状況にか。息のつまりそうな思いに駆られ、引き寄せられるように、

テラスから、先へと歩みを進めていた。

等間隔に並ぶ木々に沿って、ゆっくりと歩く。

侍女が探しているかもしれない。刹那頭をよぎったが、すぐに掌に舞い散る雪のごとく、思考から消え去った。

まだ、完全には昇りきっていない日は柔らかい。更に木漏れ日はさやかに降る。掌に映る光と影に遊ぶ。

と、不意に大きな影がシエナを包んだ。不審に感じ、空を仰ぐ。視線の先、並ぶ木々の梢に小さな少年が一人、ぽつりととまっていた。

「ど、どうしたのっ!？」

ここが王宮であることも忘れ、大声をあげる。声をかけられた少年は、一瞬視線を下へと向ける。そこにいるシエナの姿をとらえ、すぐにまた遠くを見やった。その瞳は、喧嘩をした後の子供が見せる意地を張ったそれだった。

「何をしているの?……もしかして……降りられないの?」

気を張ったような少年の表情にふと思いつき、柔らかい声をかけた。痛くなるほど首を仰いで見る少年の姿は、下仕えの者の装いではない。貴族の子息だろうか?王宮に出仕する者が、家族を連れ立つことはままある。それに、見たところ彼の年頃は王子と、そう変わらないようだ。もしかしたら、王子の遊び相手として所望されているのかもしれない。

「違う!」

向きになったように、甲高い声で反論された。けれど、言葉とは裏腹に、微かに瞳が不安に揺れる。

幼い子の見せるささやかな虚勢に、思わず笑みがこぼれる。

「そう?……なら、お邪魔よね?ごめんなさい、失礼しますわ」

まさか、本当に立ち去るわけにはいかない。けれど、この少年は素直に助けを請わないだろう。

意地を張る子どもへの微笑まじさを感じながらも、軽くからかうような気持ちで退散を匂わす表現を使う。

「あつ！待っ……」

拗ねたようにそっぽを向けていた少年が、焦りの声を露わにする。

予想通り、の反応に頬が緩みそうになる。それを何とかこらえ、平然を装い、向けた背を翻した。

「なあに？」

「……」

小首をかしげて問うが、返答はない。少し赤らんだ頬を隠すように、顔を俯ける。

これ以上は可哀想、か……

「ね。隣へ行ってもいいかしら？」

そして、少年の答えを待たずに木の幹に手をかけた。あつけにとられたように目を見張る少年に構うことなく、シエナはするすると幹を登っていく。整えられた衣服は、シエナの行く手を遮るが、煩わしさを感じるだけで、それが乱れることを気にも留めない。

あつという間に少年がぼつりと佇む枝に辿り着く。二人を支えられるだろうか、とシエナは少し不安を抱いていたが、辿り着けばその枝は思いのほか太く、がっしりと重みを支えてくれた。

今まで見下ろしていた少女が、急に木を登り、目前にいる。少年にとって、予期せぬ行動だったのか、ただひたすらに大きな瞳を零れおちそうなほど見張っていた。

そんな彼を落ち着かせるためか、シエナはにこりと可憐な笑みを浮かべる。

すると、少年の面が見る間に赤く染まっていった。

やはり、小さいながらもその自尊心を揺らしてしまったのだろうか？ 気を付けたつもりだったのだけれども……。

そう思い、もう一度柔らかな笑みを向けた。

「こんなところで一人、どうしたの？」

問われた少年は、柳眉を小さく寄せて、呟いた。

「……おまえも、ぼくを指図するのだろ……母上に言われて、ぼくを探しに来たのだろう？」

「いいえ？わたしは王宮にお招きにあずかったの。その……少し御用があつて……。母上と共に王宮へ来たの？」

少年はゆるゆると首を振る。

「一人迷っているのを知ったら、母上様はよほど心配されるのではない？」

「僕はここに住んでるんだ。迷わない」

むすつと呟かれた言葉に今度はシエナが目を見張った。

今この少年は何と？王宮に住んでいるといわなかった？

そうして、一つのことを思い出した。自分を残し、立ち騒ぐ周囲が漏らした言葉は――？

『漆黒の髪に、濃紺の瞳。夜の帳が下りたころ、星々が輝き始めた空の気配を纏う容姿』

未だ齡7つといえど、未恐ろしい美しさだ……と。

なぜ、気がつかなかったのだろう。

自分の浅はかさにはとほと呆れてしまう。相手のことにまで気が回らなかったと言えはそれまで。年齢にばかり頭が行き、その容姿にまで至っていなかったのだ。

宵闇に喻えられた少年は、その通りの容姿を備えていた。

「お姉さん？」

思い至った少年の素性に啞然としていたシエナを、少年の紺色の瞳が見詰めていた。

「……フェリオ、殿下ですか？」

「……」

返答はない。けれど、それが肯定であることがシエナにはわかっていて。

「どうして、こんな木の上に御一人でいらっしゃるのです？」

「……」

「どなたかと仲違いでもなされたのですか？」

「……違う」

やっと返された言葉にほっと息をつく。

「では、どうして？わたしに教えてくださいませんか？」

続きを促すが、フェリオはまた黙ってしまった。

どうしたものか。何時までもこうしているわけにはいかない。恐らく、シエナが部屋から抜けたこともばれている頃だろう。ならば、一刻も早く戻らねば、事態がややこしい方向へ向かいかねない。

無理やりに抱きあげ、木から降ろそうと思えば出来なくもなかった。しかし、万が一抵抗された場合に、二人諸共転落してしまつては元も子もない。

さて、どうしようか……と考えあぐねていると、フェリオが初めに浮かべていたような、意地を張った子どもの顔に戻っていた。そして、痛感する。

ああ……彼はまだこんなにも幼いのだ、と。

翡翠のドレスから延びた、細く白い腕を伸ばして、黒く癖のないその髪に優しく触れた。

はじけるようにして向けられた瞳を覗きこむ。

「ね。わたしには、話せない？」

柳眉を寄せたフェリオは、小さく俯き、ぽつりとこぼした。

「ぼくには、なんにも許されないんだ」

「どうして、そう思うの？」

「だって、母上もゲイルも、ぼくがしたいといったことを許してくれたことがないから……。遠乗りへ行きたいと言っても、許可がいくつて言ったきりだし、街へ行きたいと言っても危険だからと取り合つてもくれない……」

だから、抜け出したんだ――

曲げた膝がしらに顔を埋めてしまったフェリオの姿は、まるで赤子のようなだった。シエナは二人の間の距離を詰め、小さく身を寄せたフィオナの背にそつと手を乗せた。

「フェリオ、あなたは王太子さまよね？」

埋めたままの頭が小さく頷く。

「わたしはね、与えられた立場には、それに見合った責任が伴うと思うの」

「『せきにん』って?」

「責任っていうのはね、やらなければいけないこと……かな? フェリオは王太子さまっていう立場にいるの。他の人とは違う、この国にたった一人の、あなただけの役割ね。その役割で、きつとあなたは他の人よりも良い思いをしていることもあると思う……違うかしら?」

「……良い、こと?」

「うん。そうねえ……。フェリオは氷は分かる?」

「当たり前だよ。果実水にはいつてるものでしょ?」

その返答に、シエナは曖昧な笑みを浮かべる。

「フェリオ。それは、当たり前ではないの。夏の氷は、冬に作られた泉の氷を特別な方法で夏まで保つの。夏になった頃には元の半分も残らないわ。そんな氷が夏に手に入るのは、国内でもほんの一握りよ。知っていた?」

「……ぼく……知らなかった」

「うん。私も知らなかった……。でもね、そういう風に自分にとっては当たり前だけど、他人にとってはそうでないこともあるの。知らないうちに、あなたは恵まれている。だから、その恵みと同じくらしいの我慢をしなくちゃならない。母上様が、あなたの行動を制限するのもその一つ」

「でも……ぼくは王太子になりたいなんて言っていないのに!」

「駄目よ。それを言ってはダメ!」

突然の大きな声に、フェリオはびっくりと体を揺らした。なぜ、シエナが声を荒げたのか、フェリオには全くわからなかった。フェリオの戸惑いに気付きながらも、シエナは荒げた語気を改めることなく言葉をつなく。

「自分が生まれたことから逃げてはダメ!それは絶対だから。それ

を否定しては、持っているものの全部を捨ててはいけない……。いいの？父上様にも、母上様にも、出会えないのよ。今あなたの周りにいる皆にも会えないのよ？それでもいいの？」

後半は、宥めるような声音に変わっていた。背に回された掌が温かい。

「やだ……」

呟きは、小さかったが明確だった。耳に届いた声にシエナは頬を緩める。

「あなたは聡明ね。……大丈夫。なにも、不幸が待っているわけではないわ。あなたがいる場所はだれもが懂れても手に届くはずのない場所なのだから、寧ろ、幸せが溢れているはずよ。制約を受けた分、ちゃんとして幸せは与えられるわ。ただし……あなたが幸せに気付かないといけないけれどね」

いたずらっぽく微笑みを浮かべ、フェリオの背をぽんぽんと軽く叩いてみせる。誰をも魅了するシエナの笑みに引き出されたように、フェリオの面にも笑顔が戻っていた。

フェリオに言い聞かせたことは、同時にシエナ自身に言ったことでもあった。

シエナには、生まれながらに課せられた義務がある。それを、果たさねばならない分、与えられるものは他者よりも恵まれているのだ。恵みに、奢ることなく、常に念頭に置かなくてはいけない……。

幼い頃から、好きなことを好きなようにさせてもらってきた。少女らしい遊びよりも、歴史書を読みふけることを好み、少年のように馬で野を駆けることを好んだ。普通ならば、許されなかったかもしれない。それを許されてきた……その分の課せは負わねばならない……。たとえば、先に続かない婚約であろうとも……。

この幼き王子を、わたしは全力を賭して支えよう……
本当に生涯を遂げるのが私でないとしても――

「さあ、戻りましょうか？」

瞳に静かな決意をこめて、笑みを傍らの王子に向ける。返された、濃紺の瞳は、純粹で無垢なまま。躊躇うように、差し出された手を取る。次の間、唇が小さく開かれ

「あなたの名前は？」

名を問うた。

それに、刹那シエナは目を見張る。そしてまた、蕩かすような笑みを浮かべた。

「シエナです。シエナ・イベルス。以後お見知り置きを」

細く華奢な掌に重ねられたものは、シエナのそれよりも、更に小さく、そして温かった。

2、冷える指先

高い天井まで届く大きな窓が取り付けられた室内は、日の光をたっぷりとり込み、白く光る。大理石の白い床は外気から、室内を隔てて冷やりとしていた。部屋に合わせてあつらえられたテーブルも白い大理石で出来ており、触れれば冷たく、指先の体温を奪っていた。

その上に茶器がカチャリと音を立てて置かれる。

「どうぞ」

「ありがとう、アリー」

差し出した相手に、にこりと笑みを返す。芳しい香りを立てる紅茶に静かに口をつける。

「おいしい。アリーの入れてくれるお茶は本当に最高ね。私がここへ来るのも、これを飲みたいからかもしれないわ」

「もったいないお言葉です……」

シエナの言葉にアリーは恥じ入ったように、顔を赤らめる。

シエナが王宮に訪れるのは、もちろんお茶を楽しむだけではない。婚約者の義務として、定期的に王太子と顔を合わせるためだ。大抵週に一度、少なくとも二週間をあけたことはない。

正式に婚約を結んでから、それはずっと続いている。季節ごとに、指定の部屋は変化すれども、必ず侍女一人を与えられ、彼がやってくるのを待つ。

アリーは3年前から、この任にあてられた。噂に高い、年長の婚約者。出会ってみれば、彼女は美しく、それ以上に聡明だった。侍女だからと言って、他の令嬢のように、必要以上に嘲ることもなく、節度を持った態度を示してくれる。

使える者として、最高の相手だった。

彼女が未来の王妃になる……――

アリーはその幸運を、彼女に出会って初めて心の底から喜ぶことが

できた。

「アリーも一緒に楽しめたらいいのにね」

ぽつりと、こぼした言葉に、アリーは大きく目を張る。その様子を見止めて、シエナは微苦笑を浮かべる。

「なんて、ね。ごめんなさい、そんなこと、あなたを困らせるだけよね？……ただ、いつもそばに控えてもらっているあなたと、一度ゆっくりお話できれば……と。ごめんなさい、言いわけだわ。……

今日のお茶受けは何かしら？」

「え、と。シクのプディングです」

「あら、うれしい。今日は本当にいい日ね」

微笑をアリーに返し、外へと視線をやる。硝子戸の先には、緑の木々が日の光を反射して、キラキラと輝いていた。

アリーからは、そのシエナの横顔が、少しの陰りを帯びているようにみえた。

「つとに、いつまで待たせればいいのかしら？」

「申し訳ございません。恐らく、政務官とのお話が長引いていらつしやるのでしよう……。一度お伺いを――」

「大丈夫よアリー。言ってみただけ。それに、政務を放り出して来るなんて、王太子として失格」

言ってシエナは何杯目かの紅茶をすする。

訪問から、どれくらいの時がたつただろうか。持参した、本を片手に、アリーの入れてくれるお茶を楽しむ。それでも、時間がたてば、暇を持て余すようになる。本人は決して顔に出すことをしないが、傍に控えたままのアリーも辛いだろう。

彼女だけでも、言って、下がらせようか……。

そう思ったとき、部屋の扉が叩かれた。ぱたぱたと床を蹴って、アリーが扉へと駆け寄る。

しかし、その到着を待たずして扉は開かれた。

「シエナ！」

彼女の名を呼び、顔面に笑みをたたえて飛び込んでくる。見目はすっかり青年に成長しつつあるが、中身はまだまだ子供だ。少年のように、喜びの感情をあらわにして、シエナに駆け寄ってくる。

それを微笑ましく思いながらも、シエナは形式ばった礼を返した。

「ご機嫌うるわしゅう、殿下」

彼が飛び込むことを予期していたように、シエナは椅子から立ち上がり、優雅に腰を折って、彼を出迎える。

「……。そのような礼はいらぬというのに」

伏せた後頭部に囁かれる、不機嫌な声。ゆっくり面を上げて、濃紺の瞳に微笑みかける。

「いいえ、礼節は大切よ。もう、子どもではないのだから、ある程度節度をわきまえて行動しなくてはね」

「わきまえている！」

「なら、よかった。だけど、勢いあまって抱きつくなんてしないでね」

むきになって反論するフェリオにからかいを投げると、彼は予想通り、頬を赤く染めた。

10歳を過ぎるころまでは、フェリオはやってきたシエナに飛びついて迎えていた。ぎゅうつと抱き締めてくる小さな体に、自分が好ましく思われていることを悟らされ、シエナとしてはかなり嬉しい事だったのだが、それもいい思い出だ。そんなことは、もう何年も起こっていない。

いつからだろうか、纏わりつくようにしてシエナに甘えていたフェリオが大人の表情を浮かべるようになったのは。

宵闇の王子、と呼ばれた彼は、すっかり成長し、麗しい青年になるうとしている。

艶やかだった黒髪は、一つにまとめられ、今も背に流れている。濃紺の瞳には、落ち着いた輝きが燈り、無垢だったあのころとはまた

異なる趣をみせる。

シエナの胸のあたりほどしかなかった背も、あつという間に伸び、首をひねらなくては会話も出来ない。

すっかり成長を遂げたようなフェリオ。それでも、時折見せる少年の面影がシエナには微笑ましかつた。けれども、いつまでもそのままではならない。姿の成長とともに、彼自身も大人にならなくてはならないのだ。

子どもの彼を惜しみながらも、シエナは努めて彼に対して丁寧な対応を取るように心がけていた。

二人のやり取りを見るアリーの戸惑いが、シエナに伝わってくる。

まだ、何かを言いかけようとするフェリオを頬笑みで制した。

「よろしければ、腰を下ろしません？アリーがブディングを用意してくれているそうよ」

「あ……。すまない」

言って掌を差し出し、椅子までエスコートする。優雅な仕草は、完璧である。小さくアリーに合図し、お茶のそなえを指示する。

「ありがとう。……ところで、今日はどなたとの会談だったの？」

「リヴィウス卿だ。彼の所領からの税収に不備があったので、話を聞いていた。本来なら父上の仕事なのに、政務が立て込んでいるから、とわたしに回された……。やってくるのが遅くなって本当にすまない」

視線を合わせないように話すフェリオに、軽く首を振ってみせる。

「いいえ、放り出してきたら、怒っていたところよ。よかった、すっかりやれているようで」

陛下が仕事を回すのは、決して多忙だけが理由ではない。フェリオが王太子として見込まれているからこそ、彼の信を篤くするためにわざと、辺境の貴族と会談を取るのであらう。

成年を迎えれば、彼も一人前と認められ、この国を中心から支える一人になるのだから。

「久しぶりに会えた気がする」

「そうかしら？先日の夜会で会ったでしょ？」

「あまり、話せなかったじゃないか……。訪問も減ってはいないか？」

「……それは、仕方がないのよ。殿下が政務に関わるようになれば、以前のようにお会いする時間も限られてしまうのは当然です。夜会も同じ。社交の場なのだから、平素お目にかかれない方々との交流を深めなくては。いつでも会えるわたしなんて気にしては駄目」

頬笑みながら、フェリオの疑問を解消していく。シエナの本当の意図は影に潜めたまま。

「……そうか。責任、か？」

「ええ。あなたの責任、よ。……そんなことよりも、リヴィウス卿と言ったわよね？所領のこと以外に、彼は何かいってなかった？」

シエナの間に、フェリオは整った眉をひそめて思案する。

「以外？……言っていたかな？」

「夜会について、とか？」

促せば、何かに思い当たったように顔を上げた。

「夜会……？……そういえば、リヴィウス卿の御令嬢がいらしていた、と。粗相はなかったか、と聞かれたが、特に思い当らなかった、ので、大丈夫だ、と答えておいた」

「そう。……思い当たらない、って言うのは、粗相が？それとも御令嬢が？」

「令嬢がだよ」

フェリオの言葉にシエナががっくりと肩を落とす。はあ、と大きく溜息をつく、と、ずっと視線をあげ、強い光を帯びた翡翠の瞳でフェリオを射る。

「殿下！」

強い言葉で、諫めようとしたとき

「お茶が入りました」

「ああ。ありがとうアリー」

話の腰を折られた……。まったく悪意のないアリーに対して、怒る

わけにもいかない。フェリオに続き、ありがとう、と言葉をかけて
労う。

綺麗に整えられたテーブルをただ見つめる。どこにやっていいか分
からない思いがシエナを包んでいた。

「シエナ？ 食べないのか？」

笑みを湛えて、暢気に話しかけてくる、当の本人に、気持ちが泡立
つ。

きつと一睨みをきかせて、香り高い紅茶に口をつけた。

現在のシエナを取り巻く環境は14の頃とは劇変していた。それは、
シエナが予想した通りの結果だった。

当時の宰相を務めていた祖父は、シエナが成人を迎える頃には現役
から退き隠遁生活を営むようになった。しかし、予想以上に彼の威
光は大きかったらしく、引退後も、父を取り巻く環境はほとんど変
化をしなかった。

もしかしたら、自分の杞憂に過ぎなかったのだろうか――

そう思い始めたころ、祖父が突然死を迎えた……

彼の死を契機に、周囲は一変した。祖父の威光を完全に失った父は、
自らの力だけで、王宮の中枢にはいられない。これといった、英知
を提供することなど出来ない彼は、新たな依り代を探すしかなか
つた。彼が見出した新たな威光。

それは、あるうことか、彼が押し上げた娘、シエナだった。

20になったシエナは、既に、王太子の信を確かなものにし、王宮
内でも一定の地位を固めていた。それは、彼女自身が意図して作り
上げたものではなく、彼女の行いが自然人々を惹き付け、成立した
ものであった。

その分、小さくとも結びつきは固く、祖父の死ごときでは、シエナ
本人への評価は揺るがなかった。

父はシエナの後ろ盾、といいながら、彼女が確実に王妃となることで、己が保身をはかろうとしている。

けれど、宰相の後ろ盾を失った貴族の娘が、実力だけで陰謀渦巻く王宮を渡っていくのは、難しい。しかも、フェリオとシエナの年齢差を見れば、それは、ますます困難になる。

『婚約者』としてのシエナの地位は次第に揺らぎ始めた。

シエナに配慮していた他の有力貴族たちも、次第に夜会を利用して娘を王太子に売り込むようになり、公にはないが、シエナの地位を白紙に戻すような動きも見られるようになった。

そんな周囲の動きに気付きながらも、シエナは何の策を討とうともしない。むしろ、娘たちが王子に近づきやすいように、夜会から、足を遠ざけるようになった。出席したとしても壁際の華として沈黙を守る。

アリーが用意してくれたプディングは口に含むと、蕩けるように甘い。それを堪能しながら、向かいで紅茶をすするフェリオに、密やかな視線を送る。

その成長した姿は、シエナを心の底から満足させる。彼は立派に成長した。家臣の信も篤く、将来優秀な王になられることだろう、と密やかにささやかれていることも……。

シエナの心を満たすものは心地よい達成感だった。覚悟は確かだった。幼い彼を支え、素晴らしい王太子へと導く。

わたしは、役目を終えた。幼かった彼を導き、ここまでこれた。

もう一度、フェリオの姿を見つめる。あと、彼とこのように過ごすのは何度だろうか……

だから、もう、わたしは、この王宮から去るべきものなのだ――

二人の間に横たわる距離は、出会ったところと何ら変わらないものだったが、見つめる先にあるものは、姿を変えてしまう。大理石に包まれた冷たい空気が、二人を包み込んでいた。

3、薄明かりに揺らく虚像

「ゲイルが送ってくれるの？」

しばしの間、フェリオと談笑すれば、外はもう日暮れに差し掛かっていた。フェリオが到着したのが予定よりも遅れていたためか、シエナが帰路に就く時刻を優に超えていた。

「ああ。遅くなってしまったから、シエナの御者に付かせて送らせる」

「別にいいのに……。ゲイルだって、忙しいでしょ？昔は、馬を走らせて一人で帰ったこともあるのよ。それを考えれば今日は馬車なのだし、御付きの者も連れているわ。手を煩わせる必要はないですよ？」

「いいえ、シエナ様を御一人で帰らせたとわかれば、わたくしが陛下から叱責を受けてしまいます」

首をすくめて、軽くいなしてみせるシエナを遮って、フェリオの後ろに控える男が口を開いた。

フェリオよりも少し高い背に、がっしりとした体躯。よく鍛えられているであろう腕は太く、筋肉が筋だっている。

幼少の頃からフェリオに仕えてきたゲイルは、今はもう近衛の部隊長におさまっていた。年の頃30を超えたばかりの彼が近衛の隊長を勤めるのはかなり早い。

けれど、それは、決して名ばかりの部隊長ではなく、彼が優秀であるからこそその立場だった。フェリオを幼い頃からずっと守ってきた彼は、それに似合う実力を着実に身に着けてきた。そして、隊を一任された今でも、フェリオの側近くに常に控え、彼を守ることを第一にしている。

そんなゲイルをわざわざ娘一人、送るただけに連れ出すのは、申し訳なかった。……けれど、陛下の名を出されては、安易に断ることはできない。

「……そう……。ありがとうございます。お手を煩わせますが、よろしくお願いいたしますわ」

密やかに、小さなため息を落とした後、丁寧に、腰を折ってその場で礼の形をとる。と、頭上から焦ったような声が降ってきた。

「シエナ様！その様なことは！！」

焦ったゲイルとは対照的な、フェリオの明るい笑い声が、シエナの耳に届いた。

「シエナ、からかってやるな。ゲイルが参っているぞ」

あげた面に、柔らかい笑みを浮かべ、フェリオの言葉には応えることなく、丁寧に別れの言葉を告げて、王宮を後にした。

がたごと、と馬車は揺れる。厚いクッションに包まれた長椅子は、柔らかく、その衝撃を吸収してくれた。ゆらゆらと左右に揺られながら、向かいに掛ける男性を見やる。

「ごめんなさい、ゲイル。あなたも忙しいのに、わたしなんかのために時間を取らせてしまつて……」

「その様なことをおっしゃらないで下さい。わたくしは殿下をお守りすることが役目。ひいては、あなた様をお守りすることは当然です」

シエナの憚りの言葉に、また焦ったようにゲイルは言葉を並べたてた。

フェリオに仕えた年月と同じく、ゲイルはシエナとも接してきた。剣や馬術を嗜む、普通の少女とは一風変わったシエナにゲイルは手を焼きつつ、それ以上に篤い信頼を寄せるようになっていた。

骨身を惜しまず、フェリオを守ってきた臣下の言葉に、ありがたさが身に染みる。けれど、後ろめたいものを抱えたシエナは、心が締め付けられた。

我知らず、言葉が口先から零れ落ちていた。

「……その様な価値がわたしにあるのでしょうか？」

ゲイルの真摯な態度に、思わず本音が漏れる。思いもよらない、シエナのその言葉にゲイルは驚きの表情を浮かべた。

見つめる先の、シエナの美しい面は、窓から漏れる夕日に赤く染まり、どこことなく憂いを感じさせる。驚きに導かれたまま彼女の面に見入っていると、その視線に気づいたのか、翡翠の瞳とぶつかってしまう。

「わたしは、殿下にとって足手纏いにしかありません。あなたも既にご存じでしょうが……他の者が別の御婚約を成立させるために奔走しているのです。……わたしは、それを良い兆候だと思っています。わたしなどより、先を考えれば相応しい御令嬢は数多いらしいやいます。娘盛りをとうに過ぎたわたしなどよりも、年頃の近い方々の方が殿下にとっても相応しい——」

「それ以上はおっしゃらないでください！」

ゲイルがシエナの言葉を遮るように声を荒げる。長年王宮で務めるゲイルが、そのような態度を取るところをシエナは初めて目にした。「ゲイル？」

驚きのあまり、翡翠の目を見開いて彼を見つめる。

「申し訳ございません！差し出がましいことを……」

焦ったような声音で、詫びを繰り返すゲイルに、ようやく驚きが引いたシエナは自傷したような笑みを浮かべた。

「いいえ、よろしいのです。わたしも少々言葉が過ぎました。これでは殿下を諫める資格もありませんね……。長く殿下に使えるあなただから、と、つい気が緩んでしまいました」

夕日に照らされた美しい顔は、やはり、あきらめにも似た陰りが浮かんでいた。

常とは異なったシエナの様子に戸惑いながらも、ゲイルは何かを感じたように、深く眉間に皺を寄せた。

自身の言葉のせいで、表情を変えたゲイルにシエナも気付く。彼が、

何を考えているのかを探るように、翡翠の瞳が光った。そして、ゲイルが重い口を開いた。

「……シエナ様。このような機会はもう無いかもしれませんので、申しませんが……」

躊躇うように言葉が途切れる。先を促すように、シエナは小さく小首をかしげて見せた。

鋭く、自らを捕らえる翡翠色の瞳に急かされて、決意を込めた強い色を瞳に浮かべて言葉を紡いだ。

「……よろしければ、あなたの本心を窺わせてはいただけないでしょうか？」

「本心？わたしの本心とは？」

「先ほどおっしゃられたことです。……あなたは殿下との婚約を……好ましく思いでは……ないのですか？」

ゲイルが告げたことは、彼の立場から言えば、恐れ多いものだ。ゲイルも自覚しているのか、言葉を発した後視線を左右に彷徨わせて躊躇いを露わにする。

その様子に、シエナは思わず笑みを零してしまっていた。

その場に漂っていた緊張感は、年月を経て一層の磨きをかけて、輝く彼女の笑顔を受けて、一瞬の後に緩んでいた。予想のつかぬシエナの笑顔に、毒気を抜かれてしまったゲイルは、魅入られたように彼女の形の良い唇が動き始める様を見つめていた。

「いいえ。わたしは殿下を好いております。あの方が立派に成長し、王太子としての責務を全うできることを一番に望んでいます。殿下をそのように導くことが役目と思っておりました」

「では？」

「……殿下は、既にわたしの手を要していらっしゃいません。彼は王太子としての立場をしっかりと自覚し、行動することが出来ていらっしゃる。わたしは、役割を全うした、と思っています。これ以上、殿下のもとにいても、わたしがもたらせる益は何もありません。ただ……それだけのことです。わたしの本音、といいますか

……これは、事実です」

シエナは何もかも満たされたように柔らかい笑みを浮かべ、小さく頷いてみせる。まるで、ゲイルに納得を迫るかのように。微笑みを返された相手は、一方的に渡された思いをどのように受け入れるべきか躊躇っているようだった。先ほどよりも眉間のしわが深まっていく。遣り切れなさを面に出したまま、シエナに問いかける。

「……己が役目は終わった、と？」

ゲイルの問いに、薄く笑みを返しただけで、シエナはそれ以降、決して口を開こうとしなかった。

がたごと、と車輪が岩を砕く音だけが、小さな馬車の内部に木霊していた。

シエナの言葉の後に降りた沈黙は、そのまま屋敷へとたどり着くまで続いていた。

ガタリ、と大きな振動を最後に、馬車が歩みを止める。外から、御者の声がかかり、到着が告げられる。

開かれた扉から、ランプの光が漏れ入り、薄暗かった、馬車の小部屋に灯りが燈る。それを、合図にして、侍女がシエナを迎えるために、扉から手を差し伸べた。それを支えに、ゆっくりと地面へと降り立ってから、続くゲイルを振り返った。

「ありがとうございます。お帰りの道中くれぐれもお気をつけて」

「……お言葉、痛み入ります」

膝を折って、見送るゲイルに、小さな笑みを一つ残して踵を返す。

「シエナ様っ！」

その背に低く鋭い声が掛かる。振り返る間もなく

「フェリオ殿下のお心を……お忘れなきように」

そう言って、彼が足音荒く、立ち去る音がした。シエナがゆっくりと振り返ったときには、先ほどまで坐していた馬車の扉が微かに開

けられた情景があるだけだった。

先を促す侍女の声を、どこか遠くで聞いていた。唯一、最後に残された、ゲイルの言葉を思考の中で繰り返す。

フェリオの、心

そんなことは、明らかにはず――

出会った頃の、虚勢を精一杯張った、幼いフェリオと、今、青年へと艶やかに成長しつつある彼が……

ずっと、隣に寄り添い、慈しんできたフェリオの姿が――シエナの脳裏に浮かんでいた。

シエナの王宮への足は更に遠のいていった。週に一度の訪問を、体調不良を理由に断り、夜会への出席も控えた。

気分がすぐれないので、夜会は欠席いたします――

この日も、何度目かの断りの言葉を使い、朝王宮へと送り出す。

父母への朝の挨拶を済ませた後、その足で、屋敷の書庫へと向かう。特に、人と会う約束などがない日は、書庫に詰めるのがシエナの常だった。

読みかけの歴史書を手にとり、茶の用意をしてくれた侍女に礼を言つて、そのまま下がらせる。

明かりとりの天窓から差し込む光は微かだが、古書特有の香りと、外気よりも少し低めの気温が、シエナには心地よかった。時の流れ

も忘れ、興味の赴くままに書物を読みふける。

シエナ様にかかれば、王宮の書庫でさえ、一飲みでございますね――

皮肉にも取れる、教師の言葉が、シエナには最上に嬉しかった。教師も、シエナを評価した言葉だったらしく、普通は成人を境に離れるものであるが、それを超え、シエナに学を提供してくれた。

数年前に、隠遁生活に移ると言って、田舎へ身を寄せた恩師とは、今もぽつりぽつりと手紙を交わし続けている。

婚約者の身から離れた後は、先生のように教師となるのもいいかもしれない……

叶うとも知れない未来を、ほのかな明かりの射す小部屋で思い描いていた。

「シエナ様、よろしいでしょうか？」

軽く扉をたたく音がし、声が掛けられる。シエナの眉が微かに歪んだ。

読書の邪魔をされたことではなく、平素そのようなことが全く起こらないからである。シエナが書庫に詰めているときは、屋敷の者は決して声を掛けてはこない。彼女が満足して部屋を出るまで、その時間を壊してはならないのが暗黙の了解だった。

それを、破ってまでシエナを呼び出すほどだ、何か不都合なことが起こったに違いない。その可能性を考えての、仕草だった。

「ええ、よろしくてよ。入って来て」

了承を伝えれば、扉から使いの者が現れる。騎乗のための服装に身を包んだ男は、今朝王宮へと使いにやった者だった。

「なにがあつたの？」

王宮から戻ってきた者の知らせと知り、自然声が強くなる。

「……王太子殿下からの言付を承っております」

「殿下から？……申してください」

促すシエナの言葉に反して、使いは何故か躊躇いの表情を浮かべた。それほど、重悪な知らせなのだろうか……。不安がよぎる。

「一言一句、間違いに伝えよ、との申し送りでございます。……少々無礼なお言葉になってしまつやもしれませぬが……」

「よい。許す」

明確なシエナの言葉に、気を律されたのか、しばし言葉を紡ぐことに葛藤していた使いは、意を決したように口を開いた。

「……では、申し上げます。『いつまでも仮病をつかうでない。さつさと参内せよ。これは、わたしからの命だ』とのことでございます……」

シエナの翡翠色の瞳が驚きの色を見せる。

仮病がばれていないわけがない、とは思っていたが、フェリオがこのような手段に出るとは思ってもいなかった。さらに続けられる言葉に、声を失う。

「外に、王宮からの馬車も待たせております。……シエナ様がお越しになるまで、王宮へ戻ることは許さぬ、との申しつけで……。いかがいましてしょう……」

続く言葉が見つからない。

夜会には行つてはいけない。断らなくては。

けれど、そうすることが出来なくなった……。

シエナの性格を十分知つてのことだ。使いを戻らせただけでは、いくら王太子の命であっても、シエナならば仮病を押し通して、夜会には来ないだろうと分かっているのだ。その上で、馬車を手配した彼女が来なくては、馬車を引く者たちはいつまでも戻れない……。使えの者を放っておけないシエナの性格では、来訪しなくてはならなくなる。

小賢しい……

こちらの考えをすべて見透かした策に、胸に熱い思いが生まれる。

「しかたがないでしょう……参ります!!」

使いに当たるように、言葉を放り投げ、彼からの言葉を待たずに、足を踏み鳴らしながら、書庫を出ていく。

滅多に見ることのできないシエナの怒った姿に、一人取り残された使いは、すべきことも忘れ、しばし呆然と、その場で立ち尽くしていた。

4、月下の姫

嫌がらせに、いつそみすばらしい格好で行ってやろうか……

火急の支度で、走りまわる侍女を後目に、くだらない考えが頭をよぎる。けれど、それだけで済まないところが、シエナの悲しい性だった。同時にその行動がもたらす損益を考えてしまう。

シエナ自身の評価が落ちることは全く気にしない。しかし、一応婚約者であるシエナにそのような格好をさせたことで、フェリオの評価にも傷がつかかねない。父の名も同じだろう。ふるって、家名を盛りたてようとは考えていないが、進んで陥れようとは思わない。自分の思考回路に、ほとほと呆れてしまう。

ほう、と大きく息を落としたシエナに、周りの侍女たちはびくりと肩を揺らした。

行かない、と決めていた夜会が急に出席に変わり、いつもなら半日も掛けて用意する衣装をほんの数時間で整えなくてはならない。侍女も大変だが、当人のシエナは更に、あちらこちらへ連れまわされて、疲弊するのも当然だった。

もともと、身を飾ることに頓着しないシエナだから、着飾られることが得意ではない。彼女が付いた大きなため息が、疲労の表れと取られるのは、自然だった。

「申し訳ございません。あと少しで、御支度も整いますので……」心の底から、シエナを気遣う侍女の言葉に、全てを悟る。自分がついた溜息が勘違いを生んだことを。慌てて、それを否定する。

「あ！……ごめんなさい、決して疲れているわけではないのよ。無理を申したのは、わたしなのだから、こちらが詫びなければ。急を言ったのに、ちゃんと整えてくれて感謝しているわ」

言って、最上の笑みを浮かべてみせる。

笑みを返された侍女は顔を赤らめて、滅相ありませんと消え入る

ような声で呟いた。そして、恥じらいをかくして、シエナの支度に専念していく。その様子に微笑みを浮かべ、支度をしやすいように微かに、首をあげて、施されていく化粧にこたえた。

シエナの笑みに安心したのか、侍女たちは、ぱたぱたと忙しく周囲を取り巻きながら、支度は順調に進められていった。

夏を迎えた王宮の庭園は、中央の噴水からの水飛沫が明かりに照らされて輝き、幻想的な装いを見せていた。女性たちの装いも、薄く、露出の多いものになっていった。

けれど、夜会の雰囲気は相も変わらず、煌びやかで、どこか快楽的な気配を纏っていた。少し遅れて場についたシエナもやはり、会場の端で身を固く、密やかに、周囲を見渡していた。視界の端に、正装したフェリオの姿が映る。

周りを貴族の令嬢たちに囲まれた彼は、時折のぞかせる少年の面影など全くなく、王太子らしく、大人びた表情を浮かべている。令嬢たちはそんなフェリオを蕩けるような甘い眼差しで見つめる。

繰り広げられる世界はまるでボールを隔てて存在し、シエナのいる世界とは全くの異世界に思えた。

夏には似つかわしくない、涼やかな風がシエナの脇を冷やりと通り過ぎていった。

静かに冷えたグラスを傾けている。と、背後に人の気配を感じた。フェリオか、と思い、無理やり来ることになった文句でも言ってやろうと振り返る。

しかし、視線の先にいたのは見覚えのない青年だった。

金に近い薄茶の髪に、目が醒めるような青い瞳をした、若者が立つ

ていた。声をかけようとしたシエナが急に振り返ったことが意外だったのか、驚きの表情を浮かべている。

それでも、すぐに軽く会釈をし、丁寧な言葉で挨拶を述べてみせる。

「シエナ・イベルス嬢であらせられますか？」

「え、ええ……。失礼ですが、どこかでお会いしましたでしょうか……？」

声を掛けられたということは、以前に話したことがある可能性が高い。今のシエナに、初対面で声をかける者はほとんどいなかった。

けれど、若者の顔に、まったく覚えはなかった。元来覚えの良いシエナにおいて、そのようなことは珍しかったし、若者の顔を見れば忘れるはずがない、と確信できた。

すつきりと筋の通った形の良い鼻。微笑みを湛える唇は薄い。彼の雰囲気似つかわしい。どちらかと言えば中性的といえる美しさは、着飾った女性たちよりも、華やかな気配を漂わせていた。

「いいえ、お初にお目にかかります。……失礼を。わたくしはロジエ・リヴィウスと申します」

にこり、と返される艶やかな頬笑みは、青年の持つ雄々しさと、どこか、少年のような無邪気さを想起させる。

この笑みに魅了される令嬢たちは多いのではないか。

冷静な思考が働く。そう思った瞬間、ずっと、シエナの左手がとられる。

「以後、お見知り置きを……」

そして、当然というように、静かに手の甲に口づけた。

優雅な一連の動作にシエナは言葉を失ってしまう。

顔が熱を帯びるのが感じられた。とっさに、とられた手を引こうとするが、びくともしない。

「お言葉を交えるのは初めてですが、夜会で幾度となくあなたの姿を拝見いたしました。庭園の片隅で咲く、月下美人のごときお姿は、隠そうとしても、人目を惹いてしまうものです」

甘く並べたてられた言葉に、返す言葉が思い当たらない。いつもな

らば、軽くあしらうことができる媚びた言葉にも、先ほどの口づけが邪魔をし、正面からとらえてしまう。

熱は引くことなく、そのことが一層の恥じらいを生んでしまった。滅多に見せることのないシエナの恥入った姿を知ってか知らずか、ロジェはまた、笑みを深めた。

焦ったシエナの思考、それでも、リヴィウス——その家名がようやく引かなかった。

「リ、リヴィウス卿の御子息であらせられますか？」

「ご存じでいらっしゃいますか？ 身に余る光栄でございます。……

わたくしは、マティアス・リヴィウスの次男です」

次男……ということは、後継者は別にいるのか？ ロジェの纏う雰囲気から、一端の所領を治める気配を読み取ったシエナは、どこか肩透かしを食らったような思いを抱く。

リヴィウス卿——先日フェリオも会談をもった、最近力をつけてきた国境近くの所領の長だ。

隣国との交易を通じて力をつけてきている。元々、隣国からの輸入で、利益を立ててきた地方だが、現リヴィウス卿は、ただ、金を輸入するだけでなく、それを細工し、輸出し直すことを確立した。

格段に技術が向上した金細工は、国内外で、話題を呼び、莫大な利益を生んだという……。このことから、マティアス・リヴィウスは、知恵の深い者として有名だった。

翡翠の瞳で見つめ返すと、にこりと、笑顔を返してくる相手には、裏はないように思えた。

けれど、今の状況下で、力を伸ばしつつある貴族がシエナに接触してくることは、何かしらの思惑が働いている、とどうしても考えてしまう。

「……あ、あの、ロジェ殿。お手を放しては下さいませんか……？」
とにかく、と体制を整えるためにも、躊躇いがちに告げた。

先ほど、口づけを受けた左手は、未だロジェの手の中におさまっている。無理に引き抜こうにも、強く握られているためかなわない。

「なにゆえ？」

「え！そ、それは……」

まさか、反論されるとは思わなかった。ペースをすっかり相手にとられてしまい、どうすればよいかまったく分からない。困ったように、眉を下げるしかない。

飄々とした相手の態度に、どうするべきかほとほと困り果てる。

と、突然に、掌に別の強い力が加えられ、横から鋭い声が飛んだ。

「その手を放せ！」

大きな影が、通り過ぎ目前に立ちはだかる。艶やかな黒髪が目に入り、それが誰であるか気付かされる。

「で、殿下！？」

ロジェに握られていた掌を、奪うようにしてもぎ取られた。フェリオは割り入るように、ロジェとシエナの間に立ちはだかつてしまう。シエナに向けられた背からは、フェリオがどのような表情を浮かべているかは見えない。それでも、怒りをあらわにしていることは明らかだった。左手に込められた力は強く、腕は筋立っている。

「誰に許しを得て、シエナに触れる！去れ！即刻ここから立ち去れ！」

怒りを隠すことなく言葉に乗せ、ロジェを叱責する。

フェリオの感情に任せたままの言葉に、シエナの理性が戻ってくる。いけない……いくら王太子でも、正当なわけなく貴族を叱りつけるなど、あつてはならないことだ。ましてや、リヴィウス家の者、今、かの一族との間に軋轢を生んでは、国益の損失につながりかねない

……

「殿下っ！」

思わず、声を上げていた。

「殿下、ロジェ殿はただ、わたしと談笑していらただけです。それを一方的に攻めては、申し開きが立ちません。それに、わざわざ、いらしてくださったのに、退去を命じるなど、自分勝手にもほどがあります！本日も、わたくしの欠席の申し立てに対して、まるで駄

夕子のような振る舞いを返されて……いつまでも、子どものような振る舞いをなさらず、王太子としての立場をお考え下さいませっ！」

一息に言って見せれば、二人の男性の視線を集めていた。面白いものを見たような青の瞳と、対照的に、困惑を露わにした濃紺の瞳。

振り返ったフェリオは、顔面に戸惑いを見せたまま、言葉を発した。

「なぜ、わたしを怒るのだ？……迎えにやったのは、そうしなければそなたが来ないと思ったからだ。わたしに会うことは、そなたの……」

ふさわしい言葉が見当たらないのか、いったん口を閉ざす。思案顔を刹那浮かべて、続きを紡いだ。

「……責任ではないのか？」

フェリオの言葉に、かっと、体が熱を持つ。

「わたしはっ——」

言いかけたとたん、目眩がシエナを襲った。

「シエナっ！」

片手に持っていたグラスが芝生へと転がり落ちた。琥珀色の液体がこぼれ、地面へと浸み込んでいく。

下が、芝生でよかった……グラスが割れずにすんだもの……。

関係のないことが、頭に浮かんでは、すぐに消えた。

両足が耐えきれず、その場に崩れ落ちそうになるが、強い力に支えられた。体の重みすべて預けてなお余りある力強さに、名前の知らない感情が湧きあがる。

それを押し殺して、冷静な声音をつくってみせる。

「大丈夫です……」

無理やりに笑みを浮かべて、支えてくれる手を頼りに立ち上がってみせる。立ち上がりはできたものの、やはり足もとが不安で、雲の上に立つ心地だ。

「シエナ……本当に体を崩していたのか……？」

不安げな声が頭上から落ちる。それを振り払うように、静かに首を振る。

「……いいえ、殿下が心配なさるようなことはありません……。しばし、戯れが過ぎました。ご寛恕を……」

フェリオに使いを出した時点で、体調は特に変わり無かった。ただ、急の出立の準備は、やはりシエナの体に堪えたらしい。加えて、夏の気温は、容赦なく体力を奪っていくものだ。

「送る。今日はもう、帰れ」

「駄目です！……一人で、戻れます。殿下は、こちらにいていただかなくては……」

「……お前の言葉は、聞かぬ」
「殿下っ！」

終わりのないやり取りに、外からの声が入った。

「わたくしがシエナ様をお送りいたしますよう」

故意であろう。気配を消していたロジェが、低い声音で、提案する。
「何をっ！！」

先ほどの熱を思い出したのか、フェリオが声を荒げた。それをシエナは右の手で制する。

「……ロジェ殿、申し訳ありません。……お願い申し上げます」
「シエナ！」

フェリオの声を無視して、別れの言葉を淡々と告げていく。

「……フェリオ殿下。せっかくの場を騒がせてしまい、申し訳ありません。本日は、これにて失礼いたしますわ……ロジェ殿」

すっと、白い手を差し出す。呼ばれたロジェは、それを当然というようにとり、危うげに立つシエナの体を、フェリオの腕から譲り受けた。

そのまま、小さく礼を返して、庭園に背を向けて、歩き去った。

庭園を照らす篝火から離れれば、そこは夜の闇が広がっていた。遠くになりつつある、夜会の明かりと、月の輝きだけが、行く手を照らす。

「みつともないところをお見せして、申し訳ありません。ロジェ殿

にまでご迷惑をおかけして……。」

支えになってくれる、ロジェの手にすがりつつ、歩を進める。

「いいえ、わたくしのことは気になさらずに……。むしろ、貴重なお二人の仲睦ましい姿を見ることができました。殿下は本当にシエナ様を大切にお思いなのでしょうね」

ロジェの言葉に、シエナは微笑を浮かべた。

「殿下も、もう少し大人になってもらわねばなりませんね。王太子として国を担っていくには、今少しの成長がいるようです……」

お気に入りの玩具をとられた子どものような振る舞いに、思わず眉をひそめてしまいそうになる。外への感情をこらえて、薄く笑みを浮かべたシエナに返された答えは、予想を裏切るものだった。

「本当にそうお思いですか？」

「え？」

「殿下は立派に成長していらつしやいますよ……。なればこそその行動だと、わたくしは感じましたが？」

「……わたしには、よく……。わかりません……」

「聡明で名高いシエナ様にも、弱き所はあるのですね……。安心いたしました——」

「え……？」

呟かれた最後の言葉は、シエナの耳に正しく届かなかった。問うて首を傾げるが、ロジェは言いなおす気など無いようだった。会話を断ち切るように、声をあげる。

「ああ、馬車が見えましたよ……ここに！」

シエナの姿を見止めた御者が駆け寄ってくる。ロジェはシエナの代わりに、事の成行きを説明し、その身を御者に託した。

馬車の入口に辿り着き、そこまで付き添ってくれたロジェに礼を述べるため向かい合う。

「ロジェ殿にはご迷惑をおかけしました。日を改めてまた礼をいたします」

小さく礼をし、そのまま馬車へと乗り込もうとするシエナに声がかかった。半身を返すと、蕩かすような笑みを浮かべたロジエとぶつかる。啞然としたシエナの隙をとらえ

「シエナ様……次にお目にかかれる時を楽しみにしております」

再び、その左手に口づけを加えた。

「今日は失礼いたします。では——」

御者に合図を送り、扉から離れる。閉じられていく隙間から、ロジエの姿が消えるのを、呆然とした面持ちでシエナは見つめ続けた。た。

5、宵闇の王子

男の手を借りて、去っていくシエナの背を、遣り切れなさど、もどかしい気持ちを抱えてフェリオはただ、見つめていた。

二人の姿が闇にのみこまれた後も、しばらく視線を外すことなく、暗闇を睨みつける。

どうすればよかったというのだろうか？

シエナの言葉を遮って、無理やりにも連れ帰ればよかったのだろうか？ そうすれば、見知らぬ男に彼女をさらわれるような思いはしなくても済んだのではないか？

けれども、それをしてしまえば、シエナと自分との間にあるものが形を変えてしまうような気がした……。だから踏み込めなかったのだ……。

『責任』

先ほど、シエナに向けてつかった言葉が心を倦む。そんなことを、言いたかったわけではなかったのに……。ふさわしい言葉が見当たらなかった。いや、あったのかもしれない。けれど、その言葉を使うことは躊躇われたのだ。

同じ理由で……。

最近、シエナが王宮を敬遠するようになっていることは、フェリオも当然気付いていた。それとなく、本人にも理由を問うてみるが、いつも、のらりくらりと交わされて、関係のない話題を振られている。

自身で、理由を考えてみても、全く思い当たらない。気のせいか……。———と思いこもうとした矢先、突然断りの頻度が増した。これには、フェリオも冷静ではいられなくなった。だから、今朝、夜会の

欠席の知らせを受け取ったとき、思わず強行な手段をとってしまったのだ。

ぐらり、と傾いだシエナの体を思い出す。

本当に、体調を崩していたのならば、取り返しのつかないことをした――

いつも見上げていた彼女は、いつの間にか、フェリオよりも小さく華奢な生き物に変わっていた。支えればその軽さが際立つ。片手だけでも支えきれぬ薄い体は、柔らかく、微かに花の香りがした。

ぐつと、拳に力を込める。

久々にあった彼女は、相変わらず庭園の端に一人佇んでいた。周囲の気を引いていないつもりなのだろうが、彼女の容姿は否応なしに人を惹きつけてしまう。

つねに、貴族の子息たちが、彼女のことを静かに見つめていることをフェリオは知っていた。

それでも、誰も彼女に声を掛けようとはしない。シエナが王太子の婚約者であることを知っているからだ。下手に手を出して、王子の不興をかつては、家名に傷をつけかねない。

それに、安心して、フェリオも特に気を配りはしてこなかった。義務だという社交に、息苦しさを感じながらも身を置いていた。今回はそれが災いしたのだ。

貴族の令嬢たちとの会話に辟易して、ふと、シエナが気に掛った。

彼女の気配を探した視線の先にあったものは……片手を男にとられ、困惑したように頬を染める彼女の姿だった。

恥じたように俯き加減で、頬を染めたシエナの姿に、体を巡る血が逆流した。

そんな顔をフェリオは知らなかった。

フェリオに向けられるシエナの瞳は、いつも澄んでいて、真っ直ぐだ。

フェリオを導いてくれる彼女は、聡明で、強い心を宿している。

その彼女が見せる、常とは違う表情……しかも、向けられる相手は自分ではない。

気付けば、周囲も忘れ、駆け出していた。

後は、無我夢中。シエナの手を奪い取り、男を湧き立つ感情のまま怒鳴り付けた。

そのまま、シエナに諫められ——気付けば男にシエナを奪い去られていたのだ。

叫び出したいほどの、衝動を何とか抑えようとするが、かなわない。強く拳を握りしめ、爪を深く掌に食い込ませることで、気持ちを縛り付ける。

追いかけたとして、どうなるものでもない……

二人の姿は既に闇へと消えたのだから

「フェリオ殿下——？」

どれくらい、そうしていたのだろうか、近くに人がいることに全く気付けていなかった。一瞬びくりと体を揺らし、声をかけた相手を振り返る。

名を呼んだのは、フェリオと年近い、令嬢の一人であった。

「……なんだ」

不機嫌を隠すことなく、そっけない態度をとる。

しかし、少女はめげる様子もなく、砂糖菓子のような甘い声で言葉を発した。

「……先ほどは、兄が失礼をいたしました。代わって謝罪を、と思ってお声をおかけいたしました……。申し訳ございません」

深々と頭を下げる少女に、フェリオは柳眉をひそめる。粗相をされた、という自覚よりも、自分が失態を犯したという気持ちの方が大きかったフェリオにとって、謝罪はかえって気持ちを逆なでした。

やはり不機嫌な声を返す。

「謝罪などいらぬ。謝罪が必要なことを、そなたの兄がしたわけでは、ないのだから……。わたしの至らなさがもたらした結果だ。気にするな」

これ以上の会話を拒むように告げて、その場から立ち去ろうとするが、少女はしつこく食い下がってきた。

「いいえ、シエナ様に対して、あのような馴れ馴れしさ……王太子殿下の婚約者様に口づけをするなど、恐れ多くて——」

聞き捨てならない言葉に、フェリオの歩みが止まる。問い詰める勢いで、少女に迫った。

「なっ！！何をしたと申した！」

「兄が、シエナ様の手の甲に口づけを……と申しました」

フェリオの必死の間に、少女はあっさりとした答えを返した。思考に一瞬の空白が生まれる。ゆっくり、返された言葉を繰り返し……

「……手……？」

手の甲への口づけは、高貴な女性への正式な礼の一つだ。取り立てて騒ぐようなものではない。

肩すかしをくらった心地で、立上りかけた怒気が鎮まるのを体で感じる。

しかし、それでも、男がシエナに触れたということは、先ほどまでよりも一層フェリオの気を害した。怒りは、熱を逃したが、フェリオの心に冷え固まり、留まった。

「そなたの兄の名は？」

低い声音で、少女に問う。

「ま、殿下は女性を前にして、先に兄の名をお問いになるのですか？」

フェリオの威圧を気にも留めず、ころころと笑い声をたてて、戯れを申す。貴族の令嬢らしい振る舞いに、毒気を抜かれ、ため息が零れおちそうになる。それをこらえて、問い直した。

「……そなたの名は？」

フェリオの言葉に満足したように笑みをこぼす。その場で、小さく腰を折って礼の形をとる。

「イレネ・リヴィウスでございます。お目にかかるのは、これが二度目のことかと存じます」

リヴィウス――

先日、会談を持った辺境の領主の姿が浮かぶ……。粗相はなかったか、と問われたが、目的の令嬢の姿が分からず、曖昧に返事を返したことを思い出す。

そうか……。あの者の娘か

リヴィウス家のもの、と聞いて不思議に納得する自分がいた。今、リヴィウス家と軋轢を持ってしまつては、交易の点から国に損益を生みかねない。恐らく、シエナはその辺りを図っていたのだ……。だから、遮二無二攻め立てるフェリオを諫めた。

冷静な部分では、それを納得できた。が、感情面はなぜ、ああも責め立てられなくてはならないのか、と問い続けている。

しかし、感情だけを振りかざしては、国を支えることはできない。何とか理性を働かせて、湧きあがろうとする気持ちを抑え込む。努めて静かな声で、イレネに言葉を返した。

「失礼を申したな、すまぬ」

「いいえ、殿下がシエナ様以外の女性を気にも留めてらっしゃらないことは有名ですから。……以後お見知り置きを」

少しの皮肉をこめた言葉は、この少女の気の強さを表すのだろうか？そして、自分が、彼女の容姿を気にかけていることに気付く。金茶の髪に、緑色の瞳。シエナの瞳は透き通った深い清流が持つ翡翠の色をしているのに対して、イレネは深緑の木の葉を想起させる。纏う少女特有の甘さは、全く異なるが、シエナの容姿と共通点が多い。自ずとシエナの面影を探す自分に苦笑する。刷り込みのように、フェリオの心にはシエナが住み着いていた。

「せっかくの機会ですので、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

イレエネは観察するような視線を浴びても、気にとめた様子も見せない。気付いているのか、いないのか……。

王太子との貴重な時間を無駄にせぬように、イレエネは一つの間を持ち出した。

「なんだ？」

イレエネの掴みきれない、振る舞いに、微かな警戒心を感じながらも、言葉の先を促す。

フェリオの許可を噛みしめるように、一拍呼吸をおいて、問いを述べた。

「……シエナ様は王宮の書庫に出入りできる、というのは本当なのでしょうか？」

「……なぜ、そのようなことを聞く？」

王宮の書庫は通常、王族か、一部の国幹部、また国に属して研究を行う学者たちにしか開放されていない。けれど、その例外としてシエナは、自由に王宮の書庫に出入りできる。

しかし、なぜこのような娘がそれを問うのか、意図がフェリオには図りかねた。

「御気に障ったのなら、申し訳ございません。ただ、わたくしもシエナ様同様、歴史書を深く敬愛しております。王宮の書庫には、貴重な書物が多く納本されていると聞き……夢見ておりました……」

「して……自身もそれを手にしたい、と？」

「……恐れ多いことですが……」

シエナが、許可を受けていることは、特殊な事情が背景にあるからである。ただ、彼女が婚約者であるからだけではない。彼女自身の知識の深さで勝ち得た権利なのだ。

イレエネが婚約者だからこそ許可を受ける、と考えているならば、シエナを馬鹿にされているようなものだ。

シエナは、ただ、地位だけを頼みに生きるような女性ではない。

「シエナが許可を許されているのは、私の婚約者だから、ということではない。シエナの教師が城に掛け合ってその権利を得たのだ」

気分を害された心地で、強い声で述べると、イレエネは少し不思議そうな表情を浮かべた。

「教師が……？」

「シエナの勤勉さに見合う書物を与えるべきだ、と申してな。そんなに、それが務まるか？」

普通の令嬢が、シエナの備える聡明さに敵うわけがない。そんな皮肉を言葉裏に込めて、イレエネに突きつける。

しかし、次の瞬間にイレエネが見せた表情はフェリオの予想をきっぱりと切り捨てた。

イレエネは、面に満面の笑みを浮かべたのだ。

「……なれば、わたくしもまた、推薦状があれば閲覧できる、ということですわね」

「は……？……そういうことになるの、か？」

「シエナ様のお立場から許可されていることでしたら、諦めもついたので、違つとなればわたくしも可能かと存じ上げます。……それとも殿下は、ただの令嬢風情が、王宮に出入りすることを不都合に思ひですか？」

イレエネの瞳が挑むように鋭く光る。それまでに漂わせていた甘い雰囲気とは、がらりと変わった伶俐さに、目を見張る。

彼女の申し出を断る正当な理由はなかった。

ここで、突っぱねてしまえば、恐らく父親のリヴィウス卿から、フェリオに対して理由の開示を要求されるだろう。別の理由づけを無理やり並べたてて応じることでもないが、リヴィウス家とのつながりを鑑みれば、イレエネを無下にはできない。

書庫への出入りを許可してしまった方が、問題は避けやすいだろう。苦悶の面持ちをしばし浮かべていたフェリオだったが、心を決めたように、向かい合うイレエネに強い光をこめた瞳を向けた。

「いや……。わかった、配慮するように通達だけは出しておこう」

ようやく引き出した言葉に、イレエネは薄く笑みを浮かべ「ありがとうございます」

可憐に礼の形をとって見せた。

その姿を視界の端にとらえて、踵を返し、人がいりめく会場の中へと戻っていく。

すぐに周囲を取り囲まれ、適当な相槌をうち、会話をつなぐ。

先ほどまでの騒ぎを知らぬはずもないのに、誰もそれに触れようとはしない。そのことが更に、自分の失態を恥じさせる。

ふと、イレエネといった少女が気に掛って、先ほどまでいた場所を振り返った。

騒ぎから離れたその場所は、闇がかすみ、もはや、人の気配を残していないかった。ただ、夏の湿った風が木々の葉を小さく揺らし、通り過ぎっていった。

6、蒼天が射す光

こぼしたため息は、憎らしいほど澄んだ空に吸い込まれ、溶けていく。日差しは容赦なく降り注ぎ、肌を突き刺す。

色の白いシエナの肌は、日に耐えきれず、夏の日差しを浴びた後は、決まって火傷を負ったように、赤く腫れてしまう。野外で駆けることが好きだった少女の頃は、何度も夏の光にやられて、侍女の言いつけを守らなかったことを少し後悔したものだ。

少女だった自分の姿を、そんな木々の間に見た気がして、思わず微笑みが浮かんだ。母の手を焼いたあの女の子は、今もここにいるのだろうか？

屋敷の庭の片隅に供えられた日陰のテラスは、緩やかに時を刻む。

「はあ」

気を抜けば、ため息ばかりをこぼしてしまう。

わざわざ自室から離れ、夏の日差しにさらされたテラスにいるのは、理由があった。

溢れかえる、花々の色彩。むせかえるほどの甘い香り。身を置いていると、体の隅々にまで浸食されてしまうようだった。そうして、贈り主の顔がどうしても浮かんでしまう。

冷やされたグラスに触れているはずの手が熱い。

夜会で一度あっただけだ。しかも、迷惑を掛けたのはこちらなのに……。

後日、領地で作られた地酒に簡素な礼状をつけて、リヴィウス家の都にある屋敷に届けた。夜会での振る舞いを考えれば、簡単すぎる気もしたが、あまり大仰なことではできないので、せめてものお詫びに、という思いで贈らせた。

次の日、シエナは屋敷に贈りかえされたものに、愕然とした。

使者数人が抱えた花は、一室を埋め尽くすほど……そして、手渡された小箱を開けば、見事な金細工の首飾りがあった。共に添えられ

た書状には、先日の無礼を詫びる言葉と、前日にシエナが届けたものへの感謝の言葉が紡がれていた。

ささやかな贈り物——お気に召せばよろしいのですが……と加えられた言葉に、似つかわしくないほど、首飾りはあまりにも、豪華過ぎた。

細い金糸を何重にも重ねてつくられた細工は、繊細だが、質量感が大きく豪華だ。中央には大きな石が埋め込まれ、首飾りの存在感を増している。

リヴィウス家が金細工で栄えていることは、有名だが、それでもここまで手の込んだ品は、珍しいのではないか。
手にとることを躊躇われ、そのまま静かに小箱のふたを閉じてしま

う。
そのようなものをもらえる道理が立たない……。
喜び、など全くなき奇妙な感覚がシエナを襲った。そのまま、黙って収めることもできず、失礼がないように細心の注意を払い、新たな手紙をしたためた。

貴殿のお心遣い、身に余る光栄でございます。しかし、わたくしには勿体なさすぎる御品——

それを、引き返す使者に、贈られた首飾りとともに託し帰らせた。
花々は仕方がない、とそのまま受け取ることにし、これで事態を収めることができた……。そう思っていた。

翌日、同じ光景が繰り返されるまでは——

何度送りがえしても、再び贈られる品々。首飾りは、ティアラに変わり、ブローチに変わり、耳飾りに変わった。

品は変われど、しかし、それぞれがもつ、豪華さはどれをとっても見劣りするものではなかった。

繰り返し続ける不毛な争いに、シエナはほとんど嫌気がさしつつあ

る。

飾りに合わせて贈られる花々を避けるのも、そのためだった。

「はあ」

また、ため息。ため息をつくことに、ため息が漏れてしまいそうだ……。

そもそも、フェリオはどうしてあのような振る舞いに出たのであるうか？彼の振る舞いがなければ、シエナが卒倒することもなかったし、ロジエに手を借りることもなかった。あの場の出会いで終わつたはずなのに……――

フェリオが、シエナに対し執着を見せることを、シエナは子どもが見せる独占欲だ、と思っていた。

だから、我を忘れたように敵意を剥き出しにするフェリオを、理性をもっておさめようとした。大人になってもらわねば……正直な思いだった。

しかし、ロジエはそれを正面から否定して見せたのだ。むしろ、成長したからこそ、あのような態度に出た、と――

では、どうしてシエナを縛るのだろうか？なぜ？

理解できないことばかりだ……。フェリオの気持など、当然分かっていると思っていた。7つの頃からずっとその成長を見守って来て、彼の一番の理解者は自分だと思っていた。

でも、今は？彼の気持ちを理解できていると言えるだろうか……？わからない……。

ぐるぐる、と様々なことが頭をまわり、ため息ばかりを付いてしまふ。

「はああ……」

ひととき大きなため息をつく。様々な煩い事はあるけれど、間近に迫ることが、一番シエナの気持に影を落としている。

昨日、王宮から一つの使いがあり、王宮への参内を申しつけて来たのだ。

あの夜会の日以来、フェリオに会っていない。王宮への訪問を避け続けているが、未だ、シエナはフェリオの婚約者である。いくら、もうしばらくの立場であるとはいえ、その責務を果たさなくてはならない。

明日、昼過ぎに参ります、と告げたからには、そろそろ支度を始めなくてはならないはずだ。

汗をかいたグラスをテーブルに置き、静かに席を立った。太陽が南中に辿り着き、一層、日差しが強まる。日よけに用意された傘を開くと、シエナは遮るものがない、日差しの中へ一歩足を進めた。

「あら、ゲイルが出迎えなんて珍しいわね？アリーはどうしたの？」馬車から降り立てば、いつも迎えてくれるアリーの姿がなかった。代わりに、厳めしいゲイルが数人の部下を従えて、待ち構えていた。常ならぬ様子に、首をひねっていると、ゲイルが逡巡しつつ、口を開いた。

「シエナ様、ただいま殿下は客人に手をとられておりまして……アリーもその場に備えているのです……。ご予約にはないことでしたが、なにぶん相手方が……その、難しい方でして……」

ゲイルの言いように、微かな疑問を感じつつも、その問には答えてもらえないことを悟って、表情には出さなくておく。小さく頷いて了解を示して見せた。

「そうなの。なら、しかたがないわ……。その様子では、今日の面会も難しいようね。けれど、このままお暇しては、角が立つでしょう……。久しぶりに書庫へ行こうかしら？……いい？」

「書庫ですか！？」

ゲイルの過剰な反応に、ぴくり、とシエナの美しい眉が動く。それを無視して、一人、思案顔に暮れる。しばし、逡巡していたゲイルが、重い口を開いた。

「……よろしいでしょう。ただし、共をお付けいたして宜しいでしょうか？」

シエナの美しい眉が今度は、はっきりと顰められた。王宮内で、シエナに近衛兵が付くことは、余程の事情がない限り、なかった。それ故に、感じた違和感だが、やはりゲイルに答える気はなさそうだ。

「……いいわ。お願いします」

「かしこまりました」

ゲイルは左手を胸に当て、丁寧にお辞儀を返す。そして、控える後ろの二人に、耳打ちを告げた。

何が、彼らに囁かれたのか……シエナには知る由もなかった。

「では、わたくし共はこちらで控えておりますので」

「ええ。ありがとう」

共だつふたりに、頬笑みを残し、扉の奥に進んでいく。年若い二人の近衛兵が、心を蕩かすシエナの笑みに魅入られ、頬を赤く染めたことに、気付きもせずに。

ぱたり、と扉を閉ざせば、広がるのは、澄んだ静けさだ。フェリオに会えない、ということとは、シエナに安堵をもたらした。

ほっと、小さく息をつき、高く並んだ、書棚へ近づく。埃を纏った書物が放つ独特の香りが身を包む。決して、嫌なものでなく、慣れたシエナにとつては、心を落ち着ける香りだ。久しぶりに、心を落ちつけられた気がする。自然、口元に柔らかな微笑みを浮かんでいた。

教師が、シエナの知らぬうちに王宮に申しつけをしてくれたと知ったとき、震えるほどの喜びを感じた。

普通では手にすることのできない書物の数々を、閲覧できるなど、夢のようだった。そして、教師が自分をそれほど高く評価してくれていたことが、純粹に嬉しかった。

並ぶ書物の中に、興味を引く一冊を見つけ、指でそれを引き抜く。表紙を愛おしげに撫で、緩やかにページを繰る。

しばらく、その場で本を読みふけていたが、本に目を落としたまま、そつと歩みを始め始めた。いつも、シエナが席をとる、書庫の奥、天窓からの光が一筋差し込む、その場所へと向かった。

器用に書棚を避け、意識は書物に集中したまま書庫内を進んでいく。
「ひゃっ」

と、突然、行く手が遮られた。何かに当たったはずみで、その場に倒れそうになる。床の衝撃を覚悟して、きつく目を閉じる。しかし、その衝撃はなく、かわりに、腕を強い力で引きつけられた。恐る恐る瞳を開いてみれば、正面に立つ一人の男性の姿を見止めた。驚きで、声を出すことが出来ない。

そんなシエナの代わりに相手が、青い瞳を細め、笑みを返す。

「ようやくお会いできましたね、シエナ様」

掛けられた言葉に、はっと意識を引きもどされる。恐ろしいものを見たように、思わず後ずさるが、手首を握られたままで、距離を取ることは叶わなかった。

「……ロ、ロジェ殿。ど、どうしてこちらに!？」

いるはずもない相手が急に目の前に現れたことに、瞠目し、上手く言葉を紡がないでいるシエナに、ロジェは余裕の笑みを浮かべた。

「それは、わたくしのお言葉です。まさか、あなたとこのような場所で、お会いできるとは思ってもみませんでした」

「わ、わたくしは、殿下との面会に来て……!」

とつさの状況に対応できずにいるシエナを、ロジェは艶やかな笑み一つでいなしてしまう。

「集中し、本を読みふけているあなたも、夜会の時とは異なり、また別の美しさがありますね。けれど、まさか避けることが出来ぬほど集中なさっているとは……。そのような、あなたもお可愛らしくていらっしゃる」

かっつと、顔面に血が集まる。顔が熱い。

書庫内に人がいるとは想像していなかった。昼を少し回ったこの時間帯、学者たちは研究塔に戻る。その数時間はいつもシエナが書庫を独占できたのに……。

シエナ以外に、書庫の出入りを許可されているものは限られる、王族と学者、あとはほんの一握りの貴族だ。いくら、ロジェが力を持ち始めたリヴィウス卿の子息だからと言って、勝手に入室できる場所ではない。

なぜ、ここに？

整理のつかない考えが、頭を巡る。

一方、ロジェは自らのペースにシエナを巻き込んでいく。

「贈りものは、お気に召しませんでしたか？」

「え……？」

「いえ、どのようなものをお贈りしても、そっけなく突き返されてしまうので……。わたくしもそろそろ手が尽きて参りました。よろしければ、シエナ様のお好みを窺いたく存じます」

残念そうにも見えるロジェの表情に、焦りを感じ、否定の言葉を並べたてる。

「そのようなお気遣いは……。お返しいたしましたのは、あのような品をいただく道理が立たなかったからでございます」

「道理など……。わたくしがあなたの美しさに魅入られたから、とでもいたしましょう」

今朝見た空の青さによく似た瞳が、真っ直ぐにシエナを射抜く。耐えきれず、視線をそらし、シエナは俯いてしまふ。頬をさらりと琥珀の髪が流れていった。

何とか、染まり切っているであろう頬を隠そうとするが、この至近距離では、難しい。

かさり、と革靴が床をこする音が耳に届く。ロジェが近づくのを肌で感じた。

「もう一度、お会いしたかった……」

手首を捕えていた、大きな掌が、下り、シエナの白い手を包む。抵

抗する間もなく、ロジェの口元まで引き上げられ、小さく口づけを落とされた。

愛しむように、柔らかく口づけを落したロジェは、前回とは比べものにならないほど、妖艶さを醸し出していた。

その雰囲気にあてられ、シエナの体温が再び上昇する。

刹那、思考が真っ白になるが、すぐに理性が働き始める。逃げなくてはいけない。

この場を誰かに見られでもしたら大変なことになる。どう、大変なことに？

リヴィウス家の息子が殿下の婚約者に手を出したと？

いや……まだ、ロジェがシエナに気があるなど、決まってはいいない。シエナの早とちりかもしれない……

では、抵抗して見れば、変に思われるのでは……？

ああ！無駄なことばかりが頭に浮かぶ！

まずは、この状況を脱しなくてはならない！

「ロ、ロジェ殿……！」

意を決して、名を大声で叫ぶ。急の反応に、一瞬緩んだ掌の力の隙を捕えて、さっと自らの手を引き抜いてみせる。そのまま、数歩後ずさった。

「ロジェ殿は、なぜこの書庫に立ち入りを許されたのでしょうか？」

シエナが見せた決死の抵抗に、ロジェは最上の笑みを湛えた。大きく一つ頷いて見せる。

「少々、急ぎすぎました。あなたは、聡明ですが……可愛らしい面を、お持ちなのですね。面白い……。さて、あなたの問に答えなくては。……わたくしが、入室を許可されているわけではありません。わたくしの妹が許可を頂いたので。」

ロジェが告げた答えは、シエナの予想を超えていた。

「妹君、が……？あの……妹君は学者なのですか？」

「いえ、ただの、娘でございます」

疑問が、新たな疑問を繋ぐ。

「なれば……なぜ？」

自然に問いを投げかけていた。

「夜会で——」

「夜会？」

意外な言葉が出てきたことに、眉をひそめる。一瞬、ロジェの面に奇妙な笑みが浮かんだように見えた。それは、あまりにも刹那のことで、シエナの記憶の端にも残らない。

「ええ、夜会で、殿下から直接許可を頂いた、と申しました」「殿下、が……」

言葉が上手く頭に浸透しない。理解することを拒むかのように、ロジェの告げたままの言葉が繰り返されるだけ。

なぜ？

ようやく馴染んだ言葉に、問いかけは続く。

どうして殿下が直接、許可を下したのだろうか？

それほどまでに、優秀な女性だと？

一人思案にふけり、周囲から隔たってしまったシエナを、ロジェは静かな光を瞳に湛えて見つめていた。

常に宿すような暖かな色でなく、冴え冴えとした冷気を伴う青い色。その色にシエナは決して気付くことはない。

シエナを引きもどしたのは、室外のざわめきだった。乾いた空気が満ちた書庫に、廊下の声が漏れ入る。待機していた近衛兵が、言い争いをしている様子が微かに聞き取れる。

入口を見つめていれば、ゆつくりと扉が軋みをあげた。

7、閉ざされた小部屋

湿った空気とともに、開かれた扉から入って来たのは、フェリオと、シエナの知らぬ少女だった。

金茶の髪に、深緑の瞳。

波打つ髪は書庫に入る微かな光をとらえ、キラキラと輝きを放つ。

一心に隣のフェリオに向けられる瞳は、甘くまろい色を帯びていた。宵闇に喻えられるフェリオの隣に立てば、月明かりが闇夜を照らすかのごとき風情を醸し出す。

黄みがかったドレスから延びた少女の腕は、フェリオの腕をしつかりと捕らえている。絡みつき、身を寄せる姿は、仲睦まじい恋人たちのようだ。

映える二人の姿に、胸が奇妙なリズムを刻み始める。高揚感にも似たその感覚に、シエナは名前を見つけられない。ただ、喜び溢るる時とは異なり、息苦しさを覚えた。

思わず、きゅっと、体の前で組まれた掌に力をこめていた。

二人が、何か、談笑をしつつ、室内へと立ち入ってくる。少し奥まり、入口からは確認できない位置にいたシエナとロジェの姿を、ようやくフェリオが見止めた。濃紺の瞳に、一瞬にして強い光が灯る。

「シエナ？なぜ、ここに？」

発せられた声は、低く、シエナの元へ真っ直ぐに届く。

問われたシエナは、息苦しさを感じながらも、吐き出すようにして、言葉を落とした。

「ゲイルより、殿下に客人がお見えだ、と伺ったので、書庫に参らせていただきました」

感情の見えない、固い返答に、フェリオの柳眉が歪む。シエナを捕えていた視線が隣へ移動した。

「ロジェ殿も、外でお待ちをと、申し上げたはずですが……」

「申し訳ございません。先ほど、書庫を訪れた時に、どうも失せも

のをしたようで……。申し上げるのもお恥ずかしく、勝手をいたしました」

悪びれる風情を持たずに、ロジエは言つてのける。ロジエの返答に、ますますフェリオの眉間のしわが深まる。

冷えた空間に、突然、ころころ、と鈴を鳴らすような少女の笑い声が響いた。

「お兄様、お静かにお待ちくださいませと申し上げましたのに。先日夜の夜会のように、シエナ様を困らせていらっしやらないでしょうね」

「イレネ、兄を信用していないのか？……シエナ殿、これが先ほど申し上げたわたくしの妹、イレネです。イレネ、あいさつを」
兄――聞いて、点と点が繋がり、一つの考えを生む。ああ……この少女が殿下から書庫入室の許可を得たものか、と。

「お初にお目にかかります。わたくしはマティアス・リヴィウスの娘、イレネ・リヴィウスでございます。シエナ様のお噂はかねがね耳にしております」

可憐な微笑みを浮かべ、小さく礼をとる。その姿は、少女としての愛らしさを残しながらも、振る舞いは女性らしく、見事なものだ。戸惑いを隠せないシエナに、イレネはにつこりと、頬笑みを深めて見せる。

「先日の夜会で、殿下に書庫の利用許可を願い出たのです。わたくしも、シエナ様同様、歴史書を嗜みますゆえ、ずっと王宮の書物を夢見て参りました。本日やっと、その夢を叶えることができましたわ。喜びを抑えきれず、今朝許可状を頂いて、そのまま飛び出してきましたしまいました。……けれど、シエナ様とのお約束があったとは知らず……申し訳ございません」

しおらしく、視線を床へ落として見せる仕草が、また愛らしい。年頃の娘が見せる、少女と女性の合間の儂い美しさを、イレネはみせる。

シエナが、持たぬもの……元々持っていたかも分からぬ、その可憐

な様子に、心を摘まれた心地になつてしまふ。

「いいえ……わたしのことは気になさらずに……」

イレエネの輝く視線から逃れるように、自然、顔を逸らしていた。

「殿下？よろしければ、シエナ様に書庫をご案内してただけませんかしら？」

シエナの様子気付いていないのだろうか、フェリオの衣を小さく掴み、無邪気にフェリオにねだってみせる。小さな小鳥が、さえずるような、甘い声が、シエナの耳にも届く。それは、断られることを、微塵も予期していないような、声音。

「案内？……しかし、シエナはわたしと——」

言い淀む、フェリオの言葉から、断りの色は感じられなかった。恐らく、建前としては、シエナを立てねばならないが、イレエネを無下にも出来ないのだろう……。

フェリオの言葉が終わる前に、シエナは口を開いていた。

「申し訳ございません。わたくしはすぐに屋敷に戻らねばならないのです。殿下との面会の時刻も疾うに過ぎてしまいましたので……。早々に帰らねば、屋敷の者に心配をかけてしまいます。折角の申し出ですが、申し訳ございません……機会があれば、是非また」

にこり、と優雅な微笑みを浮かべて見せる。虚勢を張っている、と思われたくはなかった。何のことはない、あらかじめこのようなことは予期していた。息苦しさなど、気のせいだ。

もう一度、浮かべた笑みは、いつになく妖艶な色を含んでいた。

「よろしければ、殿下にご案内していただかれていますかがでしょう。フェリオ様もまた、書物を好まれてらっしゃるはずです。わたくしなどよりも、よほど詳しいかと……」

シエナのみせた艶やかすぎる表情に、周囲は、あっけに取られ、言葉を失う。

「では、わたしはお先に失礼いたします」

そんな、周りを置いたまま、シエナは優雅に礼をつくった。声をかける隙を与えずに、そのまま風が通り過ぎるようにして、扉までの

距離をこえていく。

真っ先に、意識を戻したロジェがさっそうと歩きだす背を追いかけて、声をかけた。

「シエナ様、門までお送りいたしましょう」

首だけを巡らせて、シエナがロジェを見やる。翡翠色の瞳を捕らえたロジェは、一瞬何かに怯み、びくり、と体を強張らせた。

「いいえ、外に近衛を待たしておりますので。お言葉だけ頂いておきますわ」

その声は、柔らかい音を含みながらも、追隨を決して許さない、強いシエナの意思を伝えていた。それ以上、ロジェはシエナの後を追おうとはしなかった。

ロジェの姿に満足し、再び扉と向かい合う。

白く細い指を、金細工が施された取っ手にのせて、ゆっくりと引いた扉は、入室の時よりもずっと重く感じた。

「シエナ！！」

近衛兵を二人連れ、廊下を進んでいたシエナの背中に、鋭い声がかかった。振り返らずとも、声の主は容易に想像できた。10年も側にいるのだ、わからない方がおかしい。けれど、シエナは、その歩みを一向に緩めようとしなない。控える近衛兵の戸惑いが、手に取るように伝わってきた。

王太子のお声かけを無視するなど、彼らからしては、あり得ぬことだ。それを分かっているながら、シエナは進み続けた。次第に、力強い足音が近づいてくる。

「シエナ！待て！」

最後の呼びかけとともに、ぐっと強い力で肩を引かれた。無理やりに、向かい合われる。シエナの振る舞いに腹を立てているのだろう。フェリオの瞳は、怒りで燃えていた。

合さった翡翠色の瞳は、静かな色を湛え、深く、緩やかな川の流れを想起させる。緩やかに、目が細められると同時に、穏やかな声がささやいた。

「お可愛らしい姫ですね」

「は？」

「殿下とてもお似合いでいらつします」

慈しみに満ちた瞳は、母親が、幼き子に向けるものによく似ている。安らぎを感じさせるはずの視線に、フェリオは心をかき乱される。求めるのは、このような視線ではない。フェリオが欲するのは、シエナが夜会の席でロジェに見せていたような、どこか迷いを抱いた瞳だ。

いらいらとした面持ちで、ぐしゃり、と髪を掻きあげる。そして、控えている兵に声を飛ばした

「お前たち、下がるがよい」

「ですが……」

「命令だ！即刻ここから立ち去れ！」

躊躇う兵に、強い檄を飛ばす。はじかれたように、瞠目した彼らは、瞬時に背筋を伸ばして敬礼をとり、そのまま何もいわずに、この場から姿を消した。

「また、無茶をなさる……」

立ち去っていく、近衛兵の背を、小さくなるまで見ていたシエナは、苦笑を浮かべていた。

「なぜ、わたしを避ける！」

フェリオの怒りは消えない。むしろ、宿る火は勢いを増しているように思えた。シエナはその様子に、苦笑を深くする。

「避けてなどいません……」

「謁見にも来ぬし、夜会でもわたしを避けて、会場の隅にいただけ……。わたしが、お前に何かしたのか？何が悪いのだ？言ってくれ」

「いいえ……。殿下のせいではございません……」

「では、何ゆえ？」

「……これはずっと決まっていた定めなのです」

見上げる形で、濃紺の瞳を覗きこむ。罪人を詰問するように、強い姿勢のまま質問を繰り返すフェリオをじっと静かに見つめた。

闇色に艶めくしなやかな髪。夜の訪れを知らせる空の色。宵闇の彼の隣には、輝かしい光を纏ったあの少女が相応しいだろう。月下美人に喻えられた自分では、フェリオの行く末を照らしてやることはできない。

つきり、と胸を締め付ける感覚が、何であるかを、悟ったような気がした。

——子との別離を惜しむ母の情、か……？

成長を見守り、慈しんできたフェリオが、シエナの元を去ろうとすることに寂寥を感じたのだ……恐らく。

「わかるように……説明せよ」

怒りの合間に、切なげな揺らぎが生じる。その揺らぎにさえ、愛しさを感じる。

「リヴィウス卿は必ず王家に利をもたらし下さる方です。……イ

レーネ様も聡明な方とお見受けしました」

翡翠色の瞳は、澄んだ光をフェリオに照らし続けている。

真つ直ぐに向けられた瞳から、シエナにそれ以上言葉を紡ぐ意思がないことを悟らされる。湧き上がる怒りを、受け止めてもくれないと。

フェリオの瞳から急速に怒りの色が引いた。すべてを拒絶するかのように、視線をそらして、顔までもを背ける。

シエナはその様子の変化に微苦笑を浮かべてしまう。間接的とはいえ、拒絶を示したのは、初めてのことだった。

そうして、シエナの微かな変化に気付いて傷ついた表情を浮かべたフェリオに、いやがおうにも、感傷を抱いてしまう。

駆け寄り、強く握られた拳に掌を重ね、なぐさめの言葉をかけてやりたい。幼いころ、よくそうしたように、側に寄り添って、その背にそっと手をかけてやりたい。

その思いを振り切つて、両腕を体の前で強く握りしめた。

「さあ、姫の元へ、お戻りください……きつと、殿下がおられず、心細くていらつしゃいますわ」

すつと、足音もなく、フェリオとの間に距離を置き、先を促して見せる。フェリオは眼を逸らし、体を固くしたまま。

「……失礼いたします……」

小さく言つた、別れの言葉はフェリオに届いているのか。確認もせず、踵を返す。

ぱたぱた、と微かに音を立てて、足早に遠ざかっていく、真っ直ぐな背を、フェリオは決して見ようとしなかった。かたくなに、つややく床の木目だけを見つめていた。

悲しげな色がシエナの面に浮かんでいたことを、フェリオは知らない。

8、月の裏側

シエナが父に呼び出されたのは、最後に王宮を訪れてから、二週間ほど過ぎた頃だった。

寝室へと続く控えの間は、10年前と何ら変わったところはない。あの頃と同じ、光の溢れた室内で、父はシエナを待ち構えていた。浮かぶ表情は硬く、ピリピリとした空気が漂う。

連れ立った侍女に退室を促すと、静かに扉が閉じられた。無然としかいようなない、父の表情は、かつてこの部屋で、彼が浮かべていたものとは、様変わりしていた。

「父上、どのような御用でしょうか？」

冷めた声で、シエナが問うと、父は眉を大袈裟にしかめて見せる。

「フェリオ殿下のことだ……。近頃、妙な噂を耳にする……。真偽が定かではないのだが……。殿下が、リヴィウス家の令嬢を優遇していると。お前は承知しているのか？」

「はい、イレエネ様と申される姫君です。学に造詣が深く、聡明な方、とお見受けいたしました。殿下が興味をもたれたのも、頷けます」

淡々と、答えを述べる、シエナに、父の機嫌は目に見えて悪化していった。瞼を重く下ろし、溢れだす怒りをこらえるようにひじ掛けに置いた拳が揺れる。そして、地を這うような声音が響いた。

「そなた……。何を考えておるのだ……。近頃、お前が、そのリヴィウスの兄を屋敷に招いているとも聞く……。今の立場を理解した上での行動だと申すのか!？」

「はい」

「シエナ！お前は——」

「父上、わたくしは、もとより、この覚悟を決めておりました。幼い殿下と婚約を結んだ時から、いずれこの婚約は解消されるべきものである、と感じておりました。ですから、今リヴィウス家が対抗

する相手として現れたことは、わたくしの予想通りのことです。今さら、どう足掻いたとしても、この流れは変わりません」

長年、心に秘めていたことが、すらすらと口先から零れおちてゆく。父の表情が、強張って、固まるのを目にしながら、やめることが出来ない。閉ざされたものを解放していく快感を、シエナは感じていた。

ひとつ、息を大きく吸い込む。

「お父様。お気付きくださいませ。既に、時代は移り変わったのです。我がイベルス家が隆盛を極めていた時は終わり、新たな者へと権力は移ったのです。王家は、一貴族のように、衰えるわけにはいきません。未来永劫、栄えていかねばならない……故に、強者を身内に引き入れて、進まなくてはならないのです……。イベルスには、その力はもう、残っておりません……お父様も、存じておられるはずです……」

清流のごとき翡翠の瞳には、今は、冴え冴えとした色が浮かぶ。冷えたその瞳は、強い光を放ち、正面に座す、父を突き刺す。

自らの手駒として、従えていたはずの娘が見せた、異なる表情。

幼き頃は頼もしくも感じたその伶俐さが、今は憎らしく思う。腹の底から湧き上がる熱き思いは、自らの娘に対する怒りか、それとも、愚かな企みを立てた自分自身に対してか。

深く眉をひそめ、瞼を鉄の扉のように重く閉ざす。ぐっと、あごを上げて、息をつめた表情は、湧きだす全ての感情を身に押し止めようと、足掻いている風に見えた。

「……わたしは認めぬ！認めぬからなっ！！」

怒号が一つ大きく室内に響いた。ひじ掛けをつかむ手が震えている。当然それを見止めたはずのシエナは、けれど、何も言葉を紡ぐことなく、無言で坐した父に深く礼をした。

あげた面は、凍りついたように、何の感情も読み取ることが出来ない。

しばし、父の姿を見つめた後、もう一度礼を返し、静かに室内から

姿を消した。

静寂が舞い降りた一室には、全てを拒否するように、瞳を固く閉ざした男が一人。いつまでもそこを動こうとはしなかった。

白い日よけ傘は、強い日光を阻み、足元に、ささやかな影をつくる。光に少し辟易しつつも、吹き抜ける風が心地よい。

「顔色が優れないようですね」

半歩後ろを歩いているロジェが言う。

「……強すぎる光とは、少し憎らしいものですね」

気丈を装って、にこりとほほ笑みを浮かべてみる。今朝の出来事は、やはりシエナの心に小さな影を落としていた。仕方のないことだ、と頭では理解できるが、父の心中を察すると、心を締め付けられるそれを知りうるはずもないロジェに、気取られるとは……。思わず浮かびそうになる苦笑を、噛み殺した。

「シエナ様は、ご無理をしていらっしゃるようだ……」

「まさか。年を重ねてしまっただけですわ……。子どもの頃なら、これくらいの日差しなんて、ものともせず、走りまわっていましたのに……」

笑みを返したシエナに、ロジェは探るような声で問うてくる。

「シエナ様は、よほどお転婆な少女だったようですね」

少し、からかいを含んだその声に、ばつの悪い心地を覚える。シエナは眉尻を下げて、ため息交じりに言葉を零す。

「ええ……母には迷惑をかけました。王宮へ行っては、殿下付きの護衛だったゲイルにねだって、剣の稽古をつけてもらったり、馬を勝手に率いて、遠乗りへ出かけたり……。今思えば、本当に無茶ばかり……」

「無茶をなさるシエナ様など、想像もできませんね」

「そつかしら……？」

「ええ、さぞかし美しい少女であられたらろう、と思っておりますが、とんだお転婆だったようですね。今のあなたからは、想像することさえ、難しいほどです。……それとも、わたくしにはお見せ下さっていないのですか？」

「まさか、今も十分無茶をしますよ。お知りになられてから、愛想を尽かさないで下さいませ」

「ははっ。では、一度お手並みを拝見させていただかねば……」

とりとめのない会話を交わし、時間を流していく。

連れだって、庭を散策する二人の姿は、恋人たちが親しげに愛を語らうようにも見えた。屋敷の塀を越えた先に広がる庭は、外の世界と完全に隔てられ、周囲には人影などなく、ただ、木々の梢が日に照らされて、地上に短い影を伸ばしている。

ロジェが繰り返した贈り物の嵐は、予告なく、突然に止んだ。

しかし、それは状況が好転したわけではない。……代わりに、2日と空けず、シエナの前に、本人が姿を現すようになっていた。

朝から、屋敷を訪ねてきたフェリオを誘い、シエナは庭を散策する。とりとめのない会話を繋ぎ、時折、声を立てて笑う。

無邪気な表情を見せる、その面は、警戒心などまるで感じさせない。本当に、心から、この時を楽しむように……

フェリオとイレエネの噂は瞬く間に王都を駆け巡った。今を時めくリヴィウス卿の令嬢が、王太子殿下の目に止まった、ということは、王宮の動きを根底から覆すきっかけには、十分だった。

密やかに陰で巡らされていた策略が、表立った動きを見せ始め、シエナを渦に巻き込んでいく。

中心にいるのは、シエナ自身であるはずなのに、彼女は、その渦を高めから眺めているようだった。抵抗をすることなく渦のただなかに留まり、流れが向かう方向を冷静に見つめていた。

そして、また、別の方向からも、シエナの地位を揺るがす動きが生

まれていた。

振り返ってみれば、甘い笑みを返される。それに、曖昧に笑ってみせて、気付かれないように、小さく息をついた。

——シエナ様は、王妃の地位を諦めて、リヴィウス家との姻戚関係を狙っているらしい……——

ロジェとの関係を暗に示した噂は、フェリオとイレネの噂と対になって広められていた。もちろん、シエナにそのような意図はないけれど、否定もしなかった。

利用できるものは、利用させていただこう……——

浮かんだ、冷たい考えに、苦笑してしまう。ロジェがシエナに向けて思いの正体が定かでないにもかかわらず、利用する。

ロジェとの噂が立ち上れば、シエナを擁護していた者たちも、抵抗するすべてを失ってしまうだろう。そうなれば、後は、先行きを見守るだけ。シエナとの婚約破棄の申し立てがなされ、イレネとの新たな婚約が成立するだろう……。

傘の柄を握る掌に、一瞬力がこもる。きゅ、っと心が締め付けられた気がした。深く、新鮮な空気を吸い込み、気持ちを整える。

はじめから、わかっていたことではないか……と。7つも下の、王太子との婚約を決意した瞬間から、覚悟は出来ていたはず。イレネは十分な後見を持ち、彼女自身も聡明だった。

シエナの役目は終わったのだ。しがらみから、解き放たれて、清々しい思いに浸ればいい。

頭ではそう思うのに、心だけは上手く働かず、理由の知れない痛みが胸を刺す。

思いならない我が心に、強く下唇を噛みしめた。

「本当に、シエナ様は学が深い……。お話をしていると、その博学に、舌を巻いてしまいます」

シエナを褒めたはずの言葉に、彼女が浮かべたのは何故か苦笑だった。

「これしか、取り柄がありませんから……」

少し眉をひそめて、浮かべる頬笑みは、ただ謙遜だけでなく、心からそう思っている様子を表していた。

「そうですね、役目を終えた時は……もし、許されるのならば、家庭教師として、どちらかの子女の教育を任せていただきたいと思いますわ……。わたしが、師から受けたものを、同じように人へ渡してみたい……」

シエナは遠く、景色に視線をやり、思いふけるように話す。

「お役目、とは？」

ロジェの間に、ぴたり、と歩みが止まる。けれど、視線は、遠く先を捕らえたまま。

しばらくの沈黙の後、一步先を進むシエナが肩を回し、ロジェを振り返った。

日傘の作る薄い影の射す、その面には、切なげな笑みが、陽炎のように揺れていた。

刹那、垣間見せた彼女の素顔に、ロジェは自らの問も忘れ、見入ってしまう。

シエナは、その笑みをロジェに向けただけで沈黙を守り、またゆつくりと歩みを進めようと、体を正面へと戻してしまった。

張りつめていた緊張の糸を、突然断ち切られ、狐につままれたような心地で、ロジェは去りゆくシエナの背を見つめる。

自らの意思が絡まり、そして反して、ひとつの問いがロジェの口から零れおちていた。

「……なぜわたくしを屋敷に招きいられるのです……？」

脈絡もなく、問われた言葉に驚き、シエナは再びロジェを振り返ってしまふ。結いあげた髪から零れおちた房が、巻き起こる風に揺れ、輝きを放つ。

「お越しになるのは、あなたではありませんか？いくらわたしでも、

わざわざ訪ねていらした殿方を追いつ返すほど無粋ではありません」
くすくす、とからかうようにねめつけてみれば、自らが告げた問いに、しばし瞠目していたロジェもまた、笑い声をあげていた。

「そうですね、押し掛けているのはわたくしの方だった。失礼いたしました」

「……あなたも、よく飽きもせずに、通ってこられるんですね。……わたくしに取り入れられても、もたらす益など、無きに等しいでしょうに……」

「まさか？」

「殿下の信も失ったわたしは、王宮で渡り合えるほどの権力をもつてはおりません……。イレ－ネ様が正式に婚約者となられたら、わたしの役目は終わります。24など、行き遅れもいいところ……。引き取り手など無いでしょう……。家庭教師ぐらいしか価値はありませんわ……」

「はははっ」

ロジェの高らかな笑い声が上がる。

笑い話などした覚えのないシエナは、いつまでも治まらぬ彼の笑いを、奇妙なものを見るかのように、眉をひそめてみていた。

そんな彼女の視線に気付いて、ロジェの表情に冷静さが戻る。

「……あなたは、本当にご自分の価値を見誤っておられるようだ……。わたくしは、イベルスが欲しいわけではない……」

真っ直ぐに向けられた視線に込められた熱を、感じ取る。

「あなたが、欲しいのです……」

その熱さに反して、冷たいものが心を覆ってゆく。

ロジェは始めから、明らかな好意をシエナに向けていたはずなのに、それを信じる事が出来なかった。

そう、思っていた……。

「今、このようにして隣に立つことを許されている、というのは、少しでもあなたの心に置いて頂けると思っても……？」
だが、違う。心の冷たさが、曇りを晴らす。

シエナは、信じたくなかったのだ……。

自分が持つ暗い部分を、ロジェに向けていることを、正当化したかったから……。彼も、同じように目的を持ってシエナに近寄って来たのだ、と思いたかったから……。

けれど、現実、彼を利用しているのは自分。向けられた熱い感情を、冷えた理性で覆い尽くす。

思わず、口元から、笑みが零れていた。

人の感情よりも、先に政略を巡らせる、自分に対する自嘲。それを、柔らかな頬笑みに変える。

心の冷たさが、シエナに仮面を与えてくれる。

「……参りましょう？」

これが、わたしの『役目』なのだから――

シエナにとって、ロジェとの関係を偽ることだけが、残された責務。婚約解消を円滑に進めるためだけに、艶やかな微笑みを相手に向ける。表情とは正反対に、心は凍てつく風が吹きすさぶ。冷めた思いは、夏の日差しの中でさえ溶けることなく、シエナの心の中を、覆い尽くしていた。

フェリオとシエナの婚約を破棄する申し立てが、王宮に寄せられたことを、知らせる使者が、シエナの屋敷にもたらされたのは、翌朝、夜が明けて間もないころだった――

9、幻想と塵気楼 上

『あなたの名は？』

問うた子どもの掌は、小さく、けれど、とても温かった。

「お目覚めですか？」

天井へ届くほど大きな窓を覆っていたカーテンが開かれ、光が室内の闇を破って、溢れる。闇に慣れた目に、朝の日差しは容赦なく突き刺さった。眠りから目覚めたばかりの眼は、光を弾くように、瞬いている。

まだ夢と現の間を彷徨う思考は、先ほどまで、掌の中に合った温かみが、突然消えたことを正しく理解できない。白くほっそりとした自分の掌を、微かに残った、温もりのかけらを、思い出して眺めていた。

「シエナ様？ いかげなさいました？」

いつもと異なるシエナの様子を侍女がいぶかしんで、声を掛ける。それをきっかけにして、思考にかかった霞に、光が差し込み、瞬間に晴れていく。光のともった瞳が静かに侍女の姿をとらえて、細められた。

「……いいえ、懐かしい、夢を見ました……」

上半身だけ起こした体を、ゆっくりと解して、目覚めの間隔を全身へ伝えていく。その間に、侍女がサイドテーブルに朝支度の用意を整えてくれる。ありがとう、と差し出された水差しを受け取り、小さく口をつけた。

ほっと、息をつくくと、ギシリ、とマットを鳴らして寝台から体を起こした。

背に流れる、生系のような琥珀色の髪をさらさら、と侍女が梳いてく。支度をゆるゆると整えているうちに、次第に思考がはっきりと形を持つ。

『どうするつもりなのだ！』

脳裏に浮かんだ声に、微苦笑が浮かんでしまう。

どうするつもりも、もはやないシエナに向けられた言葉は、苦笑で返すしか他がなかった。こうなったのは、ある意味シエナが仕組んだ、とも言えたから。

昨日早朝、届けられた知らせに、父は憤慨し、シエナは安堵の息をついた。

やっと、本当の意味で終わった——と

責めの言葉を吐き続ける父を、静かな微笑みでかわすシエナ。

対照的な二人の姿に、屋敷の者たちはおろおろと立ち尽くすばかりだった。

『わたくしを責めるのならば、ご自分の力量で対応なさればよろしいのでは？わたくしを、押し上げたのは紛れもないあなた自身なのでしょう？』

冷たく言い放ったシエナの言葉で、不毛な応酬は終わりを告げた。

父親にその権限がないことを十分に理解した上での、突き放したような、冷やかな言葉は、父の心を深くえぐったらしかった。

刹那、深く眉をひそめたと思えば、がくりと肩を落としてしまう。しおれた背から、彼が最後の希望を手放してしまったことが、はっきりと読み取れた。

あれでよかったのだ、と、あまりにも小さくなった父の背中を思い出して、自分に言い聞かせるように呟く。イベルス家がこれ以上王家に関わることは、国益にならないならば、出来る最大の貢献は、自ら身を引くことだ。

何度繰り返したか分からない論理は、深くシエナの心に根を下ろし、シエナの考えを支配する。それでも、父が見せた最後の寂寥が、切なく、胸に突き刺さる。

父を失望させたのは、シエナ自身だと、いう思いが、暗く心を覆っていく。

切り立った崖の端まで、導いたのは、王家であり、父自身でもあったはずだ。しかし、最後のひと押しをしたのは、紛れもなくシエナだ。

フェリオの傍にはいられない、と出会った時から心に決めたのは、シエナ。

イレネがフェリオに近づくことを、知りながらも、手を打たなかったのも、シエナ。

どころか、後押しをするように、フェリオから距離を置き、ロジェとの噂を利用したのも、シエナ。

目の鏡にうつる、翡翠色の瞳を見つめ、そこに燈る火が強まるのを、感じる。

ここで、揺らいではいけない。決めた道を進まなくてはならない。これが、わたしに与えられた『責任』なのだから……。

シンプルな礼服をしつらえてもらい、簡単に身なりを整えた後、シエナはやってくるであろう、王宮からの使者を、自室から臨むテラスで待っていた。

昨日、婚約破棄の申し入れがされたのなら、恐らく午後には、要求が受理された上で、婚約を破棄する決定がなされるはずだ。そうして、イレネを新しい婚約者に上げるための準備が行われているだろう。

他の貴族の名も、ちらほら、と挙がっていたはずだが、この段階で、申し入れが行われたのなら、最有力候補はリヴィウス家に違いない……。フェリオとの関係から見ても、周囲が反対することは難しいと思われた。

テーブルに置かれた、カップから立ち上る心地よい香りに引かれて、手を伸ばす。口をつければ、バラの香りが広がり、微かな渋みを伴って、喉元を通り抜ける。

ふと、アリーが丁寧にに入れてくれた紅茶と、比べて、少し物足りなさを感じる自分に気付かされ、思わず苦笑してしまふ。もう、彼女が手ずから淹れた紅茶を飲むことはないだろう。

お別れを、言えなかったな……。

ああ……でも、もしかすれば、婚約者の立場を離れたならば、正式に彼女を屋敷に招待することも可能かもしれない。一貴族の令嬢ならば、侍女として、行儀見習いに王宮へ遣られることもある。立場としては、同じといえるかも……。

少し、軽くなった肩の荷に、今までとは違う可能性を想像し、ともすれば沈みそうになる心を、明るい気持ちに傾けようとしていた。

「シエナ様……御昼食はいかが——」

「王宮からの使者は？」

「……ございません……」

日は既に空高く昇り、微かに薄らいだ日差しを、真上から降り注いでいる。注がれたカップが冷え切っても、一向に知らせが届く気配がない。

こつこつ、と爪が磨かれたテーブルの上をたたく音が鳴る。苛立ちを隠すことなく、整った眉をひそめた姿は、剣呑な雰囲気を漂わせ、周りに人を寄せ付けない。

昼食の時間を過ぎて、テラスから出てこようとしないうシエナを心配した侍女の一人が、声をかけたのだが、シエナは『城からの使いがいない』と耳に入れたきり、沈黙を続けてしまっていた。

大理石の彫刻のように、美しい指先を、唇に軽く当て、思案顔で、一点を凝視する。

声をかけた手前、シエナの指示なく、行動を取れない侍女は、手持無沙汰に、きよるきよるとあたりを見回すばかりだった。

と、静かな声が、投げかけられた。

その内容は、すんなりと、彼女の思考に浸透していかない。虚を突かれたかのように、瞼を激しく瞬かせ、声を詰まらせながら、シエナに問い返した。

「……申し訳ございません……今、なんと……？」

明らかに、動揺する侍女に、口元だけを緩めて、一段低い声音で告げた。

「……支度を。王宮へ参ります」

瞳に浮かぶ翡翠色は、これまでになく、深く、強い色合いを秘めていた。

執務室へと通じる道は、ただ一つ、長い廊下だけであった。万が一のことに備え、見通しの良い、長い一本道の廊下の先に、ぽつりと重厚な木の扉がそびえる。それゆえに、外部の喧騒が、ここに届くことは、ほぼ皆無に等しかった。小鳥のさえずりや、虫の音、吹きすさぶ風の音、自然が奏でる音のみが、室内には届けられた。そして、時折、訪れる政務官などの足音が響く。

しかし、今、厚い扉の先から漏れ聞こえるのは、複数人の足音と、焦ったように荒げられた人の声だった。扉と真向いに位置する机に、坐したフェリオは、いぶかしんで、その柳眉をひそめる。

何事か――

と考える間に、その音たちは距離を確実に縮め、この場へと、近づきつつある。自然、警戒心が湧きあがり、佩刀した剣に手をかける。ゆっくりと席から立ち上がり、扉の先にいるであろう者に、鋭い視線を向けた。扉に彫られたレリーフの文様を睨みつけるようにし、相手が乗り込むのを、待ち構える。

ど、どん

強く、扉を叩かれた。ごくり、とのが立てた音は、フェリオの耳にも届いていた。

「入れ」

固く、乾いた声に、返答はなく、その代わりに、扉がその重さを示す音を立てて、開かれる。

現れた者の姿に、フェリオは濃紺の瞳を大きく見開いた。

10、幻想と塵気楼 下

「シエナ様っ！無理をなされては困りますっ！！」

「ゲイル！下がりなさいと言っているでしょう！！なにも、王太子を取って食ったりしないわよっ！」

「シエナ様！お、お言葉がっ……」

「なに！？14の頃のわたしを知っているなら、これくらい許容範囲のはずよ！わたしは、ただ話をしに來ただけ、と言っているですよ？」

先頭を切るシエナは、ほっそりとしたシンプルな白のドレスを身に纏い、風に長い髪を靡かせて、足音荒く、部屋へと踏み入れる。

見かけの麗しさとは真逆の、荒いとも言える言葉づかいと溢れるほどの怒気は、近年、シエナが見せたことのないものだった。

そのシエナを止めようとしてか、付き従うように、ゲイルが続いて姿を見せる。言葉ばかりは、シエナを留めようとするが、シエナの位を憚ってなのか、決してその腕に触れようとはしない。ただ周囲を、取り囲み、シエナを留める言葉だけを紡ぎ続けていた。

感じていた緊張感をものの見事に破り、入室してきた一団に、フェリオは、呆れたように息をつく。

「いったい何事だ……」

シエナの翡翠色の瞳が鋭く光る。

視線が持つ意外なほどの強さに、一瞬戦きながらも、懐かしい思いが心をかすめた。

出会った頃によく見せていた、荒々しい表情。

彼女の怒りを全身で感じるのに、久しぶりに見ることができた、シエナの素顔に、笑みがこぼれそうになった。こらえても、漏れてしまったフェリオの顔の緩みに、シエナはぴくりと眉をゆがめる。

「なにか、面白いことがあって？」

「いや……久々にシエナの顔を見れたな、と」

最後に交わした会話が、ずっとフェリオの心を摘んでいた。

思わず取ってしまった態度は、振り上げてしまった拳のように、下ろすべき場所が見当たらなかった。

冷静な気持ちで、シエナと向き合えるのか……

一度生じた小さな不安は、会えない時が伸びるほど、大きく膨らむ。シエナに会うことを恐れるほどに――

鼓動が、ゆっくりと、速度をあげる。

不安の影など、シエナの姿を一目見れば、跡形もなく消え去っていた。

なぜ、会わずにいられたのか

心を埋め尽くすのは、柔らかで、温かな感情。

言った言葉は、心からのものなのに、シエナの眉はますます疑わしげに、歪みを強めていた。

「……話があつて来たの。でも、まず人払いをしてもらえる？」

隣に立つゲイルに視線を移せば、小さく首を横に振る。止める……か。

「ゲイル、下がれ」

「殿下っ！」

「しばらく周囲に人を集めるな。扉からも離れるように……命令だ」
フェリオに詰め寄ろうとしたゲイルが、紺色の瞳を捕らえた時点で、ぐつと体を止めた。気押されたように、言葉を飲み込み、作った握りこぶしに力を込める。ゲイルの視線がフェリオから逸れる。

「失礼いたします」

喉から絞り出すようにして、深く礼をした。連れだった兵に、声をかけて、退室してゆく。この間、ゲイルは決して、シエナを振り返るうとはしなかった。

重く扉が閉じられる音とともに、静寂が室内に舞い降りた。

「で、ここまでして、わたしに会いに来たのは何ゆえだ？」

悪戯っぽく、口の端をあげて笑えば、不愉快そうにシエナは顔を歪めた。

「ご自分でおわかりでしょ？」

「まったく見当もつかないな」

真面目に取り合おうとしないフェリオに、大きく溜息を一つつく。

「……ここで、くだらないやり取りをする気はないの。端的に言うわ、なぜ、婚約を破棄しないの？」

「は？」

「昨日、イベルス家との婚約破棄が申し入れられたはずよ。知っているでしょ？それをあなたは一方的に反故にした。なぜ？」

静かにシエナは、ゲイルから聞いた事実を確認していく。

確かに、昨日、イベルスとの婚約を破棄する申し立が王家に対してなされたのだ。しかし、それは、フェリオの一方的な反対で、棄却されたという……。

その後、大臣や、貴族たちの抗議に耳も貸さずに、さっさと議場を退室し、執務を理由に人を寄せ付けようとしない。

あまりにも横暴なやりように、シエナは言葉が見つからないほど、あきれ果ててしまった。

引きとめるゲイルを、振り切って、フェリオの執務室まで乗り込んだのは、その訳を聞くためだった。

聞かれた当の本人は、一瞬、何を問われたか理解できないように、きょとんとした表情を浮かべている。

「なぜ、と聞かれても……。わたしの妃になるのは、シエナなのだから……棄却も何も、申し立て自体がおかしいの难道？」

至極当然だ、というように言っただけの相手、シエナは瞳を大きく見開いてみせる。

反対に、フェリオの言葉が上手く理解できなかった。

「……当然では、ないのです……。本当に、わかってないの……？」

「何を？」

「……貴族たちが、わたしを下ろそうと策略を巡らしているのはご存知でしたでしょ？」

「ああ。知ってはいたが、今に始まったことではないだろう？申し立ても、過去に何度かなされているはずだ……。……確かに、今回は、やたらと大臣たちが抗議をしてきたが……。破棄など、ありえない話だ」

シエナの言葉を、いぶかしんでいるのだろう。フェリオの眉間には、懐疑的な溝が生じていた。

本当に、わかっていないのだろうか……

シエナにとって、フェリオとの婚約は先のない、刹那見える蜃気楼のようなものだった。

消えていくのが、当然とこちらが信じているものを、隣に立つ相手は、その幻を、現と捕らえていたのだろうか？

ありえない、一瞬の幻は、決して手を伸ばしても、掴めるはずもないものを……

フェリオの見つめる先にあったものが、シエナとは異なっていた。

それは、緩やかに、シエナの心を揺らし始めた。小さな動揺は、水面の波紋が広がるようにして、ゆっくりと、しかし、確実に心を埋め尽くす。

「……殿下、イベルスには、王家を支える力が、残っていないのです。わたしが王妃になっても、国にとって良いことなど、ありません。宰相の後ろ盾を失ったお父様に、力はないのだから。……それに……リヴィウス家がいらっしやいます」

シエナには、なぜ、フェリオがこの状況を理解していないのかが信じられなかった。

今までの過程。夜会での出来事。交えたはずの口論。それらだけでは、彼はこの状況を理解できなかったのだろうか？

まさか、自らの口から、身の破滅の帳を開けるための言葉を紡がな

くてはいけないなど、予期していなかった。

脳裏に、父の震える背中が浮かび、息苦しさを覚えても、言葉を止めることはなかった。

シエナの気持ちを感じ取れないのだろうか、フェリオは、純粹に疑問符を浮かべて、首を傾げる。

「なぜ、リヴィウスが出てくるのだ？」

「なぜ？あなたは自身が行動なされたからでしょう？なぜ……ここですそれをわたしに聞くのですか……」

聞きかえされた問いに、また、胸が痛む。

「……イレエ様がいらつしやるからです……」

フェリオの瞳に、訝り示す色が浮かんた。

「イレエ様が……？」

フェリオが彼女を呼び捨てにしたことに、つきりと胸が締め付けられる。それを無視して、言葉をつなげた。

「年の離れたわたしなどより、年齢の近いイレエ様の方が王妃にふさわしいと……。それに、リヴィウス家の力を得ることができれば、他国との交渉を有利に進めることができます。イレエ様自身の資質。リヴィウス卿のお力。あげる事項に事欠かないほど、リヴィウス家との縁談は、王家にとって有益なのです。それに……フェリオ殿下自身が、彼女をお目にかけていらしたでしょう？……書庫への優遇措置を与えて……」

新しく婚約者に据えられるであろう者を、排除される側の者が称することの奇妙さに、矛盾を感じながら、息つく間もなく言葉を並べた。唐突に、ずきり、と胸に激しい痛みが襲う。理由の分からぬ苦しさに、言葉を詰まらせてしまう。

我知らず、暖かな感触が頬をつたっていた。

シエナの独白を、フェリオは沈黙を守り、耳を傾けていた。見つめていた、彼女の表情が一瞬揺らいだ。頬を一筋の雫がつたう。

「シエ、ナ？」

瞠目して、名を呼んでくるフェリオの姿に、シエナは自分の状況を悟らされた。頬へと手を伸ばせば、雫が指先を濡らす。理由の知らぬ涙に動揺しつつも、そのまま拭い去り、唇をきゅっと噛みしめた。ここで、揺らいでは、いけないのだから――

「イレエ様の方が、相応しい――」

「言っなっ！」

強い叱責が飛び、言葉を遮ってしまう。ビクリと体が震えた。

声を荒げたフェリオは、それきり、押し黙ってしまい、二人の間に横たわるほんの数歩の空間には、重い沈黙が下りていた。

静けさは、否応なしに、緊張感を煽りたてる。

床を叩く靴音が、静寂を破る。

二人の間に落ちた距離が、徐々に詰められていく。

フェリオの腕が、急に伸ばされた。

突然の動きに、驚き、身を引こうとするが、叶わず、右手を奪われてしまう。

捕らえられた右手はフェリオの口元に引き寄せられていく。啞然として、声を発することも、身を引くこともできずにいると、そのまゝ、押しつけるようにして、強く唇を押しあてられた。

触れられた箇所から、体温が急激に上昇していく。

口ジエから受けたときとは、まるで違う。

体中の血が急速に沸騰して、駆け巡り、どくどく、と心臓が暴れ出し、自分のコントロールから逃げだそうとする。

全身が、心臓になったように、脈打つのが感じられた。

長い、と感じた時間は、一瞬だったのかもしれない。

口元から離された掌は依然、フェリオの手の中におさまっていた。
「な、なにをするのです」

あげた声は、思ったように抗議の意図を示してはくれない。ただ、
弱弱しく、空気に溶けていくだけ。

荒れ狂う心音は一向に治まる様子もなく、どくり、どくりと相手に
聞こえるほど大きく響いてしまう。

あの時、温かいと思った小さな掌は、今は、熱された鉄のように熱
く、シエナの手を覆い尽くしてしまう。

何とか、この熱から逃げだそうと、咄嗟に腕を引いた。しかし、握
りしめられた掌は、ぴくりとも動かない。あきらめられず、そのま
ま力を加え続けていると、逆に、ぐっと腕を強い力で引かれた。

不意を突かれた、動きに、抵抗することができず、そのまま相手の
胸の中に倒れ込んでしまう。

よろめき、ぶつかった胸板は、厚く、衝撃全てを吸収する。

幼い、と思い続けていた相手は、シエナの体を簡単に支えてしまう
ほど、大きく成長していた。子どもではない、とわかっていたはず
なのに、感じとるフェリオの熱に、やけに胸が激しく震えた。

フェリオの腕が、シエナの動きを封じるようにして、後ろ手に回さ
れる。ぴたりと、寄せられた体から、鼓動の響きが伝わってしまう
のではないか。その思いが、また体温を上昇させてしまう。

ぐっと、ひと際強く腕に力が込められた。

「わからぬのは、お前の方だ……。なぜ、わたしのもとから去ろう
とするのだ？ なぜ、リヴィウスのお前がする？」

……わたしの側にいるのが、お前の役割だろう？ 言ったではないか、
あの時に……。人よりも、多く幸福を与えられる分、責任を負うのだ、
と……」

フェリオの言葉は、耳を通してではなく、直接、体を通り、シエナ
の中に響く。ぞくり、と知らぬ感覚が背を伝っていった。

フェリオが何を言おうとしているのかが、シエナには全く予想出来
ない。思考は熱で鈍り、上手く機能を果たしてくれなかった。

「わたしは、責務の代わりに、シエナを得たのだ……わたしの、幸福が……シエナなのだろう……？」
心構えも何もできず、告げられた言葉は、真っ直ぐに、シエナの心を打ち抜いていく。

足元の床は、こんなにも頼りなかっただろうか。水面の上に立つような、おぼつかなさで、ぐらぐらと揺れ、その場に立つことさえ、ままならない。

目に見えて、動揺する、シエナを、フェリオはその腕で、強く抱き止めた。

触れる、華奢な体は、ともすれば壊れてしまいそうだ。逃げないように、強く力を込めたい、という思いと、繊細なガラス細工のごとく、壊してしまうのではないか、という不安がせめぎ合う。

「殿下は……間違っておられます」

フェリオの腕に、シエナの細い指がかかった。小さく震えながらも、驚くほど強い力がこもる。

ゆらゆらと、陽炎のごとく揺れる瞳は、なにものも、捕らえていない。

「正気では、ありません……。で、殿下は、傍にいた者が離れて行くのが、惜しいだけ、です……。刷り込みのように、思いこまれているだけです……」

不安げに、呟かれた言葉は、フェリオに言われたものののだろうか。しかし、それは、シエナ自身に言い聞かせているように思えた。

「シエナ、わたしが必要とするのは、お前だけだ」

彼女の言葉を否定して、強い声で、言う。

その言葉に、シエナは、びくつと体を震わせた。怯えたように、体を固くするのが伝わってくる。腕に乗せた手に、力をこめて、必死で、フェリオとの距離を取ろうともがく。それを、押さえて、強い力を込めて抱き返せば、今度は、首を左右に揺らして、拒否を示す。
「わたしでは、駄目なのです……。初めから、ずっと、ずっと決ま

つていたことです……」

「シエナ」

「なぜ、わからないの？わかってくれないの？どうして？……どうして、そんなことを言うの……」

幼い彼は、状況を正しく理解できていないのだ……。シエナでは、王妃になれないということ、周囲の者が認めるわけがないことを、フェリオは分かっていないのだ。

ぐるぐる、と胸に深く刻まれた論理が巡る。

「シエナ」

「やめてっ――！」

叫び声とともに、渾身の力をこめて放たれた、拳は、強くフェリオの胸を打ち、シエナの体を、その腕から解き放ってしまっていた。

衝撃のため、軽くせき込むフェリオの姿を、焦点の定まらない瞳で、シエナは眺めていた。

「シエナ……」

呼吸を整えた、フェリオが、かすれた声で、彼女の名を呼ぶ。届くはずの呼び掛けに、応える声は、聞こえてこない。

夜の訪れを告げる空の色をした、瞳が捕らえたのは、不安を露わにして、その場に立ち尽くすシエナの姿だった。

「シエナ」

名を呼べば、耳に届くその声を否定したいのか、ゆるゆる、と頭を左右に揺らす。その度に、共に揺られる、琥珀の髪が、きらきらと輝きを放った。流れる生糸のようなその髪に、触れたい、と距離を詰めれば、その分、シエナは後ずさっていく。

気付けば、シエナの背に固いものが触れていた。後ろに回した手に、冷たいものが当たる。体を巡る熱との温度差に、はっと意識を引きもどされた。

金色に光る、花鳥のレリーフの刻まれた、ノブ。

腕が目前に迫る。

我知らず、ノブへと手が伸びていた。

倒れ込むようにして、開かれた扉の隙間に、身を滑り込ませる。

伸ばした腕は、むなしく空を切った。

「……信じて、くれ——」

フェリオがこぼした呟きに、応えるはずの彼女の姿は、蜃気楼のみ
せた幻のように、既にその場から、消え去っていた。

11、過ぎゆく季節の影

夏が過ぎて、木々たちは、さつとその色を変える。その移り変わりは、本当に一瞬のことで、気付けば季節は、掌の内から過ぎ去り、微かな残り香だけが辺りに漂う。

毎年のことなのに、去りゆく季節は、いつも心に一抹の寂しさをもたらしてゆく。

新しく迎える季節を、歓迎する宴の中、一人、見上げた空に、微かに浮かぶ季節の名残を見つけ、流れ去った季節を懐かしむ。

見上げた空から視線を逸らし、平原に集う人々の集まりを見つけた。実用的とは言えない華美な衣装に身を包み、騎乗する人々の集団。色とりどりの彼らの衣装は、どこかしら、紅葉の揺らめきにも見える。毎年繰り返されるその光景は、季節の移り変わりと同じく、シエナの心に小さな揺らぎを生んだ。

ここへ、来るつもりは、なかった。できることならば、避けてしまいたかった――

馬上から見る景色は、よく見る景色を、いつもとは違うものに変えてしまう。

それは、常の感想だったが、今このとき見る風景が、歪んで見えるのは、また別の要因だ。

王家の敷地、北に広がる森で開催される、狩りの集い。その中でも、年に一度、国内の領主達が集い立つものが、『秋猟会』だった。秋の始まりに行われるそれは、ただの狩りではなく、収穫祭のような、祭事的側面を持つ。

もちろん、シエナの元にも、毎年、招待状が届けられていた。しか

し、今年に限って、それが届けられることはなかった。

思い当たるのは、ただ一つだけ。夏の終わり、フェリオと最後に顔を合わせたときの出来事。

記憶がぶり返し、それを振り払うように、軽く首を左右に振る。

それでも、手綱を握った掌に、熱を感じてしまふ。忘れようとしても、あの出来事は、この身に、深く刻み込まれ、一向に、薄れることがなかった。

フェリオの考えが、分からないことなど、これまでなかった……はずだった。彼の成長を、すぐ隣で見届けてきたからこそ、フェリオを理解できている、そう思っていたのは間違いだったのか……？

あの時、フェリオのみせた態度がシエナの心をかき乱していた。見たことのない、表情が、シエナの気持ちを泡立てた。伸ばされた腕から伝わる体温。自分のものとは明らかに異なる、固く、厚い体。まったく知らぬ人物と対峙したかのような……それでいて心を占めるのは、言いようのない高揚感……。

王宮から逃げるようにして、屋敷に辿り着いたきり、シエナは深海に沈む貝のごとく、そのまま、取り巻くもの、全てを避け、固く心の扉を閉ざしたように、自室に閉じこもった。侍女たちの呼びかけにも答えず、気を紛らわせるために手に取った、厚い書物を読みふける。

それでも、ふっとページを繰る手が止まり、思い浮かぶのは彼のこと。

差し出された手を取ることなど出来ない。

シエナには、許されない。

解り切っている答えなのに、フェリオの大きな掌の影が、頭にこびりついて離れない。

フェリオは間違っているのだ。

生まれたての雛がそうであるように、勝手に、刷り込まれてしまっ

ただけ。

フェリオは幼い。7つも離れた、シエナなど、彼の隣に建てるわけがない。

フェリオは……――

否定の言葉をどれだけ並べても、熱い思いが、心を焦がす。違う、知らない、許されるはずもない――

ロジェが訪ねてきた、と告げられたとき、面会を許可したのは、少しでも、そんなフェリオの面影を消してしまいたかったからかもしれない……。

「招待状が、届いていない？」

「ええ……。届いておりませんわ」

初めてシエナの自室を訪れたロジェは、様子のおかしいシエナに当然気付いているはずなのに、一向に触れようとはしなかった。いつものように、日常の他愛もない出来事について話を巡らす。

その途中、毎年開催される、『秋猟会』の話が持ち上がった。何気なく、といった様子で、尋ねたロジェは、シエナの返答に、首を傾けた。

「まさか？」

からかっているのでしょうか？と軽く笑うロジェの姿に、苦笑で応える。

「……当然ですわ。わたしなどが、公の祭事に出てしまつては、これからに差し障りがあるでしょう？」

言外に含ませた、既に婚約者としての地位は消えた、という言葉に、ロジェは、複雑な表情を浮かべた。

いつも、柔らかく笑みをたたえる薄い唇は、思い悩むようにして、引き締められる。

恐らく、シエナが立場を追われた要因がイレエネにある、と考え、自らの思いと共に、葛藤しているのだろう。

シエナにとっては、リヴィウス家を責める気持ちは微塵も無かった。

これは、イベルスが導いたこと。そして、シエナ自身の手で終わらせたことだ。

——あなたのせいではない——

そう言おうとしたとき、微かに俯いていたロジエの面が上がった。青い瞳がシエナを捕えて、何かを告げようとする。

けれど、その瞳は躊躇いを露わにして、刹那揺れ動く。一度、小さく唇を引き締めて、覚悟を決めたかのように、静かに口を開いた。

「よろしければ……わたくしと共に、参加なさいませんか？」

「ロジエ殿、と……？」

突然の申し出に、翡翠色の瞳を見開く。

「はい。わたくしの元には例年通り、招待状が届いております。付き添い、として、お連れしても、何の問題もないでしょう」

驚きを隠せないシエナに、ロジエは優しい笑みを見せる。

『付き添い』の言葉に、鈍ったはずの思考が反応した。ロジエの微笑みに確信を得る。

公の場に、連れだって現れるということが、何を示すのか。

それは暗に、二人が親密であることを皆に示すようなものだ。

瞠目して、言葉をなくすシエナに、ロジエは甘い、といえるような苦笑を浮かべた。

「無理に、とは申しません。……ただ、このまま塞ぎこまれていては……。それに、以前あなたの、お転婆具合を拝見したいと、申しましたでしょうか？この機会に是非」

「……つまり……打ち手、として参加する……ということですか？」

「ええ、是非」

言って、ロジエはにこりと微笑む。

彼の申し出に答える、ということが、どういう結果を生むかなど想像に容易い。それゆえに、シエナが躊躇いを見せるのは当然だった。宵闇の空を思い出す。

漆黒とは言えない、密やかな明かりをその内に隠す、深い紺色の瞳。差し出された掌は、もうあの幼い頃の面影など無い。

そして、シエナはその手を取ることが出来ない。取ることを、シエナ自身が許さない……。
今、彼の申し出に頷けば、フェリオの手を取るとは、二度と出来ないだろう。

膝の上で合わせた両の手に、力がこもる。

瞳を閉じれば、消しても、消しても、浮かぶフェリオの姿。

痛いほど抱きしめられ、感じた熱は、どれだけ願っても、シエナの記憶から薄れてくれはしない。そうして、心に燈るのは、激しく熱い思い。

両手で、湧き上がる感情全てを押し込める。

——わたしは、わたしの『責任』を全うしなければならぬのだから——

息苦しさ、了解の言葉を告げることができなかった。
ただ……こくり、と首を縦に振っていた。

「無理にお連れして、申し訳ありません……」

頬にそよぐ風を感じ、一人佇むシエナの背に、微かな声がかかる。

振り返れば、半歩後ろに並ぶロジェが、眉尻を下げ、苦い面持ちをしていた。

二人の姿に、向けられる視線は、やはり鋭く、容赦がない。

イベルスの姫は、やはり、リヴィウスの子息に乗り換えたのだ——囁かれる噂は、視線に込められ、シエナの元へと届く。

辛い、と言えは嘘になる。けれど、今の辛さは比べるに足りないのだ……フェリオの手を振り払ってしまった、あの瞬間を思えば……。

「いいえ、ロジェ殿がお誘いくだされなければ、ずっと自室に引き籠っていましたでしょうか」

悪戯めいた微笑みを浮かべて、返せば、ロジェは、わざとらしくシエナの様子に少しを目を見開いて見せた。

「もう、以前のままのシエナさまですね。……にしても、本当に、このような場所にお連れいたしてもよろしかったのでしょうか？」

「わたくしのお転婆具合を見たいとおっしゃっていたのですから、本望でしょう？」

言ってみせる、シエナの装いは、狩りに向かう貴族の男性が身につけるそれだった。白いブラウスに、ベスト、体の線を露わにする、パンツと編上げのブーツ。琥珀色の髪を後ろで一束ねにした、その姿は、男性の装いなのに、それに反して、女性らしい艶めかしさを、強調するようだった。華奢な腰に、剣をさし、背には弓箭を背負う馬にまたがり、さっそうと駆け抜けて見せれば、周囲から感嘆の声が上がった。

「幼い頃は、身分を隠して、よく、この催しに参加していました」
くすくす、と笑声をもらす。視線の先には、集まり始めた人々が各々、各自の馬具や、その装備を褒め合う姿があった。

「おっしゃっていたことが、真だと、実感いたしましたよ。早駆けならば、負けてしまうかもしれない」

「まさか、そこまでの腕は持っていませんわ」

軽口をたたき合っていると、集いの中心部から、甲高い笛の音が響いた。

「ああ、集合の合図ですね。参りましょうか？」

「ええ」

二人、頷き合い、同時に馬の腹を蹴って、風となり、集団へと駆けだした。

集いに参加するのは、基本男性であるが、勇ましい女性も、ごくごく稀に参加することもあった。それは、本当に例外で、たいていの

女性たちは、狩り場の一角に作られた、テントのうちで、おしゃべりと噂話に花を咲かせている。

ちらりと、向けた視線の先には、美しく着飾った令嬢達が、集いあって、何事か、楽しそうに言葉を交わしている。そのなかに、金茶の色を見止めた。

自分とは似て非なる、少女を好ましくは思えど、彼女を疎む気持ちには、不思議と全く生じなかった。

きつと、あの少女がフェリオを支えていくのであろうという、安心感に包まれていた……

はずだったのに――

胸を刺すほどの痛みは……湧き上がる、熱いこの思いは、何なのか……。

耐えがたい痛みから逃げるように、流れる景色に、彼女の輝きを、ひっそりと紛れ込ませた。

12、木々の間に揺れる姿

ロジェと連れだって、馬を進めていると、一際騒がしい、大きな集団が目に入った。気を取られ、目をやれば、漆黒の髪が人々の合間から見え隠れする。

どきり、と胸が震える。

対峙しているわけでもないのに、シエナの心臓は、早鐘のようにそのスピードを上げていつてしまう。

逃げるようにして、視線を集団から逸らせば、はっと、とするほど深い青の瞳に捕らわれた。

「フェリオ殿下ですね？お声をお掛けしないのですか？」

平然という、ロジェの瞳からは、感情を読み取りにくい。

「いいえ、わたくしと、殿下はもはや無関係ですから……あなた方が一番ご存じでしょう？」

シエナとの婚約は未だに、締結されたままだったが、傍から見れば、それはもう既に意味をなしていなかった。王宮に、足を踏み入れようとしないシエナに対して、次期王妃候補のイレネは、足繁くフェリオの元へ通っていると聞く。

周囲の貴族は、もはや、シエナ・イベルスを王太子の婚約者とは、みなしていなかった。

その証拠に、有力者が集うはずのこの『秋獵会』にあつて、シエナに声を掛けてくるものは皆無だった。これが以前ならば、今フェリオが置かれている状況、よろしく、周囲を人々に取り囲まれてしまっていただろう。

「さあ……どうでしょうね。わたくし個人と致しましたら、噂が本当であれば、この上ない喜びなのですが……」

自重することなく、言つてのけるロジェの態度が、今はむしろ好ましく思うほどだった。

「そうですね……。お父上様も、さぞお喜びのことでしょう……」

「いいえ、リヴィウスは関係ありません。わたくし個人、と申し上げましたでしょう？……わたくしが望むのは、王家ではないのですから……」

騎乗すれば、ロジェとの視線の高さは、そう変わらない。いつもよりも、よく見える、晴天の瞳が、妖しく光ったように思えた。その視線に答える代りに、握った手綱を引く。

「参りましょう。始まってしまいます」

狩りの組を決める、くじを引く集団がそこには群れをなしていた。

一直線に、風を切って、シエナはその場から離れた。

後ろ髪を引く、フェリオの影を、振り切るために。

集団は、一組5〜6人のグループにまとめられる。

ついていない。

メンバーを見た時の、シエナの正直な感想。

華奢な掌の中におさまった、小石の模様を憎々しく睨みつけてみる。自分は、天の神々から、見放されてしまったのだろうか……

「いやあ。まさか、シエナ様だとは、思いませんでしたよ。真の美しさというものは、そのような姿であっても、引き立つのですね」

「……足手纏いにならないように、精一杯がんばりますわ」

「ははは。先ほど、野駆けの姿を見れば、余程、手慣れてらっしゃるようだ。気を抜けば、こちらの獲物まで、獲られてしまいかもしれない」

笑顔を浮かべて、話しかけてくる二人には、見覚えがあった。大きい、とは言えないが、豊かな土地を治める領主の一人だ。もう片方は、どこかの貴族の子息のはず……。にこやかに、二人と言葉を交わしながらも、心には、重い枷が押し掛かって来ていた。

シエナの隣に立つのは、先程からぴたりと傍を離れない、ロジェだ。

組み分けまで、まさか同じになるとは思いもよらなかった。気付かれぬように、会話の合間に、密やかな溜息をつく。

そして、もう一人――

少し離れたところに佇み、今は、先ほどまでシエナと言葉を交わしていた、所領の長と会話をしている、栗毛色の馬に跨った一人の男。貴族の集まりの中であって、一際、豪華ないでたちの男は、自らの容姿に合わせて、落ち着いた色調でまとめているにもかかわらず、自然に、周囲の視線を引きつけてしまう。

背まで届く髪をひとまとめにし、緩やかに風に揺らす。宵闇に喻えられる姿は、日中にあっても、疎外されることなく、むしろ、際立った存在感を醸し出す。

本当に、来なければ良かった――

シエナの存在に気付いているはずなのに、一向に声をかけて来ようとしてもしない。

その姿に、フェリオが真実シエナを見限ったであろうことを悟らせる。

ぎゅつと、心臓を鷲掴みにされているかのような、息苦しさ、シエナを苦しめていた。

ヒュン

風を切り裂き、一筋に弓矢が軌跡を描き、獲物へと飛んでゆく。一瞬の隙もなく、繰り出される、二陣目の矢は、獲物の息を確実に止めた。

「おお、流石は殿下。お噂通り、弓術の腕も一級なのですね」

フェリオが仕留めた獣に、惜しむことない賞賛を浴びせる。貴族たちにとっては、王太子に近づけるまたとない機会。逃すまいと、これでもかところらが引くほどに媚を売る者もいるが、この二人は少し趣が異なった。

素直に、感じたままの賞賛を、フェリオに告げ、厭味など、まったく感じない。

フェリオの狩りの腕がよほど優れていることも影響するが、彼らの本来の性質が政治的な面に疎いことが主だろう。

フェリオにとってはよい組み合わせであつたのかもしれない。

毎年のように、この行事が来ることに辟易していた姿を思い出す。あまりに嫌がるのを叱って、仕方なしに男装をして、付き従つたこともあつた……。

周囲を取り囲まれても、以前のように露骨な嫌悪を露わにすることは、もう無い。

懐かしさとともに、息苦しさに襲われてしまう。

と、いつのまにか、隣へ馬を寄せていたロジエが気遣わしげな視線を寄せていた。

「シエナ様？大丈夫ですか？」

「え、ええ……」

我知らず、眉間に深く皺を刻んでいたらしい。取り繕って、無理に笑みを浮かべてみても、胸に感じる苦しさは、消えはしない。そんなシエナに、ロジエは小さく苦笑する。

「そうですか……？あ！」

シエナを気遣わしげに見ていたロジエが、突然、シエナの背の方向に、目を向けた。

「ロジエ殿？」

「今あちらの方向に、大きな牡鹿が駆けて行くのが、ちらりと！」
言って、すぐ、握る手綱を強く引き寄せる。

「え、あ！お待ちください！ロジエ殿っ！」

引きとめる声も聞かずに、ロジエは颯爽と、見えたのであろう、牡

鹿を追って、駆けだしてしまう。

咄嗟のことに慌てて、思わず、シエナも手綱を強く引きつけていた。

いくら王域の森で、あるからと言って、完全に安全なわけではない。ロジェ一人を、森の中へ遣るわけにはいかなかった。あの瞬間咄嗟に働いた、判断は、シエナに馬を駆けさせていた。

「ロ、ロジェ、殿……。無暗に、走り、だすのは、お止めください……。ああ……。やはり、逸れてしまった」

はあ、はあ、と上がる息を、必死でおさえ、切れ切れになりながらも、言葉を紡ぐ。立ち止まり、やってきた方向を振り返れども、見えるのは、木漏れ日が揺れる木立ばかり。そこには、仲間の影さえ見えなかった。

咄嗟の判断は、余計な危険を生んでしまったかもしれない。周りを見渡せど、今どこにいるのか皆目見当がつかない。完全に迷ってしまっている。

「……。申し訳ありません……。あれほど大きな牡鹿を見たのは初めてで。一瞬我を忘れてしまいました……。しかし、その牡鹿にも逃げられては、元も子もありませんね」

ロジェは、眉尻を下げ、如何にも申し訳なさそうに、頬を指で掻く。無謀な行動をとったロジェを責めても、意味はない。それでも、わざとらしく、はあ、と一つ大きな息をついてみせた。

「なってしまったものは、仕方ありません。今は、皆の所へ戻る方法を何とか、考えましょう」

とはいえ、どうしたものか、と落胆する。

ふと、足元に横たわる地面に、目が引きつけられた。映るものに、シエナは眉を潜める。

ロジェに、問いかけようとした、その時だった、背後から、馬の蹄が土を蹴る音が響いてきた。

驚きと希望を覚えて、振り返る。

見止めた者の姿に、目を見張った。

「勝手な行動をとるな。いくら、武術の心得があるといっても、お前は女なのだからな」

かなりのスピードで馬をかけてきたであろうフェリオは、それなのに、微塵の息の乱れも感じさせなかった。瞳が、強い光を放ち、シエナを射抜く。

また、あの胸の痛みがシエナを襲う。申し開きをしようにも、言葉が彷徨い、音を発することが出来ない。

シエナの代わりに答えたのはロジエだった。

「殿下、申し訳ございません……。これは、わたくしの失態でございます。牡鹿に気を取られ、状況を考えずに走りだしてしまいました……」

見るからに萎れた様子で、呟けば、フェリオの責める気持ちも、失われてしまうらしい。

ずっと、視線を逸らし、周囲の様子を観察して、馬首を巡らせた。

「もう、よい。……しかし、どうして、元の場所まで、辿り着けばよいか……」

フェリオは、探るように、顔を上げて周囲をくると、窺う。ロジエもそれに従ってか、フェリオとは逆の方向へ馬を進め、木々の間を確認するように、目を細めて、探っていた。

ただ、シエナだけが、自分の胸の震えを止めようもなく、馬上でぱつり、と佇んでいた。

手の届く位置に、フェリオがいることが、信じられなかった。

逸れてしまった自分を追って、今ここにいることが、信じられない。

また、胸がきしんだ。

フェリオがシエナを見捨てられるように仕組んだのは、他の誰でも

なく、自分自身なのに……

一度放してしまった彼の手を、取ることは二度とできないと、決めた覚悟。

心の熱を、閉じ込めて、『秋獵会』へロジエと来ることを選んだ。あの決断は間違いではなかったと断言できる。

なのに、心が激しく揺れ動いてしまう。

理性と、感情

ままならない思いは、胸の痛みとなって、シエナを苦しめるのだ。

だからと言って、どうすればいいというの？

もう――

戻ることは

できない――

ぴりりと背筋を緊張が走り抜ける

霞がかった思考に、突如、警告が、鳴り響く

そして――

鋭い、音が耳をついた

13、真と偽り

ヒュン

「シエナっ！」

弓が風を切る音
フェリオの怒声

振り返れば

飛び込む影

びくり、と揺れる、大きな背

艶やかな黒髪が、揺れる

刹那、振り返りかけ

けれど、ぐらり、と体が傾ぐ

一瞬の出来事。それは、スローモーションで、流れる。

「フエ、リオ……？」

馬上から、崩れ落ちていく、その姿を、現実として、受け取れない。

ドサッ

地響きに、一瞬にして、現実が現れる。

「っ！！」

叫び声は、声にならない。

焦って、馬上から飛び降りるが、鎧に足を取られ、転がり落ちた。体を感じるはずの痛みは、今は、荒れ狂う感情に抑え込まれ、痛みとして認識されない。

這うようにして、崩れ落ちたフェリオへと腕を伸ばす。

「フェリオ！フェリオっ！！フェリオっ！！！」

繰り返して、名を呼べども、応える声はない。

抱き上げた、体からは力が抜け、零れた腕が、体の脇から、だらりと垂れ落ちる。

瞼を重く閉じた、青白い顔には、生気が感じられない。

ぬめりを感じて、脇腹を見れば、弓矢が深々と突き刺さり、鮮やかな赤が、体から流れ落ちていた。

無我夢中で、患部に両掌を押しつけていた。

頭が、ガンガンと警鐘を鳴らす。

何？

なぜ？

どくり、どくり、と血液が血管を流れる音がやけに耳に響く。神経が研ぎ澄まされている。

鳴り響く、新たな警鐘。

ぐったりとしたフェリオの体を、放心したように、掻き抱いていたシエナの体が静かに動く。

判断、とは言えない。反射。思考ではなく、無意識化の反応で、体が動いていた。

素早く腰から、抜刀し、その勢いで、空を切る。

キン

鋭い音の直後、真つ二つに割れた、弓矢が舞落ちた。

手にした剣はそのままに、瞬時に、矢をつがえて、矢が放たれたであろう方向を見定めて、弓を射る。

ヒュンと鋭い音を響かせて、木々の合間に消えていく。

弓矢の先を案ずるよりも先に、シエナは高く声を発していた。

「ゲイルっ！！ゲイルっ！居るのだろっ！」

上げられた声は、いつものシエナのものとは、全く異なる。低く地を這うような、鋭い声。聞く者全てを従わせる、人を統べる者のみを持つ、声だ。

「フェリオは、ここだっ！！」

絞り出すような怒声にこたえるかのように、木々の葉が揺らめく。

その間から、近衛の隊服を身に纏った一陣が舞い込んできた。

それを当然と、答える声も聞かず、シエナは鋭い声を放つ。

「南南東の方向に一人、北西にもう一人っ！急ぎ捕らえよっ！ただし、決して殺すな！」

その声に、付き従っていた兵士が、弾かれたように、馬を掛けた。残されたゲイルは、シエナの傍らに膝をつきフェリオの様子を確かめる。

食い入るように、言葉を待つシエナに、ゲイルは小さく笑みをかえした。

「矢は、急所を外れております」

「出血量は？」

「それほど。今は、矢を抜かぬ方がよろしいでしょう。それによって、不要な出血が抑えられております。防具によって、それほど深く刺さってはおりませんし……」

その言葉に、息をつく。吐き出されたその大きさに、今まで、どれ

ほど息を詰めていたかが表れていた。

「ただ、落馬した際に頭を強く打たれたようで……」

「……ゲイルに任せます。急ぎ、手当を」

大きく頷き返し、力を込めた翡翠色の瞳で見つめ返した。

ゲイルは手早く、自らの衣服を割いて、フェリオの傷に当て、止血をする。その様子を、眉を深くひそめて、シエナは見つめていた。

腕の中のフェリオの頬を優しく撫でる。何気ないその仕草は、見るものを赤面させるほど、相手への愛しさで溢れていた。

離れるのを惜しむようにしていたシエナは、思いを断ち切るように、最後に強くフェリオの体を抱きしめた。

託された、フェリオをゲイルが抱きあげる。長身のフェリオは見かけの細見に関わらず、かなりの重量がある。しかも、今は狩りの装備を纏っている。鍛え上げたゲイルでも、重みが堪えてか、微かに眉を歪めた。

「お手伝いを……」

襲撃の間、一人ずつと気配を潜めていたロジエが、その様子を見咎めて、手助けを申し出る。

しかし、それはシエナの低い声に、遮られた。

「ロジエ殿には、下がっていただきます」

「シエナ、様？」

これまでに向けられたことなど無い、鋭い声色に、ロジエの面が強張る。

音もなく立ち上がった姿からは、ロジエをも威圧するほどの覇気が放たれる。すうっと、先ほど抜かれた剣の切っ先が、ロジエの喉を突いた。

「な、なぜ……？」

予想も出来ぬ、シエナの行動に、ロジエはただ、戸惑いの声を上げる。しかし、それに答える声は、冷たい。

「なぜ？それは必要な問ですか？あなた自身が一番にご存じでしょ

う？」

「な、何を……」

問い返す、ロジェに、シエナは、口の端を少し上げるだけで笑みを作る。

「まず、一つ。あなたは牡鹿を見た、と言った。そして、迷いなく一路にそれを追った……なのに、あるはずのものがない……」

下ろした視線の先にあるのは一部が欠けた、丸い模様。あちらこちらに散らばるのは、どれも同じ形で、異なるものは、大きな人の足跡のみ。

視線を戻せば、剣を向けたままの、ロジェの表情が、固く強張っていた。

「二つ、帰路を探るフェリオと同じく、あなたは森の中を探っていた。けれど、少し引つかかったのです……。なぜ、あなたは、地上近くを探っていたの？フェリオは、空を仰いで、太陽の位置を図り、方角を探っていた。あなたは？木々の合間に、何を見つけてようとしていらしたの？」

シエナの言葉は、疑問形で紡がれるけれど、その答えをロジェから期待する色を持たない。既に、答えなど得ているのだ、と告げている。

「最後に……。わたしをここへ導いたのが、あなただ、ということ。襲撃場所に、というだけではありませんわよ。この秋猟会へ共に訪れる、と決めたときから、あなたの企みは始まっていた……。いいえ、わたしに近づいた時から、かしら？」

どう、と首を傾げる仕草は、可憐な少女のよう。しかし、瞳にこもるのは、冷たく突き放すような光。

「初めから、わたしが狙いだっただけですね……。……ただ、私自身を排除しても、意味がない。それで、一番に疑いが向けられるのは、イレエ様を掲げるリヴィウス家ですものね。だから、あなたは、わたしに近づいた。あなたとわたしの関係を公にした後ならば、ロジェ殿は、恋人を失った悲劇の人、となれるから……。わたしの死

に、リヴィウスが関係しているなど、疑いたくても、疑うことすらできない。あなたならば、感情と無縁の涙なんて、簡単に流してみせられるでしょうから」

二つの感情が、シエナの中で、心を食らう。燃えるような、激しい怒り。願うような、悲痛の声。

短い沈黙の後、ロジエは短い溜息を吐きだすように、乾いた笑いを漏らした。

「はは……。あなたは最後の最後に、正体を現すんですね……。敵いませんよ」

ふい、と下を向き、地に印された足跡を確認し、苦笑を浮かべる。再び向けられた視線に、シエナは、堪えられぬ、悲しみを感じてしまう。

見たこともないような、冴え冴えとさえた、青い色。

常に浮かぶ、ロジエの柔らかな瞳の欠片など、そこには存在しない……。

出来ることならば、予想が違えばよかった。向けた切っ先を、一番疑ったのは、シエナ自身。

思考に浮かんだ、一つの可能性に、まさか、と言えることもできた。それでも、止めなかったのは、フェリオを傷つけたその人を、許すことが出来なかったから……。

たとえ、間違いでも、その可能性を見て見ぬふりは出来なかった。目前に立つロジエを、複雑な心中をすべて込めた強い瞳で、睨みつける。

そんな、シエナの感情も、ロジエは気付いているのだろっ、彼もま

た、視線に鋭い色を乗せていた。

「……ええ。まさか殿下があなたに、これほどまで執着していると
は思いませんでしたよ。本来ならば、さっさと婚約者の座を降りて
いただいて、より良い形で御身を整えて差し上げられましたのに……
。いらぬ算段を取られました……。しかも、ここに来てまで、
殿下があなたを庇うとは……。本当に完敗です」

突きつけられた切っ先を物ともせず、からりと笑い声をあげるロジ
エに、初めて、恐ろしさを感じる。

「イレネ様は……？」

「イレネ？イレネは何も知りませんよ。あれも、駒の一つです。
まあ、わたしも駒に過ぎませんがね……。これを手引きしたのは、
わたしです。しかし、真の打ち手は……。所詮次男坊。捨て駒の一
つです……」

ロジエは笑顔で自分を捨て駒と言つてのけた。その様子に、シエナ
は我知らず、深く眉根を寄せていた。

『駒』

貴族として生まれ、政略のただなかに生きるのであるから、誰もが
知らず知らずのうちに、その役目を担うのは、悲しいが、当然なの
かもしれない。けれど、笑って、自らを貶めるような言葉を使うロ
ジエに、胸が軋みをあげる。

同情、かもしれない……。同じく、父の『駒』として動かされてきた
自分と、重ねた上で……。

「……わたしは、あなたを許しません」

シエナの言葉に、ロジエは笑みを深める。眼が醒めるほど澄んだ青
い瞳は、艶やかさを帯び輝く。

「もちろんです。ですが、シエナ様も、私たち同様、駒の一つだと
いうことを忘れないようにしていただきたいですね。……杞憂に過
ぎませんか？駒であることを意識しすぎたあまり、殿下のお気持ち
を受け入れられなかった、あなたなのだから……」

ロジエの言葉に、再び眉を顰めてしまう。雲一つない青天の空の色

をした瞳が、ひた、とシエナを捕えていた。
下唇をきりりと痛いほど噛みしめて、ともすれば、逸らしてしまい
そうになる視線を縫い止めた。

『秋狝会へ共に行きましょう』

言った彼の瞳に浮かんでいたのは、躊躇いの色だった。
彼が真実、躊躇ったのは、シエナを討つ、ということ。

彼がシエナに与えた言葉、全てが偽りではなかったのかもしれない。

憎らしいほど、辛辣な言葉の影には、彼なりの優しさがある。
憎めばいい——と。

それを、読み取れるからこそ、心が軋む。

「曲者を二人、捕らえました」

背後から、近衛兵の声がかかる。安堵したかのように、小さく息を
つき、ちらりと視線を送る。

「ありがとうございます。……恐らく隣国の装備を身に纏っているはずで

徹底的に、摸されているでしょうから、取り調べは慎重にね……」

「ははっ。本当に油断ならない人だ！ 全てお見通しなのですね」

乾いた笑い声を上げた、ロジエを、凍てつく視線が射抜く。

低い声音で、訣別の意をこめて、宣言を述べた。

「ロジエ・リヴィウス、あなたを拘束します」

13、真と偽り（後書き）

14、宵闇を照らす月

怯えて見下ろしていた景色に、不意に現れたのは、母が枕元で語ってくれた、おとぎ話に現れる、光の妖精だった――

早朝早くに起こされて、訳の分からぬまま、正装を整えられた。女の子達がよくするような、人形遊びのように、相手のなすがままになるしかない状況に、自然と苛立ちが募っていた。

使えの侍女が目を離れたすきに、窓から脱走したのは、もう我慢の限界だったから。

よく知る王宮の庭園を、なるべく人気の少ない道を選び、駆け抜けた。

一番最初に目についた木を無我夢中で駆け昇った。閉ざされた小部屋に飽いていたから、吹き抜ける風を感じていなかった。

ふと、自分の状況に気付いた頃には、遅かった。経験したことのない高所から見る景色は、そこへ踏み出す気持ちをあつさりと、挫いてしまう。

逃げだした手前、大声で助けを呼ぶことも、泣き叫ぶことも出来ない。それを恥ずかしいと思う、それだけの分別は持っていた。

ただ、風が吹きそよぐ、美しい庭園の情景を、恨みをこめた視線で、睨みつけることしかできなかった。

「ど、どうしたのっ!？」

突然、木の下から声が掛つたのは、そんな風に、途方に暮れていた時だった。

声の方向に視線をやれば、琥珀色の髪の女の人がいた。

王宮へ上がりたての侍女だろうか？

平素身の回りの世話をする者たちよりも、年若いように思えた。

けれど、幼いフェリオにとって、自分よりも上の女性の年齢を正しく図るのは難しい。ただ、掛けられた声が、彼らのそれよりも、高く、澄んでいた。

侍女か、と思えば、また、鬱陶しさが生まれていた。

母上に言われて、探しに来ただけだ……折角の自分だけの時間を邪魔された、と。

さっきまでの不安な心を柵に上げて、すぐに視線を遠くへと飛ばしてみせた。

意地を張っているなんて、意識もなかった。

けれど、現れたその人は、簡単にフェリオが置かれた状況を見抜いてしまい、気付けば、するすると、巨大な木の梢を登って来るころだった。

そして、彼女が侍女らしからぬ衣装を纏っていることに気付かされる。幹に擦れて、翡翠色の見事な絹地が、茶色く汚れる。

母上に見つかれば、叱られる、とフェリオがいつも気にして出来ないこと……ここへ上がって来る時も、気にかけていたことだった。

彼女は、それを、全く気にも留めず、ただ行く手を阻む、厚みのある生地を煩わしげに手で払いのけていた。

あつというまに、フェリオの元へ辿り着いた彼女は、にこり、と笑顔を向ける。

ゲイルに頼み込んで、一度だけ訪れた、美しい水中花の咲く、清流がみせた、深く清らかな川の色。翡翠色のその瞳が柔らかく細められて、小さな唇が美しい弧を描く。

言葉を発することが出来なかった……あまりにも、その笑顔が綺麗だったから……。

ふと、母上の話を思い出した。
暗い、暗い洞窟で、迷った一人の青年のお話。

ランプの炎も燃え尽きて、帰り道も、ここが何処かさえも、わからなくなつて、途方に暮れた彼の前に現れた、光の妖精。

自分の指先さえ見えぬ、真つ暗闇の中で、突然現れた妖精は、闇夜に輝く満月のように、眩しいほどの明かりを、青年に与えてくれた。輝くばかりの、彼女の笑顔が、物語の中の、妖精の光と重なる。

訳の分からぬ、胸の鼓動を隠そうと、強い言葉で、彼女の問に答えた。

そんなフェリオを、彼女は決して叱責しなかった。逃げだした、と知つても、決して声を荒げて、フェリオを攻め立てたりなどせず、ただ、優しい声音でフェリオの話を聞いていてくれた。

だから、『王太子になりたいなど、言っていない』と勢いのままに言つたときに、彼女が、突然声を荒げたのに、驚いた。

『自分が生まれたことから逃げてはダメ！』

叱責する声は強く、まっすぐに、胸に響く。

そうして得た、驚きの分だけ、彼女の言葉が大切なのだ、と胸に深く刻まれた。

目前に差し出された手に、躊躇してしまう。

触れれば消えるかと、思ったから……。けれど、握りしめた感覚は、確かにそこに存在して、自分の体温よりも少し低い掌が、優しく包み込んでくれた。

この光は、ずっと、自分の人生に寄り添っていくもの、と信じてい

た――

温かさが頬に触れる。

虚空を彷徨っていた思考は、その温度に、引き寄せられ、混沌の深みから引き揚げられた。

ふっと柔らかく撫でられていたそれが、離れた。

寂しさを覚えて、引き留めようと、自らの腕を伸ばそうと力をこめる。

「フェリオ？」

呼ばれる名が、その声が、耳を伝って、体に浸み込んでゆく。呼び掛けてくれた彼女の姿を認めたい気持ちだけで、重く閉じられた瞼を、こじ開けた。

闇に慣れた目に、光は強く突き刺さる。逆光を受けて、黒い影だけが、目に入った。姿をしっかりと捕らえようと、目を細めて、声の主を探す。

頬に体温が戻り、離れかけた熱が再び与えられたことに心が安らいでゆく。両頬を、細く柔らかかな掌で包まれていた。

「よかった……。傷は痛む？」

目前に翡翠色の瞳が映る。琥珀の髪が流れ落ちて、揺れるたびに、光を映し、輝く。微かに頷けば、シエナは、ふわりと、柔らかい笑みを浮かべるのだ。

「シ、エナ……」

「何？どこか痛い？」

かすれた声で、彼女の名を呼べば、心配げな表情を浮かべて、顔を近くに寄せたままに、問いなおされる。彼女の息遣いを肌で感じ取ることができた。

「フェリオ？」

呼ばれる名が、心地よい。

久しく呼ばれることのなかった、名前。

今まで、胸に秘め続けていた言葉が、心から、溢れていく。

「側にいてくれ……」

濃紺の瞳は願うように、シエナをじっと見つめる。

その視線に、シエナの胸は締め付けられていた。

見つめ返した先の、フェリオの面が、陽炎のようにゆらめく。

「無事で……よかった……本当に……」

熱いものが頬を伝い、顎先から落ちる。零れおちた涙は、フェリオの頬を濡らしていく。

討たれ、崩れ落ちた背から、感じた喪失の恐怖。掌から伝わる熱が、その存在を証しづけてくれる。

フェリオを失うと、思ったとき、シエナを縛っていた楔が、解き放たれた。

『責任』『義務』そんなことは、どうでもいい。フェリオが王太子であっても、なくても、関係ない。ただ、フェリオだけが、シエナにとっては唯一だった。

見て見ぬふりをしてきただけ、それは……ずっと、心にあった願い……。

「ええ……いるわ……ずっと、ずっと側にいるから……」

やっと、言えた、心からの言葉。

ぎこちなく、触れあう額から、互いの体温が溶け合う。それは、心に抱いていた、お互いの枷をも溶かしていった。

我に返って、赤く頬を染めたシエナは、所在なさげに、触れていたフェリオから、身を引く。同時に、頬に触れていた掌を、離そうとして、強い力に拒まれた。

びくり、と緊張が走り、手を引いてしまいが、全くの意味をなさな

い。

仕方なく、片手を包み込むほど大きな掌で、捕らえられたまま、大人しく寝台横に置かれた椅子に腰を下ろした。

フェリオはそのまま、身を起こそうと、体をよじるが、片腹に痛みを感じて、眉を微かに潜める。フェリオの異変を敏感に感じ取って、シエナは、掌を捕らえる手に、もう一方の手を重ねた。

「まだ、痛む？」

「いいや」

「うそ。深くは無いけれど、痛みは引かないって、ゲイルが言っていたわ。……もう少し休んでいて……わたしはここにいるから」

小さな子どもを言い聞かせるように、言うが、フェリオは一向に、瞳を閉じようとはしなかった。宵闇の瞳が、ひたとシエナを捕らえたまま、微動だにしない。

引きかけた熱が、頬に戻るのが感じられて、それを、フェリオに見られている、ということが、更に熱を上げる。

「……知っていたのでしょうか？」

沈黙に耐えきれずに、シエナが口を開く。

「ああ……」

あつさりと、応えたフェリオをみて、自分への呆れとも言えるため息が零れおちた。

これまでの、何気ない日常に感じた、極々小さな違和感。

「……思い返してみれば、なぜ気付かなかったのかしら、と思うわ。王宮に出入りするたびに護衛をつけられるし、ゲイルがわざわざ屋敷まで送ってくれる……普通じゃないのは明らかだったのに……」。

わたしが、狙われていたからなのね？」

フェリオは黙ったまま、ただ頷いてみせる。その様子から、シエナが狙われていたことに対する彼の感情が読み取れる。

「ロジェ殿のこと……気付いていたの？」

「途中から……。警戒はしていたが……向こうも中々尻尾を掴ませなかった。秋獵会にシエナが参加するのを機会に、何か動くのでは

ないか……とゲイルが言ったのだが……」

シエナを餌にすることなど、出来なかった……と、ため息交じりに言うフェリオの横顔は、疲労にも似た影が浮かぶ。

静かに、重なる両掌に、小さく力を込めた。

「……だから、招待状が届かなかったのね？」

「ああ……。招待状がなければ、参加することもないだろうと……まあ、無駄だったがな……。まさか、打ち手として、参加するとは思わなかった。知れたのは、当日だった。だから、慌てて、同じ組にさせたんだ。万が一に備えて、ゲイルを隠密に控えさせていたのだが、あの疾走のせいで、あいつも見失ってしまったようだ」

「ううん。彼はちゃんと、間に合ってくれたわ。……何故かしら……

…あの時、必ずゲイルがそこに、いてくれる気がしたの……」
思わず上げた声を、思い出す。

なぜだろうか。知るはずもないのに、ゲイルが必ず側にいる気がしていた。予感、ではなく確信だった。

そう感じることに、シエナは首を傾げる。理屈ではなく、シエナのもっと深い部分に、彼はフェリオを必ず守ると、根付いていた。

そして、首をかしげるシエナに、フェリオもまた、ゲイルがいると思えたからこそ無茶が出来たのだ、と笑った。

あいつには、言えないがな、と悪戯めいた光が宿り、また二人して密やかに笑い声を上げた。

くすくす、という忍び笑いが止んだあと、ふっと、シエナの表情に一拍の空白が過った。

「そう、か。……ゼーんぶ、仕組まれていたのね。わかってなかったのは、わたし、だけ、か……」

シエナが自嘲するように、浮かべた苦笑に、フェリオの眉が微かに歪められる。

「……わたしは……シエナがあいつを選んだのかと……思っていた。シエナを守ろう、と巡らした護衛も、お前にとっては無用なのでは

ないか、と……」

彼の面に浮かぶのは、今し方、シエナが浮かべていたものと、酷く似ていた。

その表情に、堪らなくなつて、やんわりと触れあう掌に、ぎゅつと力を込めていた。それを、みとめて、フェリオの掌にも、力がこもる。シエナよりも、大きく、強い掌が、全てを包み覆いかぶさる。

「でも……戻つて来てくれた……」

固く、強張っていた、その面が、柔らかく緩んだ。

つきり

不意に、この状況に似合わぬ痛みが胸をつく。

掌の内にある、自分のものよりも一回り大きなその、温かみを感じ、心を埋めるのは、温かな喜びであつた。

なのに、痛むのは、喜びあふるものと同じ、心。

一度放してしまった手は、もう二度と繋ぐことはないと思つた。

永遠に続くであろう、胸の痛みも、幾度となく押し寄せるであろう後悔の念も、全てを受け入れる覚悟を決めて、彼の手を放した。

なのに、今、彼の手は、わたしと繋がっている。

そうして、柔らかく、甘い笑みを与えてくれる。

そのチャンスをシエナに与えてくれたのは、皮肉めいているが、紛れもなくロジエだ。

なのに、それなのに

ロジエには、再びの機会など与えられない。

最後、躊躇いをみせたはずの彼には、もう二度とチャンスがないのだ。

彼は、シエナにチャンスを与えてくれたが、シエナが、彼に与えたのは、絶望への序章だ。

ときめく心のその隣で、ロジェへの後ろめたさが心を潰す。相反する二つの気持は、互いが互いの感情を膨張させ、ぐるぐると痛みを急激に悪化させた。

ふっと、温かさが、冷えた頬に触れた。

そっと、羽が撫でるように、優しく、柔らかく、上下する。

暗い感情を、解きほぐすかのように与えられる熱に、甘えたい、という思いと、それを与えられる資格はない、と反発する思い。

と、意外な衝撃が、頬を刺した。

「っ！はひふるほっ！？」

突然、頬をつねられて、驚き、上げた声は、間抜けな音にしかない。視線の先には、呆れと苦笑を浮かべた、濃紺の瞳。

「また、くだらないことでも考えてるんだろうな、て」

「ふだらなふなんは……」

むきになって反抗しても、響くのは、間抜けな自分の声だ。怒気を、自分自身の声にそがれてしまい、その不様さが恥ずかしくて、口を噤んでしまう。

そんなシエナの葛藤の一部始終を、フェリオは楽しそうに口の端を上げて見つめていた。

「今度のことで、よおーく分かった。シエナは周囲の状況を、正確に読み取ることができるが、自分が絡んだ場合は、全くの盲目……馬鹿だ、ということがな」

につと、絶対に、周りの貴族達には見せないだろう、悪戯めいた笑

みを浮かべて、楽しそうに、ぎゅうと一際強く、シエナの頬をつねる。

「ふえひお……ひひゃい……」

自分の思考をくだらないと一蹴されたこと、馬鹿と言われ笑われたこと、そうして頬を刺す痛み。全部に耐えきれずに、情けない声が漏れてしまう。

そんな風に、しおれたシエナの様子が、可笑しく、フェリオは、くつくつ、と笑い声をもらした。

シエナは、笑われたことに、また機嫌を損ねたのか、拗ねた表情を浮かべるが、怪我人相手に無茶なことではできないと、耐えるように、下唇をかみしめた。それが、さらなる笑いを呼んで、漸くフェリオの笑いが治まる頃には、シエナが抱いた黒い影など、小さく心の片隅に追いやられていた。

強くつねっていた頬を、最後、軽くつまみ上げて、その力を抜いた。けれど、掌が頬を離れることはなく、今度は優しく労わるように、そこを撫でて行くのだ。

穏やかな笑みを浮かべたフェリオが、語りかける。

「ロジェ・リヴィウスに同情する必要はない。あれは、あれが信じた、自らの責任を果たそうとして、こうなったのだから」

まさか、本当に考えが読まれているとは、思ってもみなかったシエナは、その言葉に瞠目する。

そして、その驚きの理由までも、当然というように、フェリオは笑ってみせるのだ。

「なにしろ、お前がどうこうできることでもないし、する必要もない。というか、シエナが手を差し伸べるなど、わたしが許さないもう、決めた。……わたしは、許さない……本当に、シエナがロジェに懸想していたとしても……」

強い語調で呟くフェリオの言葉は、シエナを驚かせるばかり。瞳を零れるほど大きく開き、それでも足りないのか、小さく口が開く。それに、と続けて言う言葉に、驚きをこえて、愕然とした。

「王宮がシエナを手放す訳がない。わたしが、今、周囲の信頼を得られているのは、全てシエナが導いてくれたから……ということらしいからな」

「誰が、そんなこと……」

「父上と母上だよ……。息子を捕まえて何を言うかと思えば……。シエナが隣にいないければ、わたしは自分の立場も理解できない無鉄砲な放蕩息子だとさ」

まさか

ありえないと、ゆるゆると首を振って、否定してみるが、重ねた否定を突き付けられてしまう。

「事実だ。現に、なぜ婚約者一人のために、ゲイルを、近衛の一団を、護衛に付かせることができるんだ？わたしの権限だけでは、そんな勝手は許されない」

近衛兵の本来の役割は、王家の人間を守ること。

その兵力を、一介の貴族の娘に割くなど、もってのほか……。のはずなのに

暗に、それらが示すのは、シエナが王族と等しいと捉えられている、ということ。その一員に含まれている、ということ。

驚き、その上の感情は何というのだろう。

声を出すことも、ままならない。

ずっと信じていた現実に、秘かな裏があつたなんていうなれば、悟り。

新しい、現実の扉が、目前に開いている

「イベルスの力など関係ないんだ。シエナは、シエナとして、既に、深く王宮に根ざしてしまっている。……ってことで、逃げられないんだよ、お前は。あの日、わたしと出会ってしまってから、シエナの運命はきまつたんだ……。『生まれたことを否定しては、持ってい

るものの全部を捨ててくはない……』——それは、運命から逃げるな、ということなのだろう？」

唐突に、フェリオの表情から、笑顔が消え、強い決意を示すかのように、鋭い光がもった。

向けられる熱は、やはり、シエナの心を強く揺さぶる。逃げたい、と思い続けたその視線を、今は恋い焦がれて、熱を逃すまいと、必死で追う。

「……許さないからな、もう、わたしの側から離れるなんて」

フェリオの言葉に、シエナは、瞳を零れおちそうなほど見開いて、真紅の薔薇ほどに、頬を上気させる。

ふっと、彼の表情が緩み、浮かべられた笑みの美しさに、目を奪われる。

その隙について、手を強く引かれた。その勢いのまま、寝台に臥すフェリオの上に、押し掛かるようにして、倒れ込んでしまう。とくり、とくり、と響くのは、自分の心音が、それとも相手の心音が。

熱をもって火照った頬に寄せられた、大きな掌に、力がこもる。

隠すものは

もう

何もないのだから

重なり、与えられる、自分とは違う熱に、シエナは素直に心を預けた。

終章

秋深まる森の木々は、赤く燃える。

庭園の木々も同じく色付き、祝いの席に、花を添えている。

見上げれば、秋空が夕焼けに赤く染まり、色付く木の葉と相まって、更に情景を趣深いものに变えていた。

武人ということで、ものの風流などとは無縁であるが、殊に、この日に限っては、感じる美しさが、際立って、心の琴線に触れる。

と、部下の不審げな視線に気づく。取り繕ったように一つ咳払いをして、式典へと視線を戻した。

隊をまとめる立場である自分が、警備を忘れ呆けていては、面目が立たない。

舞い上がる思いを押さえて、きゅつと腹に力を込めて気を引き締める。

壇上に、強い意志を秘めた、真っ直ぐな背を向け立つ、黒髪の青年が見えた。その背に、無茶を言っては手を焼かせた、幼い頃のフェリオの面影を見てとって、口元に頬笑みが浮かぶ。それを見た部下が、また不審げに、眉を潜めたが、いつもならば、その散漫な注意力に叱責するところを、今日は無視する。

微かに見える横顔からは、時折見せていた幼さなど微塵も感じさせぬ、フェリオの強い意思が読み取れた。

国王の目前での礼を終えて、ゆっくりと、フェリオが正面を振り返る。

その濃紺の瞳に、優しい色が浮かんだように見えた。

すう、と伸ばされた腕の先に、ひとつの影。

長く伸びた影の元に立つのは、願った彼女。

夜会では結い上げていることの多い琥珀色の髪を、今日は長く背へと流す。歩みを進めるたびに、それが風に柔らく乗ってそよぎ、夕日の赤い光に照らされて、一層の輝きを放っていた。

差し出された掌に、彼女は迷うことなく自らの掌を重ねる。

近く身を寄せた瞬間、フェリオが何事かを囁き、二人して、頬笑みをもらした。

シエナは小さく、フェリオをねめつけてみせてから、乗せた掌をつたい、フェリオの腕に手を伸ばす。ゆっくりと身を返して、共に、正面を向いた。

その瞬間に、割れんばかりの歓声が、湧きあがる。

空気を振動させ、伝わる、歓声の大きさに、一瞬にして、肌が泡立った。

この時を、どれほど待ち望んだことか。

幼い二人の姿を、ずっと見守り続けてきた。予想もつかない無茶をしてしまう二人に、呆れて、叱責することもできなかったことも幾度もあった……。

それでも、二人の時にだけ通う、お互いを唯一とする空気を、守りたいと願っていた――

身を寄せ合う二人は、壇上へと続く長い階段を、ゆっくりと下っていく。

人々の歓声の間に消えていく、二つの背を、瞬きも忘れて、見つめていた。

やがて、完全にその姿が消え、歓声が遠く離れていっても、その視線は揺らぐことがなかった。

不意に、沈黙を破り、視線が空へと注がれる。

見上げる空は高く、夕焼けの沈みゆく向かいの空には、既に高く昇った、美しい月が、琥珀色の光を纏い、宵の口の訪れを告げる空を、明るく照らし始めていた。

おわり

終章（後書き）

ほんとうに拙い作品に、最後までお付き合い下さり、ありがとうございました。

最後に白状しますと、この作品は、わたしにとって、完結まで書くことができた最初の作品です。

お話のラスト、あまりにもベタな展開で、失望された方もいらっしゃるかもしれませんが……。けれど、『月下美人』のスタートは、そのベタなラストからでした。

『王道のベタな小説を書こう』と『超大作でなくても、楽しめるお話を』ということを目指に始め、なんとか書きあげることができました。

毎日、まわるカウンターに後押しされて、読んで下さる方々の声が、こんなに励まされるものなのか、と初めて実感し、ようやく完結まで、辿り着けました。

本当に、読者の方々のおかげで、書きあげられた作品です。

最後までお付き合い下さり、ありがとうございました。

かしわ

*** 番外編* 朧月夜 1 (前書き)**

おひさしぶりです。かしわ、です。

皆様の声に後押しされて、番外編に手を付けてしまいました。
蛇足にならなければ、よろしいのですが……。
お楽しみいただければ幸いです。

* 番外編 * 朧月夜 1

気が付けば、惹かれていた。
彼女と言う存在に。

常に、隣に寄り添う、美しく咲く花のような人。

手を伸ばせば、いつでも、甘く柔らかな笑みで応えてくれる。

彼女は、僕の、僕だけのもの――

青い風が吹き抜ける平原に、二つの影が、まるで同じ風のように、
駆け抜けていた。蹄が、地を抉り、駆ける。リズムよく響く二つの
音は、広い平原にこだまし、遠くへと響き渡っていた。

「見て。今日はすごく、空がきれい」

馬上から振り返った少女の顔には、晴れやかな笑みが浮かんでいた。
下ろせば、腰まで届くほどの長い髪は、今は一つに束ねられ、まっ
すぐに伸びた背に一筋垂らされている。風になびくその一筋は、光
に輝き、琥珀のその色が、黄金に変わる。

その不思議を、ずっとフェリオは、シエナが光の精だからだと思っ
ていた。

先をかけていく彼女の背は、ふと見逃せば、もうそこには無いのか
もしれない、まるで、夏の宵にしか会えない、螢火の様に。だから、
必死でその背を追いかけていた。置いて行かれないように、その光
を見失わないように、と。

「うん、綺麗だ!」

「ね、無理をしても遠乗りに出てよかったでしょ?」

「……でも首が痛いや」

「ふふ、そうね。どうしても、上ばかりを見上げてしまっわ。そろそろ、降りる？」

その呼びかけに、ゆっくりと、手綱を引き寄せて、緩めたスピードとともに、こくりと小さく頷いてみせた。

青草の香りが鼻先をくすぐる。日の光に暖められた、大地は緩やかな温かさを持って小さな体を包み込んでくれる。

そこに、直接腰を下ろし、体を委ねれば、自分が大地の一部であるかのような錯覚を覚えた。

隣には、同じように大地に腰を下ろし、吹き抜ける風を感じているシエナの姿がある。フェリオが、そんな風にふるまう女性がいることを知ったのは、シエナに会って初めてだった。フェリオの知る女性には、いつもきれいに身を固め、扇の下で嫣然とした微笑みを浮かべているような貴婦人達か、身の回りを整えてくれる形式ばったことしか話してくれない侍女たちくらいだった。

その、どちらにも属さない、奔放で強く、そして真っ直ぐな女性は、思いがけずフェリオの前に突然現れて以来、ずっと隣で寄り添い続けている。

「で、今日は何を習ったの？」

「今日は、東部の税収割合、かな？レイリアス卿の所領を例に挙げて、東部の国民の生活と——……」

シエナの言葉が始まる、授業のおさらい。

退屈で、いつも逃げ出したいとばかり思っていた授業が、シエナに出会ってから、パズルのピース一つ一つを、手に入れるような、ワクワクとした思いが生まれるようになった。授業で得た、ピースの一欠けらは、シエナとの会話の中で、繋がり、一枚の情景となって現れる。

その面白さを知ってから、もう、授業から逃げ出したいとは思わ

なくなっていた。フェリオにすっかり手を焼いてしまっていた教師たちは、その急激な変化に、しばらく殿下はご不調なのか、と医者たちに聞いて回っていたらしい。

「レイリアス卿はね、質素倹約が信念なの。だから、所領の民にもそれを敷いている。例えば、東部は都に近い北部や西部よりも、冬の気温が比較的気温が高い。領主は、ある程度の寒さの備えがあれば冬は越せると考えているから、他地域からの羊毛の取引を制限しているの。でも、実際はそうじゃない、領民は、冬を越すにはやっぱり羊毛が欲しいのよ。でも、他領から入ってくる羊毛は少ない。そこで……」

「あ！だから、東部では羊毛の生産が盛なんだ！！」
授業で聞いた、生産量の図が脳裏に浮かんで閃いた。なぜか、東部では、その需要に反して、羊毛の生産が盛んだったのだ。

「正解。自分たちで生産しちゃってわけ。しかも、他領に、高く買い取らせることができるから、利益も生むのよ」

一石二鳥でしょ？と笑うシエナの瞳は、面白い喜劇を見るときのように、無邪気に輝く。

そんな風に笑うシエナが大好きで――
つられるように、フェリオも笑顔を浮かべていた。

礼儀作法、武術、学問、もろもろの授業を以前は嫌い、逃げ出そうとばかりしていた。そんなフェリオの姿を見ることはもうほとんどなかった。少しでも多くの知識を身につけようと、進んで教師たちに学を請う。そのすべての影響はシエナにあった。シエナと出会ったからのフェリオは、理想的な王太子として成長しつつあるように見えた。ある点を除いては……

「シエナっ！！」

大きく息を吸い込んで、ありったけの声で、名前を呼んだ。そうして、振り返った彼女が答えるのも待たずに、その体に飛びつく。

「フェリオ！相変わらず、元気ね？」

恐らく、かなりの衝撃を受けたに違いない彼女は、それでも、ふふと笑みをこぼして、飛びついたその背に細い腕を回す。抱きとめれば、フェリオは面をゆっくりと上げて、にっかと満面の笑みを浮かべた。

ほんの数日前に会ったばかりなのに、1日会えないだけで、心が沈んでしまう。それを両親や仕えの者たちは、愛らしいと笑うけれど、フェリオにとつて、その1日は本当に悲しい時間なのに、それを他愛もないと笑われるのは心外だった。こうして、シエナに会えた喜びを露わにして纏わりついてしまうのも、当然なのに。

10も過ぎた少年がみせるには幼い様子に、周囲の侍女たちは無礼と知りつつも思わず苦笑を浮かべてしまう。

いつまでたっても、シエナに甘えてばかりいて、子供っぽさの抜けない王子に、幾度か注意を喚起する者もいたが、それでも、その一点だけを除いて、あとは完璧な振る舞いを身につけつつあるフェリオに、それ以上強く否定することはできなかった。自然に抜けるでしょう——と苦笑を浮かべつつ静かに見守るだけだった。

「どうしたんだ？今日はいつもよりも到着が早いな？」

細い彼女の腰に纏わりついたまま、ぶらんぶらんと、体を揺らす。

「ええ。だって準備が必要でしょ？」

「準備？なんのだ？」

首を傾けて問うと、シエナは美しい微笑みを顔に浮かべてみせる。

「夜会の、よ」

一瞬、その美しく可憐な笑みに騙されて、そのまま頷きそうになった。

「……えっ!!」

「素敵な衣装をターシャが用意してくれてるんだって? 楽しみですよ」

「嫌だっ!!」

そう笑みを深めるシエナの言葉を、大声で拒絶し、この場から逃げだすために、しがみついていた腕を解き、彼女から離れようとした。「!!」

「逃がさないから」

けれど、それは、先を読んだ彼女に遮られてしまう。シエナの腕は既に、フェリオが逃げないようにと、フェリオの体をしっかりと捕えてしまっていた。

につこりとして見せるシエナの頬笑みが、いつもと違って、背筋を冷やす。

嫌だっ、と眉根を寄せて、首を左右に振れば、彼女の美しい眉もまた、小さく潜められた。

「フェリオっ!! いつまでも駄々を捏ねないのっ!! 夜会でのお付き合いは、大切な王家の公務の一つなのよ」

「やだよ!! 僕はあの貴族たちの軽々しい集まりになんて出ないからなっ!!」

「こらっ! 暴れないのっ!!」

じたばたと、体を擦じって何とかその腕の拘束から逃れようとするが、非力なシエナの腕であっても、二人の体格差は明らかで、それはなかなか叶わない。

夜会に参列しろ、との命は、ずっと国王である父から言われていたことだった。

年の頃10に近づいた頃から、散々王子としての自覚を持つために、貴族との交わりに参加することを強要された。それは、狩りであったり、貴婦人達とのお茶会であったりした。

初めは、訳も分からず、ただ引きずり出されるままに、その集いへ

参加したが、一度知ってしまえば、二度と行きたいと思うことはなかった。

媚びへつらいの言葉、片隅で交わされる、影の企み。自分に向けられるのは、利用してやろう、という気持ちににじみ出た、大人の甘い視線と言葉だった。

頬笑みを浮かべて、贈り物を献上いたしましょうと囁かれる言葉に、フェリオも、初めは素直に頷いていた。

しかし、隣に控えるシエナが、柔らかな笑みで、それを婉曲に断るのだ。

なぜ？と、自分のもらえるはずだった、鞍や弓が消えていくのを、少し荒立った気持ちで問えば、少し悲しげな色をその翡翠色の瞳に浮かべて、シエナは答えてくれた。

彼らは、あなたを道具としか見ていない——と

それからだ。恐ろしい、と置いてしまったのだ、自分に向けられる視線を。

だから、貴族の集まりには行きたくない、突っぱねていた。中でも、夜会は、夜の闇にまぎれ、策略が飛び交い、フェリオに向けられる念にも、暗いものが多い。

自らの振る舞いに十分注意するように——

命を出した父自身からかけられた言葉は、ただ、そのまま、自らの粗野な振る舞いをたしなめるものだと思っていたが、その言葉の裏に潜んだ真意を、悟り、身が震えた。

あれは、幼いフェリオが貴族の道具として利用されることの無きように、という警告だったのだ。

怖い——

「
……」

逃げようと、必死でもなく。逃がすまいと必死で捕らえる。

二つの視線がぶつかった。

「あなたが出ない、と言ったからとして、それが叶うわけではないわ……ターシャ！用意をお持ちして！！」

「っ！！いやだああああっ！！」

結局散々駄々をこねて分かったのは、宣言のように、ぴしゃりと告げたシエナの言葉から、結局逃れるすべはない、ということだった

一段高い、上座に据えられた席に座すのは、仏頂面の幼い王子。

眉間に寄せた皺を隠そうともせず、正面に広がる華やかな世界を、憎々しいばかりの視線で、睨みつけている。

「殿下……もう少し柔らかな表情を……」

「無理」

すぐ後ろで、警護に控えるゲイルが渋い声で、フェリオに進言するが、とうのフェリオは、あっさりとその言葉を切って捨てた。

人形のように、好き勝手に着飾られた体は、窮屈で重く、動きづらかった。狩りのように、自由に馬を走らせることも出来ないし、お茶会のように、好きなお菓子があるわけでもない。ただ、窮屈な衣装に身を包み、一段高い上座から、庭園に広がる人々の集いを見つめ、時折やって来る貴族の挨拶に耳を傾けるだけだった。

「ゲイル、退屈だ」

「……もう少しご辛抱下さいませ」

「できないっ！もう十分役目は果たしただろう？帰っていいか？」

「殿下……まだ、一刻も経っておりませんが……」

「なにっ！！……まだ、そんなものなのかあ……」

へたり、と脱力して、掛ける椅子に沈み込む。明らかな落胆の表情を浮かべたその顔には、退屈して時をもてあそぶ子供の表情が浮かんでいた。

「……良いお顔ね、フェリオ殿下」

掛けられた声に、敷かれた紅の絨毯へ下ろしていた視線をあげる。

「……シエナ……」

壇の下、少し離れたところに立つ、淡いクリーム色のドレスを纏ったシエナの姿があった。ふわりと浮かべる笑みは、日ごろ見せる悪戯めいたものではなく、春先に咲く蔓薔薇のように、儚く、可憐に

光る。

「ご機嫌麗しゅう、フェリオ殿下。本日はお招きいただき、ありがとうございます」

そうして、シエナは、他の貴族と同じような形式だった挨拶をしてみせた。

そんな、シエナの様子に、フェリオの表情は益々不機嫌に変わっていく。

フェリオ殿下——そう呼び、一枚壁を隔ててしまったように、距離を保った振る舞いを見せる。貴族の集まりに加わったとき、シエナの纏う雰囲気は、いつもフェリオに見せるものとは、一変するのだ。大貴族イベルス家の一人娘で、かつ王太子の婚約者、シエナ・イベルス。

「立場として相応の立ち居振る舞いをしているだけよ」と、からりと彼女は笑って見せたが、フェリオはそれが気に入らなかった。フェリオにとって好ましいシエナは、王太子のフェリオにも遠慮なく檄を飛ばし、一緒に野を駆けまわってくれる、彼女だった。

「ま、気持は分かるけれど……。それほど、退屈かしら、夜会は」「退屈だ」

即答したフェリオに、シエナは苦笑を浮かべた。

シエナに呆れられているのを知って、なお、駄々を捏ねてしまう。年の割に、甘えが抜けない、と度々母に言われ、自覚もしているが、一度意地を張ってしまえば、容易に解くことはできなかった。その相手がシエナならば、尚更のことに。

「もう、僕は帰る！」

ぷいっと、そっぽを向いて、言い捨てた。流石のシエナも、いくら公の場でも、叱責しなくてはならないだろう。ちらりと、視線だけを動かし、シエナを盗み見る。彼女の被る仮面を剥ぎ取ってみたかった。

「……お楽しみはこれからのにね……帰っちゃうのかあ……」
はあ、と至極残念そうにつぶやく彼女の姿が見えた。

「……お楽しみ？」

意外な反応に、首を傾げる。ちらりと好奇心が首をもたげた。

「……残念だけど……殿下を無理やり引き留めることはできないわね。……ゲイル、お願い。殿下を連れて行って差し上げて——」

「わわわっ！！嘘っ！！まだ、大丈夫だからっ！」

「流石でございますね」

「なあに？」

「いえ……」

背後で小さく交わされる言葉を不審に思っ、振り返る。

「なんだ？」

見上げるとゲイルは大きな壁のようだ。いつもは屋根に並ぶレリーフに似た強面の表情を浮かべている顔が、心なしか和んでいた。

「さあ？ゲイルの独り言のようよ。さ、お楽しみが待っているわ……」

ふわりと微笑むシエナにどこかはぐらかされた気もしたが、告げられた“お楽しみ”に興味を引き付けられ、背を押されるまま夜の光と闇の中へ踏み出した。

二人、並んで庭園を歩けば、自然に人が集まってくる。掛けられる言葉に、フェリオはびくりと小さく体を揺らしてしまう。それは人が気付かぬほど微かだけれど、隣に立つシエナには、はっきりとわかった。

「フェリオは、貴族たちの策略が怖いよね？」

視線を前に向けたまま、シエナがぽつりと呟いた。

「べつ、別に怖くなんかない！！」

むっとしたフェリオが、シエナに反論するように向きかえると、柔らかない声で、視線はそのままと正されてしまった。剥れたままのフ

エリオの背に、シエナはそつと掌を添える。

少し冷えた夜の空気に、彼女の温もりは温かい。

「……苦手ってところかしら？でも、フェリオ、夜会は嫌なことだけじゃないのよ。貴重な実践の場なのだから、利用されるんじゃない」

ほら、とシエナは視線だけを先へ向けた。あるのは、よくみる貴族の令嬢たちの一集団だった。数人で集いあい、枝先に群れる小鳥たちの様に、高いとも言える声でさえずりあっていた。

「ね、面白いでしょ？」

「へ……」

間の抜けた音が口から零れ落ちた。

「まさか……あれが、お楽しみ……？」

「ええ」

意味が分からずに、その光景を凝視したが、そのどこにも、面白いと興味をひくような要素を見つけられることはできなかった。もしかして、と不穏な空気が包む。

僕を、騙した……？

「シエナっ！！」

「彼女たちの身につけている物に注目してみて。例えば、董色のドレスを纏ったあの人……」

文句を言おうと口を開いた瞬間だった。シエナは相変わらず、きらりと好奇心を湛えた瞳で、フェリオを促してみせた。

「年頃と、私の記憶にはない顔だから、きっと今日が夜会デビューね。ほら、胸元に、大きなルビーの石を付けているでしょ？あれは、北部のハーヴィル地方でだけ産出されるルビーね、たぶん。それに、あの大きさから言ってかなり裕福な家柄。夜会にわざわざ身につけるということは、彼女の実家はハーヴィル地方を治めているマルス家の令嬢か、マルス家と親しい有力貴族ってこと。」

すらすら、とシエナの口から紡がれる言葉を、あっけにとられて聞いている。フェリオの思考が追いつく前に、彼女の興味は次へと移

る。

「はい、次。あっちにいるのは、エリアウスのご令嬢。彼女の父の所領は北西部の国境に近いところにあるのだけど……確か、税収はそれほど多くなかったはずよ。でも……」

標的の令嬢は、年若く、まだ、夜会に参加するようになって間もないように見えた。その装いは一見すれば、周囲と変わらないように思う、が一つ、フェリオは引っかけかりを覚えた。シエナが深く頷く。「気付いた？彼女の身につけている装飾品、あれは、隣国でしか産出されない貴重な石。家格で見れば、あまりにも高価すぎるものね……ここから、推測されるのは……」

娘の縁談を考えて無理をしても分不相応な装飾品を身につけている、とも言えるかもしれないが……より深読みするとすれば——くるり、と思考が働き、一つの考えが浮かんだ。

「……税収を誤魔化している？」

「正解。父親が税収を誤魔化して申告しているのかもしれない。先日見かけたエリアウス卿はそれほど華美ではなかったのだけれど……さすがに年頃の娘までには、仮面の質実さを押しつけることができなかつたのかしらね。何にしても、陛下に進言してみたほうがいいわ」

につ、とみせる笑顔は、日常覗かせる、悪戯めいたものだった。フェリオにだけみせてくれる、シエナの表情に、心の中に強張っていた何かが解れ、温かいものが、胸に広がっていく。

「どう？面白くなってきた？せっかく身につけた知識なのだから、机上の空論だけでは終わらせないで、しっかり、現実にかさなくちゃね？夜会はその実践の場にぴったりの。だって、みんなが自分の権力を示すために、最上の装飾で集うんですもの」

確かに、夜会は社交の場としては権力を示すには格好の舞台である。若い娘たちから、老齢にかかる政治の重鎮までが顔を連ねることもあるこの場合は、各々が自らの立場を少しでも優位に保とうと、互いが互いを干渉する。

その絵からは、日常では見ることでできない、隠された彼らの素顔を窺い知ることができる。

けれど、それを意識するものがこの中にどれほどいるのだろうか――？

正直に言えば、幼いフェリオにとって、彼女の言うほど面白さを感じることはできなかった。けれど、楽しそうに、貴族たちの勢力図をその装いから推測していくシエナの様子を見られることが、フェリオの気持ちを明るくし、自然に同じく力関係を読み取ることに夢中になっていった。

「あとは――」

さりげなさを装いつつ、貴族たちのチェックを進めていたシエナの視線が、ぴたりと止まった。

「……シエナ？」

言われたとおりに振る舞いを取り繕っていたフェリオだが、シエナの様子の変化を感じ取って、隣に立つ彼女へと視線を移した。けれど、シエナは、フェリオの視線に気づくことなく、視線の先にある何かに気持ちを奪われたまま。

「……ベル……さま……？」

「え？」

言葉を零し、何かに引き寄せられるように、半歩足を進める。

すいと、その体がフェリオの位置を少し越えた、その時だった。

「シエナ様――」

静かな声が、背に掛けられた。

真っ直ぐに伸びた背が、びくりと跳ねて、その歩みが止まる。

「……申し訳ありません……。失礼いたしました、殿下」

振り返った横顔に、冷たい色が浮かべ、そのまま深く腰を折り、最敬礼の姿勢を取った。

「シエナっ!？」

成行きの方からないフェリオは、慌ててシエナに合わせて自らもその場に腰を下ろそうとしたが、それをゲイルの鋭い声が止めた。

「フェリオ殿下はお気になさらずに。……シエナ様、お立場をお忘れなきように」

あまりにも冷たいゲイルの物言いに、フェリオは眉をしかめた。少なくともフェリオの前でゲイルがシエナに対して取る態度は、常に敬いの心を含むものであった。

何があつたのか分からず、戸惑いを見せるフェリオに、シエナは柔らかない笑みを向ける。

「はい……。さあ殿下、参りましょう——」

そうして、そのまま何事もなかったのかのように、フェリオを促して夜会の闇へと歩みを進めていく。

けれど、フェリオの気持ちには、霽がかかったまま。温かい春の日差しにも似たシエナの笑顔が、このときだけは、フェリオの心を温めることはできなかった。

番外編 朧月夜 3

はじめてのことだった――

あふれかえる人波の中に、見知った人の姿を見つけた。一瞬垣間見えた姿は、願望がみせた幻か……。

ただ、彼に会いたい、と心の奥底で、ひそかに願っていたのは本当だった。

会いたい――

会えるのであれば、幻であつてもいい……その気持ち自然と足を動かしていた。

自分のしでかしたことに気付いたのは、ゲイルの冷えた声が耳に届いてからだだった。

王太子に背を向けるなど、日ごろのシエナでは、考えられないことだった。ゲイルの叱責は、シエナが一貴族の娘に過ぎない、ということを思い出させると同時に、今までにはなかった心の声を気付かせた。

はじめてだった……状況も、自分の立場も……フェリオの存在をも忘れ去ったのは――

そして、心に決めていた決意が揺らいだのも……

わたしの道は、まだ決まっていらないのかもしれない――

実現するとは半ば信じていなかったことが、今実現へと向かってい

る。そのことに、シエナは少しの戸惑いと、大きな責任を感じていた。

けれど、その思いを面に出すことなく、鏡の中に映る、着古され擦れたシャツに袖を通すフェリオの姿に、柔らかな微笑みを向けていた。

「よかった。おかしくわないわね」

ふわりと、微笑むシエナに対して、フェリオは戸惑いを露わに、後ろを振り返る。

「シエナ、これは何だ？今日は、イベルス家での茶会、と聞いてだぞ……」

「ええ、その予定よ……表向きはね」

「表向き？」

前日から、フェリオは城都にあるイベルスの屋敷に身を寄せていた。それは、イベルス家が内々に催す茶会に出席するためだった。

そう信じていたフェリオは、シエナが告げた言葉に首をかしげた。一方のシエナは、いぶかるフェリオを後にして、その装いを確かめていく。

「うん、少し大きいけれど、その方がより現実味があるから、ちょっといいかしら？……でも、やっぱり靴が新しいわ。ね？他にはないのかしら？」

控える侍女に、問いかける。その言葉を聞いた侍女が室外へと駆けていき、次に現れた彼女の両腕には、使い込まれた子ども用の皮靴がいくつも抱えられていた。

「ありがとう。……そうね、これ、と……これかしら？フェリオ、こちらを試してみて」

説明する気配のないまま、につこりと笑みを浮かべているシエナに、フェリオは思わず声を荒げる。

「シエナ！いい加減教えてくれっ……！」

その声に、きょとん、と刹那目を丸くし、ああ、と何かを納得したように一つ大きく頷いた。胸に生まれる不安を覆い隠して、シエナ

は完璧な笑顔を見せてみせる。

「街へ、行くのよ」

『城都を歩いてみたい』

何度フェリオは駄々をこねただろうか。その度にシエナは「いつかね」と言葉を濁して、やり過ごしていた。言葉通り、その時期はまだ来ていないと思っていたから。

フェリオは人々の暮らしに興味をひかれているのだとは、分かっていたが、実際に城都に下って、それ以外の影響を受けることをシエナは恐れていた。

それを、王夫妻も気付いていたに違いない、シエナが側についてから少し緩められたフェリオの行動への制限も、城都へまで広がることはなかった。

しかし、フェリオが夜会へ出席したことを機に、流れが変化した。

貴族たちを相手に、怯えることなく、会話を紡いでいく彼の姿は、少年がみせるには十分すぎるように思えるほどだった。

その姿を見た、王夫妻はおそらく今が契機だととらえたのだろう、ゲイルを通じて、シエナに声が掛ったのだ。一度フェリオを城都へ下ろしてはみないか、と。

確かに、それまでは躊躇っていた、見知らぬ世界との接触が彼にもたらず影響が、今ならプラスに働くかもしれないと思うことができた。

けれど――形の见えない不安は確かに、シエナの心のすみで疼いていた。

イベルスの屋敷には当然様々な者が出入りする。交流を持つ貴族や、所領の状況を知らせる領民の代表、そして、商人。

「いい？わたしとフェリオは商家の姉弟。父の取引でイベルスを訪れたけれど、商談が長引いたから、先に街へ下って、父を待っている……という設定ね？」

興奮冷めやらぬ様子で荷馬車の幕から顔を覗かせているフェリオの服の裾を、牽制のつもりで引く。先程から、シエナがいくら説明を解こうが、一向に耳を貸す気配がない彼の姿に苦笑が漏れた。

「シエナ！街には往来で舞を舞うものがあるのだろう？それに、楽士や、物語りを紡ぐものも……！」

「……ええ」

何度も何度も説明を繰り返しても、本当に分かっているのか、反応の薄いフェリオに苦笑しつつ、緩みかける気をなんとか引き締めようと強めの声を放った。

「……フェリオ一つだけ約束して」

「いいぞ」

それでも、彼は外に顔を出したまま、振り返らない。その様子に呆れてため息が漏れた。

ぎゅっと不意を突いて馬車の枠に置かれたフェリオの手を取る。そうして、驚き、振り仰いだ濃紺の瞳に、低く抑えた声音で告げる。

「決して、この手を離さないで」

一拍おいて、こくりと小さく頷く姿に、シエナもまた頷きを返した。

「あなた、よほどの田舎から来たと思われているわよ」

べつたりと、店先のジョーウィンドウに張り付き、中の品物を眺めるその姿に、からかいを含めた言葉を投げかけた。

品々がこの様に売られる様を見たのが初めてなのだろう。フェリオにとって衣服は与えられるもので、目前に並べられたものをただ指し示すだけなのだから。

「知ってはいたが、本当にこの様にして売られているのだな……」
「不思議？」

「うーん……品がいつもよりも豪奢に見える……」

「ふふふ、確かにそう見えるかも……」

視線を彼の高さに合わせて、二人でジョーウィンドウを覗きこむ。その姿は、傍から見れば仲の良い姉弟が肩を寄せ合い、物見見物を楽しんでいるように見えた。

興味の赴くままに駆けだそうとするフェリオを、シエナは繋いだその手で懸命にとどめようとするが、フェリオの力は予想以上に強く、半ば引きずられるようにして、付いて行くしかなかった。

「シエナ！道に馬が並んでいるぞ？なんだ？祭りか？」

「え……ああ、あれは……」

説明しようとして口を開きかけたときだった。

わあっ、と背後で賑やいだ歓声上がる。振り返ると、雑踏の先に群がる子ども達の姿が見えた。

「何だあれは？」

「さあ……あら？もしかして楽士達かしら？えっ？……あ！」

つないでいた手が、不意に離される。

慌てて伸ばした手は何もつかむことができなかった。

駆けだしていく小さな背中。

追いかけては――

「フェリ――！」

掛けようとした声を、シエナは途中で止める。

まあ、いい。目の届く範囲にいれば――

実は密かにゲイルから数人の護衛を借り受けていた。ちらりと、人の溢れる往来を眺める。それと知れる者の姿は見えないが、おそろく目の届く範囲には控えているのであろう。ゲイルのことだ、そのあたりは抜かりなく人選を行っているに違いない。

ほっと短い息をつき、フェリオを見失うまいと、また視線を前に向けようとしたときだった。

ブラウンの影が瞳の中を通り過ぎた。

人があふれる中央通りから一筋わきの小道にたたずむシエナには、人波の中に見つけたそれは、刹那流れゆく清流にのった木の葉に似て、一瞬ののちには、先へと流れ去り、その姿が何であったのか、確かめることさえ難しい。

確かめる方法は、ただ一つだけ……

無意識のうちに、中央通りの中へ走り出していた。

ひょこつりと、頭一つ抜け出した後ろ姿に、風に揺れる、柔らかく波打つブラウンの髪。

確信と共に、鼓動が高鳴る。

「ベルナル様っ!!」

振り返り見えた、その顔に、顔が思わずほころんだ。

きよとん、と丸くして声の主を探す、彼の穏やかな色の髪よりもさらに淡いブラウンの瞳が、シエナを捕えて、ぴたりと止まった。

「……シエナ嬢？」

瞳が徐々に大きく見開かれていく。

ぱあっと花開くように、シエナの面に笑顔が広がる。彼が呼ぶ自分

の名前に、胸が跳ねた。

「ああ、やはり。なぜこのような所にいらつしやるのですか？」

抑える余裕もなく、上がる呼吸と高鳴る鼓動を、そのままに言葉を紡いでしまう。

ブラウンの柔らかくウェーブした髪は、いつものようにくしやりと寝癖がついている。言葉とともに、ふわりと緩められた頬、淡いブラウンの瞳は柔らかな弧を描いて細められる。彼の穏やかな人柄が滲み出た笑顔は、なぜかシエナの心を締め付けてしまう。苦しさ、切なさ……そして、同じくらい大きな喜びが心を染めるのだ。

「……シエナ嬢？……そのような格好でなにを？」

「え……あつ！……こ、これは……！」

自分の身なりを見下ろして、言葉に詰まった。

商家の娘らしく、と努めた装いは、日常ベルナルに見せるものは似ても似つかないほど簡素なものだった。

ただ、一つにまとめられただけの髪は、余りにも雑に思えてしまう。思わず手で髪を撫でつけて、少しでも身なりを整えようと試みるが、そんな風に明らかな動揺を見せるシエナを見て、くすくす、と小さな笑い声が漏れ聞こえた。

見る間に、顔面の温度が上昇していく。

「また、屋敷から逃げ出されたのですか？お父上が心配していらしていますよ？」

「べ、ベルナル様もなぜ街に？」

「え？ああ、先生からの頼まれごとです。研究に欲しい書物を求めてきてほしいと頼まれまして」

「まあ？今回は何を？」

そう促せば、彼の瞳がきらきらと輝きを帯びる。

夢中で話す彼の様子に、視線を逸らすことができなかった。もっと見ていたい。その思いに駆られて、自分に課せられた役割もすっかり忘れてしまっていた――

「ところで、シエナ嬢？こちらへは、ひとりで？」

一通り話し終えたベルナールがふと、言葉をもらした。

「……え……」

ベルナールの放った一言が、現実へ引き戻す鍵となった。

振り返った先には、人々があふれかえる雑踏。

そして、その中に見えるはずの、宵闇の少年の姿は、消えていた。

「シエナ嬢っ！」

ベルナールの声も耳に届くことはなかった。

シエナの心を占めていた不安の正体――

必死で足を動かし、大通りへと急ぐ最中、シエナはその姿を悟ることができた。

――あれは、揺らぐ決意への不安だったのだ――

* 番外編* 朧月夜 4

ずげー！

うわぁ、剣を食べたぞ！！

悲鳴交じりの賞賛の聲が、そここで聞こえるなか、フェリオもまた旅芸人たちの動きに目を奪われていた。

「これから、城に行くんだってさ」

「え？」

押し合うようにして見ていた隣の少年が話しかけてきた。フェリオよりも高い背に、日に焼けた肌が快活そうだ。

そして、彼もフェリオと同じく身の丈に合わないシャツを着ていた。

「街で芸をするのは、その売込みだって親父が言ってた」

視線は彼らから逸らすことなく、興奮して熱を含んだ口調で話す。

剣が、長身の男の口元から出てくると、おおっと周囲の歓声が一層大きくなった。

なんだ、見れるのか、とそう思った直後、その余裕が自分には無いだろうことを思い出した。

恐らく彼らが舞うのは、貴族たちが集まる宴の席であり、フェリオは、それを楽しむ余裕などないのだから――

周囲をうつつとうしい貴族たちに取り囲まれて、上辺だけの会話の中から、なんとか真実を読み取らねばならないのだから気を緩める暇などどこにもないのだ。

つまり、純粹に芸を楽しむにはこの機会を逃せない。決意も新たに、視線を彼らに戻そうとしたときだった

「いいよなぁ〜王子なんて、きつと毎日あんなの見れるんだぜ。お

いいもの好きだけ食って、いつでも舞を見ることができて……
ほんと、いいよなあ」

なにげなく、ぽつり、と少年が零した呟きが、胸に刺さった。

「っ！！そんなことない！！」

考えることなく、反論していた。

「なんだ？」

突然、刃向ってきた隣人に、とうの少年は眉をひそめた。

「いくら、間近で見れたって、楽しむ余裕なんてないんだ！王子には、そんな余裕なんて許されてないんだよ！必死で知識を詰め込んで、遊びだつて、狩りだつて、体を鍛えるっていう義務の一つさ！それなら、少しでもいいから、他に気を取られずに夢中になれる一瞬のほうが、僕ならうらやましいよ！！」

少年にとってフェリオは、ただ訳のわからぬ反論を口にする子どもだ。面倒そうに、視線はそのままに声だけで応える。

「はあ？義務ってなんだよ？見れるもんは見れるんだろ？一緒じゃねえか。お前、貴族のやつらを見たことないのか？あんなでっぷりと太った体、きつとたらふく食ってんだぜ？その親玉の王子が遊んでねえわけないだろが、望みなんて思いのままさ」

「でも彼らには、彼らの役目があつて！」

「役目？お前も商人の子だろ？やめとけよ、あいつらの味方しても得はねえって……あ！ほら火だ！！」

ぼん、と少年の掌が、フェリオの腕に触れた。

年の割に大きなその手は、爪の先が黒く色付き、皮膚は固い。

「っ容易く僕に触れるな！！」

自分のそれとは、まったく異なる感触に、悪寒が走り、思わず腕を強くひき振り払ってしまうと、奇妙なものを見たかのような瞳がこちらを向いていた。

「はあ？なんだお前、貴族にでもなつたつもりかよ」

眉間にしわを寄せ、言葉を吐き捨てた彼は、呆れたような溜息を一つついて、また群衆の中へと身を紛れ込ませた。

そして、あっさりと、周囲に溶け込んでしまう。

——落ちた視線の先にある掌は、白く柔らかそうだった。

歓声の只中にいるはずなのに、音はフェリオの耳には届かない。シ
ンと冷えた心地と同じく、無音の世界に包まれていた。ただ、景色
だけが目に映り、城のバルコニーから憧れ眺めていた時と同じよう
な疎外感をもたらしていた。

心を冷えた風が通り過ぎた。違うのだ、自分の生まれた場合は、ここ
とは大きく異なる。

シエナの言葉が心に浮かんた

あなたは、恵まれている——それに気付かなくてはならない……

彼女の笑顔が見たかった。自分の存在を肯定してほしくて、彼女が
立っている、店先を振り返った。

心が、ひやりとまた温度を下げる。

「シエナ？」

あるはずの彼女の姿はそこにはなかった。

たたつと小走りに、駆けだし、道行く人々の合間を縫い進み、その
顔を見上げるが、求める人の影はどこにもなかった。

名前を呼んではいけない。

こんな雑踏の中で、不用意に彼女の名前を呼んではいけないと理性
では分かっていたが、それでも耐えきれぬ恐怖が心に黒く浮かびあ
がり、零れ落ちそうになる。

「シエナ……」

景色が揺らいだ。

ぐいつと拳で目をこすり、視界を明らかにするが、あとからあとから揺らぎは生まれてきて止めどない。
くるくると天と地が反転するかのように思えた。

シンとした雑踏。

無音の世界。

ここは、僕を拒絶する。

生温かい雫だけが、慰めるように頬を伝った。

立ち止り、その場にうずくまりかけたとき

「帰りましょう」

そつと、背に置かれた温かさの主は、大きな壁の様にフェリオの背後に立ちふさがっていた。

ずっと願っていた城都は、フェリオの期待を満たしもし、裏切りもした。

ボクとカレラはこんなにも違う――

ボクは……カレラよりも、幸せ？

「シエナはっ！！シエナをここに呼べ！！」

期待して戻った城にも、シエナの姿はなかった。それが一層フェリオの気持ちを荒だてた。

荒れた感情をそのまま言葉に乗せて吐きだす。

ここ数年、少なくともシエナがフェリオのそばについて以来見せた

ことのなかった癪癪に、どうしてよいか分からず、おろおろと戸惑う侍女たちの中で、ゲイルだけが厳しい表情をむけたまま、直立していた。

「なりません」

「なぜだ？ 僕が望めば何だって叶うんだ！ シエナに会いたい、ここに連れてこい」

「いたしかねます」

当然というように、言い放つフェリオに、ゲイルは眉ひとつ歪めず完璧な無表情で断りばかりを口にする。

城の裏門からフェリオを出迎えたゲイルに、シエナはどうした？ と問えば、しばらくは城への出入りを禁じている、とあっさりとした答えだけが返ってきた。それで納得するわけもなく、つめよれば、シエナがフェリオを危険にさらしたためだ、と告げられた。

「僕が、手を離れたんだ。離してはならないと、約束したのに……だから、シエナは悪くない」

「存じております。報告であがっておりますから」

「なら！」

「それでも、シエナ様には、あの方の立場というものがありますゆえ」

「そんなの関係ない！ 僕が命じればいいんだろ！！ ゲイル！ シエナを連れて来るんだ！」

「いたしかねます」

同じ受け答えしか返さないゲイルに、フェリオの苛立ちは募っていくばかりだ。

カレラは言ったのに
望みなんて、思いのままさ

「……僕は王太子だ！！」

その言葉に、初めてゲイルの表情が動いた。片眉を微かに歪め、口を開きかけて、止まる。

奇妙な緊張と静けさが室内を覆っていた。

「慎みなさい、フェリオ」

静寂を破ったのは、前触れもなく響いた一つの澄んだ声だった。

「母上……」

ゲイルの背後から現れた姿を見て、フェリオの体に緊張が走った。少女のように高く甘い声の主は、それに似つかわしい、可憐な姿をしているが、彼女が容姿から想像できないほど伶俐なことも身をもつてしっていた。

ふわりと甘く微笑むが、その笑みを浮かべたままに、貴族たちへ鋭い通告を渡すのも同じ彼女なのだ。

「10も過ぎて……いつまでも子どものままではいられませんよ」
微笑む表情は、優しさにあふれているはずなのに、なぜか威圧感をあたえる。

「ゲイル、ありがとう、下がっていいわ」

そう言つて、傍らに、膝をつき控えたゲイルに片手で小さく示す。

「あとは、まかせて、ね」

無邪気に小首をかしげてみせれば、それに反論できる者がいるはずもなく、扉で封じられた部屋には、フェリオと王妃の二人だけが残された。

「あなたが癪癢を起すのは、本当に久しぶりだわ」

そつと、王妃はその小柄な身をさらに屈めてフェリオの側で見上げるような姿勢を取った。

「……僕が、手を離れたんだ。離してはならないと、約束したのに……だから、シエナは悪くない」

悪戯のいいわけをするように、唇を少しとがらせて、そうこぼす。

癪癪はおさまったが、不機嫌は隠しようがなかった。

「シエナは、自分から城への出入りを禁じるように申し出ましたよ」
「え……？」

フェリオは、シエナが一方的に罰を与えられたとばかり思っていた。驚き、挙げた視線がなぜか労わるような王妃のそれとぶつかった。

「隣には、カロン家のご次男がいらっしやいました。街で偶然見かけたそうよ？それで、氣をとられた、と……」

「カロン家？」

「ええ、お若いのでしょうか、しっかりした方のお見受けしたわ。シエナを氣遣っているのも好ましく見えましたし……ちらりと耳にした噂は本当のようね」

そこで、王妃はいったん言葉を切り、フェリオの瞳をじっと見つめた。

「……シエナに１８になりました。フェリオ、わたくしは１６の時に王室に嫁ぎ、１８であなたを生みましたよ」

「……母上、思い出話なら、後でいいでしょう！」

王妃の美しい眉が小さく潜められた。

「……そう、あなたはまだ、わたくしが今述べた意味もわからぬほど、幼いのですよ。……彼女の手を離してあげること、考えなさい」

宥めるように、その濃紺の瞳に語りかける。

「シエナは、聡い少女です。恐らく、自らの道行も読んでいることでしょう……わたくしも既に彼女には十分の役割を果たしてもらったと思っています。彼女が望むのであれば、新たな道へ解放するべきだとも思うのです……そして、それができるのは今が最後ではないか、とも……わかりますか、フェリオ？」

王妃の言葉にフェリオはかおを俯ける。

「……わからない……シエナは僕のものだろう……」

ぐうつと眉根をよせて、首を振る姿は頑なで……王妃の手がそつとフェリオの頬に伸びる。

「フェリオ？」

けれど、フェリオはただ首を振り続け、その頑なさが緩む気配はなかった。

「そう……なら」

王妃は、華奢な掌をその小さな頬から離れた。

ずっと、姿勢を正し、今度は突き放すように幼い王子を見下ろす。

「あなたが、彼女を守りなさい。繋いだ手が離れることのないように、見張り、守り続けなさい。街に降りて、思い知ったでしょう？皆が望むものを、あなたは容易く手にできますが、それを享受するには、それなりの見合った対価が必要なのです……けれど、なかなか人はそれには気付いてくれないでしょう……。あなたの幸福にシエナが必要だというのならば、望みなさい。そして、そのために必要な対価をしっかりと果たしなさい」

「母上……？」

見上げた母は既に王妃の顔に戻り、フェリオを強い光を持って見つめていた。

涙で濡れた瞳は、希望を求めて彷徨う。

「シエナは……戻ってくる？」

子どもじみた問い掛けに、温かな掌を伸ばすこともできた。

「あなたは、王太子なのでしょう？」

けれど、一言だけを残し、そのまま背を向けてしまう。

残された言葉の意味はわからなかった。

王妃の言つとおり、駄々を捏ね、求めるばかりのフェリオは幼いのだろう。考えても、きっと王妃の言葉の真意を導き出せはしない。濡れた瞳を、ぐいっと乱暴に拳で拭った。

唯一今、分かること……彼女が隣に立っていること、それが当たり前でないと、初めて知った。

「シエナ様、紹介したい方がいるんです」

先生に促されて会ったひとは、一言でいえば――変わっていらした。身形を構うということを知らないのか、有力貴族の子息だというのはその装いは質素、いや粗末とも言えるものだった。

皺の目立つシャツに、大抵のことを受け流せるシエナでさえ、意識しなければ眉を潜めてしまいそうだった。

？

「シエナ嬢、あなたの瞳は、先々代のイベルスの奥様譲りですね」

そんな彼は、へらりと目を細めて、シエナを会うことも不可能な血縁者に喻えてみせた。そして、彼女も美しいと評判でしたが、あなたには及びませんね、と下心などまったく感じさせない素直な賞賛の言葉をくれた。

？

――お会いしたことがあるのですか？

ええ、書物の中ですがね――

？

その本気とも冗談ともつかない言葉に、思いがけず惹かれてしまったのだ。

？

次男坊とは、不要物ということなのだろうか？

それでも、彼は立場に卑屈になるわけでもなく、ただひたすらに自由に見えた。

「先日、街で隣国から仕入れたという新種の麦を目にしましてね……

……え？もちろん一人ですが？」

そうして、学問からの興味であっても、政治というものをよく知る彼は、ときにその容姿からは考えつかないほど鋭い指摘をしてみせ

た。

「あれはエルセリア産の麦よりも数段良質ですね。流入することによって……国内の生産家は打撃を受けるでしょう。早い段階で高い関税をかけ、同時に国内での普及を進める必要がありますね」

？

そんなところが、悲しくも父の目に止まってしまったのだらうと思う。

？

「カロンの次男を養子に迎えようと思う」

？

一瞬浮かんだ期待——それはすぐさま、霧の様に消えた

？

「兄としてイベルスに継ぎ目を迎えれば、おまえの婚約者としての立場も安定するだらう？」

？

兄？

欲しくない、そんなもの

？

ばかげた思いつきが浮かぶ

わがままを通せば、もしかしたら——

？

「シエナ嬢」

その笑顔が、欲しい

その声が、欲しい

？

手を伸ばせば、届くのだろうか？

？

？

？

ぱんっ

痛みのあとから、熱が広がる。

「イベルス卿！！」

「ベルナル様……よいのです……」

身を乗り出して父に詰め寄ろうとするベルナルをシエナは止める。手を上げられたことは初めてだった。動揺は思いのほか大きく、ベルナルがもしこの場にいなければ、涙を零していたかもしれない。「ベルナル殿、これはイベルス家の問題。そなたには関係のないこと。……それとも、自らカロン家に騒動を持ち込もうと？たださえ、そなたを持て余していたお父上のこと、そんなことをしては、カロンの名さえ失いかねないだろうに……」

乾いた笑いを浮かべて、冷たい視線を飛ばす。

ぐっと思を詰まらせ、ベルナルらしからぬ苦い表情を浮かべる。

「しかし……」

「これ以上、何も言わぬ方が身のためだろう？……シエナ、お前とはまた改めて話そう」

父がダンダンと大きく、音を立てて立ち去るのを、シエナはただ耳だけで感じていた。

？

？

下ろした視線の先に、力を込め震える握り拳があった。

溢れる怒りをどこへやっていいのかわからない……怒りとは無縁の、穏やかな彼の苦しみがその白い拳に現れていた。

思いがけず、その拳に手を伸ばしていた。

「……王室も、イベルス家も……あなたは、ごくごく普通の令嬢だというのに……」

ぐぐつと眉間に皺を寄せて、吐き出すように言葉を落とした。握り拳の力は更に強くなる。

「わたしの責務なのです」

ベルナルに対するゲイルの言いようを思い出して、苦笑する。

「なぜ？あなたはそれでよいのですか？」

シエナの言葉にベルナールは訴えかける。

やんわりと重ねていた掌は、気付けば大きなベルナールの手の中で強く握りこまれていた。

「王家との婚約は、あなたにとって……イベルスにとっても、この先有益だと本当にお思いなのですか？」

痛いほどの強い力に

ああ……この人は真実頭の良い方なのだ実感する。

彼は気付いているのだ。王家との婚約が先の見えぬものだということを。

「よいのです……14の時に覚悟は決めました……」

ふわり、と笑みをつくる。けれど、ほろり、と堪えたはずの涙が零れ落ちた。

ベルナールにそれを見られたくはなかった。視線から逃れるために面を逸らす。

その上から、言葉が続いた。

「……私は、あなたの聡明さを尊敬しています……しかし、今はそれが悲しい……本当の意味で普通のご令嬢であられたならば、このようなことに巻き込まれはしなかったでしょう……」

ゆるゆると首を振ってみせれば、華奢な手を覆う力が一層強まる。

「シエナ嬢……もう少し私を頼ってはくれませんか」

「わたしのせいで、貴方様にご迷惑をおかけすることはできません……」

「しかし、道は他にも……」

一瞬、力が緩んだ。

違和感を覚え、顔を上げた瞬間――

「……私と、共に歩みませんか……」

淡いブラウンの瞳がそこにあつた。

掌を覆う熱が完全に離れる。

そして、改めてゆっくりと差し出される掌。

「あなた自身の幸せへ……私が導かせてはいただけませんか？」

なんて残酷な選択なんだろうか……

ベルナル様……あなたはなんて残酷なのでしょう？――

？
差し出されたその手は、簡単にこれまで積み上げてきたものを崩し去ってしまうだろう。

？
それでも浮かんでしまう

十分役目は果たしたのではないか――

別の道を、選べるのではないか――

？

わたしは、わたしをまだ諦めきれていないのだ。

あるとき、あの大木の上で心に定めた気でいた。

？

でも、揺らいでしまうのだ。

それは、この方に出会ってしまったからかもしれない。

？

この方は、わたしを破滅へと導くのだろうか――

？

風変りで、それでいて鋭さを兼ね備えた彼は真摯な瞳をシエナへと向ける。

？

それでもいい――

？

静かに瞼を落とせば、闇が広がった。

視界を閉ざすことで、自らを取り巻く諸々から逃れられる気がした。

？

伸ばした指の先に触れた柔らかな熱は大きくシエナの掌を包み込む。

？

それでも

？

せめて逃れようと伏せた瞼がもたらす闇は小さな少年の面影を宿し、
掌を包む熱の差異とともにシエナの心を静かに締めつけるのだった

下唇を少し噛めば、口の中が酷く乾いていることに気付いた。それでも、この部屋では目の前のカップに手を伸ばすことすら躊躇われ出来ずにいた。

？

艶やかな敷布に包まれた一室。

幾度となく王城を訪れているシエナであるが、ここへ通されたことは数えるほどしかない。

王城の中でも一際豪奢なつくりでありながら、また調度品の数々は部屋の主の好みに合わせ可憐いて絢爛。それらは自ずと部屋の主を想起させる。

この部屋へ通されるたび、甘やかな乙女のような雰囲気にもかかわらず、鋭い緊張に包まれてしまふのはそのせいかもしれない。

？

不意に隣に控える侍女が、視線を扉へと向けた。その動きに合わせ、シエナも腰を上げる。

静かに開いた扉から現れたのは数人の侍女を引き連れた可憐な天使

？

「お久しぶりね、シエナ」

体の前で重ねた手に無意識のうちに力がこもる。

「はい、王妃陛下」

現れた天使は見えぬ羽で舞うようにふわりと席に着く。そして、あなたもと視線で促され、シエナも腰を下ろした。

？

「せっかくの休暇なのに呼び立ててしまってごめんなさい」
そう言いながらも、王妃はくすりと悪戯っぽく微笑んだ。

礼節を重んじるならば、ここは主に合わせて笑みを浮かべるべきところだった。

けれど、シエナには王妃に言わなければならない言葉があった。

？

「……申し訳ありませんでした、陛下……」

シエナがまず口にしたのは、謝罪の言葉だった。

フェリオを街へ置き去りにしてしまったことを詫びる機会をシエナは得ていなかった。あの時は、ゲイルにまるで叩き出されるようにして城から去るしかなかった。

「申し訳ございませんでした……」

かわいらしく首を傾げる王妃に向かい、一層深く頭を下げた。

そこへ小さな溜息が聞こえた。

「もう……今日はあなたとおしゃべりしたくって呼んだのよ。幼すぎる王子のことなんて——」

につこりと浮かべる笑みは、純真無垢な天使そのもの

「無視」

続く言葉は微笑みには相応しからぬ辛辣さを含んでいた。

そうだった、この方はその天使の笑みのまま刺を突き刺すのだ。

シエナは返すべき言葉が見つからず、ただ目を丸くして王妃を見ていた。

？

鋭さを見せてもなお少女のような瞳のままの王妃。

目の当たりにして当惑を見せるシエナを気にする風もなく、静かに置かれたカップに手を伸ばす。

カップが下ろされ、王妃の瞳がシエナを捕えたとき、その瞳に映る色が変わっていた。

？

「……そうね、確かに彼から目を離れたことはただけじゃないわ。でも、あの子にとっては貴重な経験になりました。そして、あなたにとっても……違うかしら？」

頬笑みは変わらず春の日差しのように。けれど瞳の色はシエナに何かを問いかけていた。

「ところで……」

唐突に話が変わる。

「カロン家のご子息はお元気？ ちらりとお姿を拝見したけれど、とても素敵な方ね。それにとっても優秀な方だわ」

びくり、と体が勝手に反応していた。

当然王妃も気付いたはずなのに、それに触れることなく、平然とまたカップを口へと運ぶ。

「きっかけとしては最適だと思うわ」

何の、とは決して口にはしない。

しかし、それがシエナの進退に関わることだと瞳の色が示していた。
？

既に取ってしまった彼の大きな手の温もりが思い出された。

体を包む幸福感。

どうしても、欲しかったのだ。

だから、手を伸ばしてしまった――

？

それでいいと、この方は言ってくれるのか……

？

「陛下……」

迷いと懇願が複雑に入り混じった感情。

ただ、誰かの許しが欲しかった。

？

「シエナ。私あなたが大好きよ」

意外な言葉に、瞬間頭が真っ白になる。

真っ直ぐに向けられる眩しい笑顔に気が付いたとき、心が苦しいほど締め付けられた。

「賢く美しく……少し風変わりなところも、大好きだわ……だから、あなたがあなた自身の幸福を求めるのなら……止めはしないわ。あ

なたの進むべき道を行きなさい。あなたはそれができる人よ」

瞳にこめられた光を受け取る強さが今のシエナにはなかった。

温もりを失った紅茶に不安げに揺れる自らの姿が映った気がした。

王妃が評価してくれていたことは純粹に嬉しいが、道行を選択する自信を持てずにいた。

？

「……とは言え、私も愛息は愛おしいのねー」

ふっと、侍女たちの動きが目に入ったのか、王妃が零しかけた言葉をとめた。

中でも年かさの侍女が王妃に耳打ちをする。

まあ

小さく零してこちらへ幼子が見せるような拗ねた顔を向けた。その表情は暫く目にしていない小さな少年の面影を確かに宿していた。

「ごめんなさいシエナ。少し用立てができたらしいわ。共は出来なければでもゆつくりしていらしてね」

恐らく、急な諸侯の謁見請求でも入ったのだろう。

王城ではよくあることだった。シエナなどの会話よりも遥かに重要なものがここでは溢れているのだ。

急かされるように部屋を去る王妃を見送るために、扉の前へと付き従う。

扉を抜ける瞬間、思い出したように、振り返った。

「……そうだわ、西の庭園の花々が今見頃なのよ。是非」

ぱたん、と扉の向こうに天使の頬笑みは消えた。

？

ふう、と詰めていた息を小さく吐く。

？

恐らく、この招待でシエナの謹慎は解かれたことになるのだろう。

元々、表立って言い渡されたものではないし、どちらかといえば自主的な面の方が大きかった。

？

あのまま父のもとへ行こうと言うベルナールをシエナはなんとかとめた。

せめて自分の謹慎が解けるまで待つて欲しい、と。

ベルナールはすぐに頷いてくれた。

そして、つらいことがあるのなら、何時でも駆けつける——と一言を残して

？

筋道を通したい、というのはもちろんあった。

しかし、それよりも真実シエナの心を占めていたのは、躊躇いだっ
た。

今少し……猶予が欲しかったのだ。

？

けれど、謹慎が解かれてしまった今、その猶予ももう残されてい
ない。

？

シエナは王妃の言葉の意味を図りかねていた――

？

？

？

王妃の言葉通り、庭園の花々は今が盛りのようだ。

吹き抜ける風に乗り香りが鼻腔をくすぐる。

そういえば、フェリオと初めて会った時も、この辺りだった。

懐かしさに、瞳を細めて木々の梢を眺めていた、その耳に控えてい
た侍女の声が密やかに届いた。

――シエナ様

？

振り返った侍女の背に幼い皇子の姿が見えた。

？

「フェリオ……」

？

ひさしぶりね

？

元気だった？

？

あの日は、ごめんなさい

？

色々な言葉が浮かんだけれど、どれから選べばよいのかも分からない。

？

その間にフェリオは御付きの者たちを視線で辞すように促していた。そして、言葉を失くし明らかな戸惑いを浮かべるシエナへ、にこつと満面の笑みを浮かべてみせる。

「シエナ！街はすごかったよ！！旅芸人がいてね、口から火を吐いたり、剣を出したり！！人々もね、僕が皇子だなんて誰も気付いてなかったよ！それでね……」

小さな体に興奮をいっぱいにして、自分の思いを伝えようとする。

？

ふつとそんなフェリオの面に影がよぎる。

静かに二人の間の距離を詰め、不安げな色を浮かべた瞳で下から見上げる。

微笑みを浮かべていたつもりでいたシエナは、その瞳に自分の本当の表情を悟らされた。

？

シエナ

小さく零して、言葉を選ぶように一度間を置く。

？

「……シエナ、養子を迎えるとゲイルから聞いた」

フェリオへ話が伝わっていることは、予想をしていた。

「ええ……ベルナル・カロン様……彼をイベルス家に養子としてお迎えするの」

言葉を紡いでから、これがあの時以来初めてシエナからフェリオにかけた言葉であることに気付く。

「……いいなあ」

フェリオの答えに小さく首をかしげる。

「だって、兄上ができるんだろう？」

その答えに瞳を大きくする。

「ええ……」

兄上。

彼が？

イベルスの名を継ぐ？

ならば――

きつとゆくゆくはその隣に立つ女を迎えるのだろう……

小さな子どもたちに囲まれて――

？

思い浮かべて、ずきんと胸軋んだ。

いいえ、これで、イベルスは安泰なのだから――

でも――わたしは？

？

美しい家族に囲まれたベルナル様へ、役目を終えた孤独でみすばらしいわたしは、どのような顔をお見せできるというのだろう

？

「嘘……。欲しくない。彼には、兄になんてなって欲しくないの。

でも……選べない……」

涙が零れ落ちた。

「ごめんなさい。ごめんなさい、フェリオ」

崩れ落ちるようにその場へうずくまる。

わたしは、いつでも離れられるのだ。

「……許して」

この小さな手を離してしまうことは、なんて容易なことなのだろう

「……シエナ？僕、何か嫌なことを言った？シエナ？シエナ？」
フェリオが名を呼ぶのが分かったが、応える事が出来なかった。

？

やっぱり

——わたしは、わたしを諦めきれない

？

唇を小さく開こうとした、その時だった。

「僕、頑張るよ！夜会にもちゃんと出る！諸侯との謁見もちゃんとするよ！！もう、もう逃げたりしないから……」

悲鳴にも似たフェリオの声がそれを止めた。

「シエナ、僕が側にいるよ。泣かないで……」

しゃくりあげながらも、必死で言葉を紡ぐ。

「ほんとは……街は、すごく……すごく怖かった。僕なんてなんにも知らないんだよ。彼らの欲しいものも、何のために生きるのかも……全部、考えても知らないから分からない……」

はらはらと涙を零し、ぎゅうつと小さな拳を握りしめる。

さきほどまで街でのことを明るく興奮気味に話していた姿からは見えなかったフェリオの不安。

やはり、街へ下ろしたことは彼に大きな戸惑いを生んでしまったのか。

労わりを込めて、その小さな拳に手を重ねた。すると、固い拳が緩み、小さな掌がシエナの指先を捕えた。

「シエナ……また、街に行こう、僕にはまだ、知らなければならぬことが多すぎるよ……」

フェリオは涙に濡れた瞳に小さいけれど輝きを灯し、前を向く。
？

彼女の手を離してはならない。

しっかりと握りしめていなければ、この手は容易に離れてしまうのだ。

彼女が隣に立っていること、それが当たり前でないと、初めて知っ

た。

？

彼女は、僕の、僕だけのもの――

だから、絶対に離さない

？

こめられるだけ、精一杯の力を指先にこめる。

？

「共に行こう……」

？

小さな掌からは想像のつかないほどの力がシエナの指先を捕える。

少年の真っ直ぐな瞳がシエナの心の奥底へと明りを照らした。

？

濃紺の瞳に宿った微かだけれど熱い灯火が、心を覆っていた霧を晴らしてゆく。

？

そうなのだ

彼の行く末は、まだ広がりゆくのだ。

わたしには迷う道などありはしない。

あの時、梢の先で心に定めたことは、まだ成し得てなどおらず、フエリオの瞳に宿った明りはこれからようやくと輝き始めたばかり。

「……ええ……」

？

わたしの役目は、まだ終わりではない

？

「あなたが、そう望むなら――」

？

フエリオが望む限り……

この手を離すことは、わたしには、初めからできるわけがないのだ。
？

重ねた掌のお互いの熱がとけゆくまで、強く力をこめる。

？

この手を、僕は二度と離さない――
この手を、わたしは二度と離せない――

？

？

？

*** 番外編* 朧月夜 6 (後書き)**

永らくのお付き合いありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7177h/>

月下美人

2011年6月21日11時08分発行